AVマルチチャンネルアンプ

VSA-1016V

インターネットによる登録のお願い

http://www.pioneer.co.jp/support/

このたびは弊社製品をお買い上げいただき、まことにありがとうございました。弊社では、お買い上げいただいたお客様に「お客様登録」をお願いしています。上記アドレスからご登録いただくと、ご使用の製品についての重要なお知らせなどをお届けいたします。なお上記アドレスは、困ったときのよくある質問や各種お問い合わせ先の案内、カタログや取扱説明書の閲覧など、お客様のお役に立てるサービスの提供を目的としたページです。

取扱説明書

安全上のご注意

●安全にお使いいただくために、必ずお守りください。
●ご使用の前にこの「安全上のご注意」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

この取扱説明書および製品への表示は、製品を安全に正しくお使いいただき、あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、いろいろな絵表示をしています。その表示と意味は次のようになっています。
内容をよく理解してから本文をお読みください。

警告

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。

注意

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が損害を負う可能性が想定される内容および物的損害のみの発生が想定される内容を示しています。

絵表示の例

△ 記号は注意(警告を含む)しなければならない内容であることを示しています。
図の中に具体的な注意内容(左図の場合は感電注意)が描かれています。

⃠ 記号は禁止(やってはいけないこと)を示しています。
図の中や近くに具体的な禁止内容(左図の場合は分解禁止)が描かれています。

● 記号は行動を強制したり指示する内容を示しています。
図の中に具体的な指示内容(左図の場合は電源プラグをコンセントから抜け)が描かれています。

⚠ 警告

異常時の処置

- 万一煙が出ている、変なにおいや音がするなどの異常状態のまま使用すると火災・感電の原因となります。すぐに機器本体の電源スイッチを切り、必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。煙が出なくなるのを確認して販売店に修理をご依頼ください。お客様による修理は危険ですから絶対おやめください。

- 万一内部に水や異物等が入った場合は、まず機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 万一本機を落としたり、カバーを破損した場合は、機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

設置

- 電源プラグの刃および刃の付近にほこりや金属物が付着している場合は、電源プラグを抜いてから乾いた布で取り除いてください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

- 電源コードの上に重いものをのせたり、コードが本機の下敷きにならないようにしてください。また、電源コードが引っ張られないようにしてください。コードが傷ついて、火災・感電の原因となります。コードの上を敷物などで覆うことにより、それに気付かず、重い物をのせてしまうことがあります。

- 放熱をよくするため他の機器、壁等から間隔をとり、またラックに入れる時はすき間をあけてください。また、次のような使い方で通風孔をふさがないでください。内部に熱がこもり、火災の原因となることがあります。

→あおむけや横倒し、逆さまにする。
→押し入れなど、風通しの悪い狭いところに押し込む。
→じゅうたんやふとんの上に置く。
テーブルクロスなどをかける。

- **着脱式の電源コード(インレットタイプ)が付属している場合のご注意:**
付属の電源コードはこの機器のみで使用することを目的とした専用部品です。他の電気製品ではご使用になれません。他の電気製品で使用した場合、発熱により火災・感電の原因となることがあります。また電源コードは本製品に付属のもの以外は使用しないでください。他の電源コードを使用した場合、この機器の本来の性能が出ないことや、電流容量不足による発熱から火災・感電の原因となることがあります。

使用環境

- この機器に水が入ったり、ぬらさないようにご注意ください。火災・感電の原因となります。雨天、降雪中、海岸、水辺での使用は特にご注意ください。

- 風呂場・シャワー室等では使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- 表示された電源電圧（交流１００ボルト 50 Hz/60 Hz）以外の電圧で使用しないでください。火災・感電の原因となります。

- この機器を使用できるのは日本国内のみです。船舶などの直流（ＤＣ）電源には接続しないでください。火災の原因となります。

使用方法

- 本機の上に花びん、植木鉢、コップ、化粧品、薬品や水などの入った容器または小さな金属物を置かないでください。こぼれたり、中に入った場合、火災・感電の原因となります。

- ぬれた手で（電源）プラグを抜き差ししないでください。感電の原因となることがあります。

- 本機の通風孔などから、内部に金属類や燃えやすいものなどを差し込んだり、落とし込んだりしないでください。火災・感電の原因となります。特にお子様のいるご家庭ではご注意ください。

- 本機のカバーを外したり、改造したりしないでください。内部には電圧の高い部分があり、火災・感電の原因となります。内部の点検・整備・修理は販売店にご依頼ください。

- 電源コードを傷つけたり、加工したり、無理に曲げたり、ねじったり、引っ張ったり、加熱したりしないでください。コードが破損して火災・感電の原因となります。コードが傷んだら（芯線の露出、断線など）、販売店に交換をご依頼ください。

- 雷が鳴り出したらアンテナ線や電源プラグには触れないでください。感電の原因となります。

- 製品に付属の電源コンセントには、そのパネルおよび取扱説明書に表示された容量を超える消費電力を持つ電気機器を接続しないでください。火災の原因となります。電熱器具、ヘアードライヤー、電磁調理器などは接続しないでください。また表示してある電力以内であっても、電源を入れた時に大電流の流れる機器などは接続しないでください。

⚠ 注意

設置

- 電源プラグはコンセントに根元まで確実に差し込んでください。差し込みが不完全ですと発熱したり、ほこりが付着して火災の原因となることがあります。また、電源プラグの刃に触れると感電することがあります。

- 電源プラグは、根元まで差し込んでもゆるみがあるコンセントに接続しないでください。発熱して火災の原因となることがあります。販売店や電気工事店にコンセントの交換を依頼してください。

- ぐらついた台の上や傾いたところなど不安定な場所に置かないでください。落ちたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- 本機を調理台や加湿器のそばなど油煙、湿気あるいはほこりの多い場所に置かないでください。火災・感電の原因となることがあります。

- キャスター付きの場合にはキャスター止めをしてください。動いたり、倒れたりしてけがの原因となることがあります。

- テレビ、オーディオ機器、スピーカー等に機器を接続する場合は、それぞれの機器の取扱説明書をよく読み、電源を切り、説明に従って接続してください。また、接続は指定のコードを使用してください。

- 電源を入れる前には音量を最小にしてください。突然大きな音が出て聴力障害などの原因となることがあります。

- 本機の上に重いものや外枠からはみ出るような大きなものを置かないでください。バランスがくずれて倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。

- 本機の上にテレビを置かないでください。放熱や通風が妨げられて、火災や故障の原因となることがあります。（取扱説明書でテレビの設置を認めている機器は除きます。）

異常時の処置

- 電源プラグを抜く時は、電源コードを引っ張らないでください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。必ずプラグを持って抜いてください。

- 電源コードを熱器具に近づけないでください。コードの被ふくが溶けて、火災・感電の原因となることがあります。

- 移動させる場合は、電源スイッチを切り必ず電源プラグをコンセントから抜き、外部の接続コードを外してから、行ってください。コードが傷つき火災・感電の原因となることがあります。

- 本機の上にテレビやオーディオ機器を載せたまま移動しないでください。倒れたり、落下してけがの原因となることがあります。重い場合は、持ち運びは2人以上で行ってください。

- アンテナ工事には技術と経験が必要ですので、販売店にご相談ください。

→送配電線から離れた場所に設置してください。アンテナが倒れた場合、感電の原因となることがあります。

→ＢＳ，ＣＳ放送受信用アンテナは強風の影響を受けやすいので、堅固に取りつけてください。

- 窓を閉め切った自動車の中や直射日光が当たる場所など異常に温度が高くなる場所に放置しないでください。火災の原因となることがあります。

使用方法

- ディスクを使用する機器の場合、ひび割れ、変形、または接着剤などで補修したディスクは使用しないでください。ディスクは機器内で高速回転しますので、飛び散ってけがの原因となることがあります。

- レーザーを使用している機器では、レーザー光源をのぞきこまないでください。レーザー光が目に当たると視力障害を起こすことがあります。

- 長時間音が歪んだ状態で使わないでください。スピーカーが発熱し、火災の原因となることがあります。

- 本機に乗ったり、ぶら下がったりしないでください。特にお子様はご注意ください。倒れたり、壊れたりしてけがの原因になることがあります。

- お子様がカセットテープ、ディスク挿入口に、手を入れないようにご注意ください。けがの原因になることがあります。

- ヘッドホンをご使用になる時は、音量を上げすぎないようにご注意ください。耳を刺激するような大きな音量で長時間続けて聞くと、聴力に悪い影響を与えることがあります。

- 旅行などで長期間、ご使用にならない時は安全のため必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。

電池

- 指定以外の電池は使用しないでください。また、新しい電池と古い電池を混ぜて使用しないでください。電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

- 電池を機器内に挿入する場合、極性表示(プラス(＋)マイナス(－)の向き)に注意し、表示どおりに入れてください。間違えると電池の破裂、液もれにより、火災・けがや周囲を汚損する原因となることがあります。

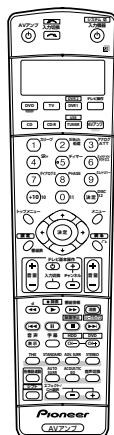
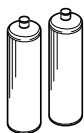
- 長時間使用しない時は、電池を取り出しておいてください。電池から液がもれて火災、けが、周囲を汚損する原因となることがあります。もし液がもれた場合は、電池ケースについた液をよく拭き取ってから新しい電池を入れてください。また万一、もれた液が身体についた時は、水でよく洗い流してください。

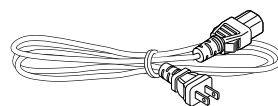
- 電池は加熱したり分解したり、火や水の中にいれないでください。電池の破裂、液もれにより、火災、けがの原因となることがあります。

保守・点検

- 5年に一度くらいは内部の掃除を販売店などにご相談ください。内部にほこりがたまったまま、長い間掃除をしないと火災や故障の原因となることがあります。特に湿気の多くなる梅雨期の前に行うとより効果的です。なお掃除費用については販売店などにご相談ください。

- お手入れの際は安全のために電源プラグをコンセントから抜いて行ってください。

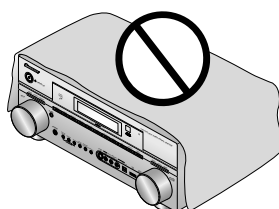
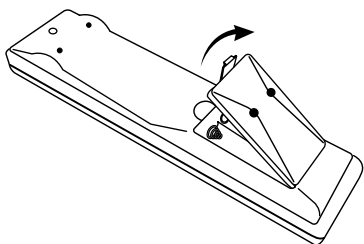
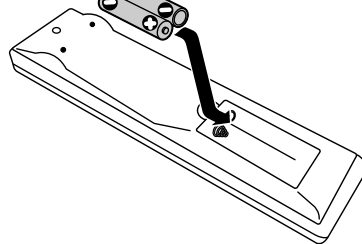
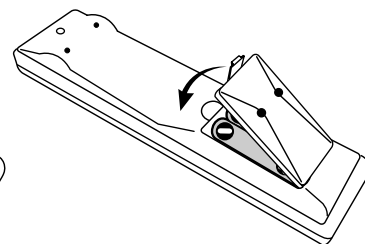
付属品を確認する

リモコン

単3形乾電池(2本)
(IEC R6P)

セットアップ用マイク
(5 m)

電源コード

- 保証書
- 取扱説明書(本書)

設置について

警告

- 放熱のため本機の上に物を置いたり、布やシートなどを被せた状態でのご使用は絶対におやめください。異常発熱により故障の原因となる場合があります。
- ラックなどに設置する場合は、上部に20 cm以上空間をあけてください。

リモコンに電池を入れる

1 2

3

注意

電池を誤って使用すると、液漏れしたり破裂する危険性があります。以下の点について特にご注意ください。

- 新しい乾電池と一度使用した乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 乾電池のプラスとマイナスの向きを電池ケースの表示どおりに正しく入れてください。
- 乾電池には同じ形状でも電圧の異なるものがあります。種類の違う乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 長い間(1 カ月以上)リモコンを使用しないときは、電池の液漏れを防ぐため、乾電池を取り出してください。液漏れを起こしたときは、ケース内についた液をよく拭き取ってから新しい乾電池を入れてください。
- 不要となった電池を廃棄する場合は、各地方自治体の指示(条例)に従って処理してください。

- リモコンの操作範囲が極端に狭くなってきたら、電池を交換してください。
- 電池を交換する際は、なるべく5分以内に行ってください。それ以上では、リモコンの設定が解除される可能性があります。再度リモコンの設定を行う場合は、「他機器を操作するためのリモコン設定をする」をご覧ください(76ページ)。

目　次

準　備

ホームシアター入門

各部の名称

接　続

再　生

応用操作

設　定

目　次

本機の特長　～こんなことができます～

高音質・多機能な本機VSA-1016Vの主な特長をまとめました。「本書の掲載ページ」に進むと、それぞれの機能や操作を楽しんでいただけます。

本書の掲載ページ

1 MCACC を搭載

聴感のみでは正確な調整が難しいマルチチャンネルの音場設定を自動化しました。音場を正確に測定し、チャンネル間の空間情報の歪みを補正します。原音追求のため、実際の製作現場で行われる高精度な調整技術を研究し、家庭用に改良したものです。

P.12
「リスニング環境を測定して最適な設定をする ～ Auto MCACC ～」

2 BASIC PHASE CONTROL 機能

ソースからスピーカーまでの信号伝送経路によって生じていた低域の位相とタイミングのズレを補正し、原音に忠実な力強いサウンドを実現します。

P.42
「位相を合わせて音の打ち消し合いを防ぐ（BASIC PHASE CONTROL）」

3 新開発サウンドレトリバー 機能

MP3などの圧縮音声が圧縮処理される際に削除されてしまった部分をDSP処理によって補い、音の密度感、抑揚感を向上させて再生します。

P.44
「圧縮音声を聴き取りやすくする（サウンドレトリバー）」

4 THX SELECT2 の認証を取得

厳しい規格基準をクリアして「THX SELECT2」規格の認証を受けています。THX 認定映画館と同等の再生環境をホームシアターで実現するためのさまざまな機能が搭載されています。

P.88
「デジタル音声フォーマットについて」

5 多彩な接続端子

- 映像と音声をデジタル伝送できるHDMI端子
- USBメモリーに記録されている音楽データを再生できるUSB端子

P.47
「HDMI機器を再生する」
P.45
「USB メモリーの再生」

6 その他の主な特長

- あらゆるデジタル音声フォーマットに対応
- パイオニアビデオコンバーターを搭載
- 新デザイン多機能LCD リモコンを付属
- 省エネルギー設計（待機時0.5 W）

P.88
「デジタル音声フォーマットについて」
P.26
「映像機器の接続について」

ホームシアター入門

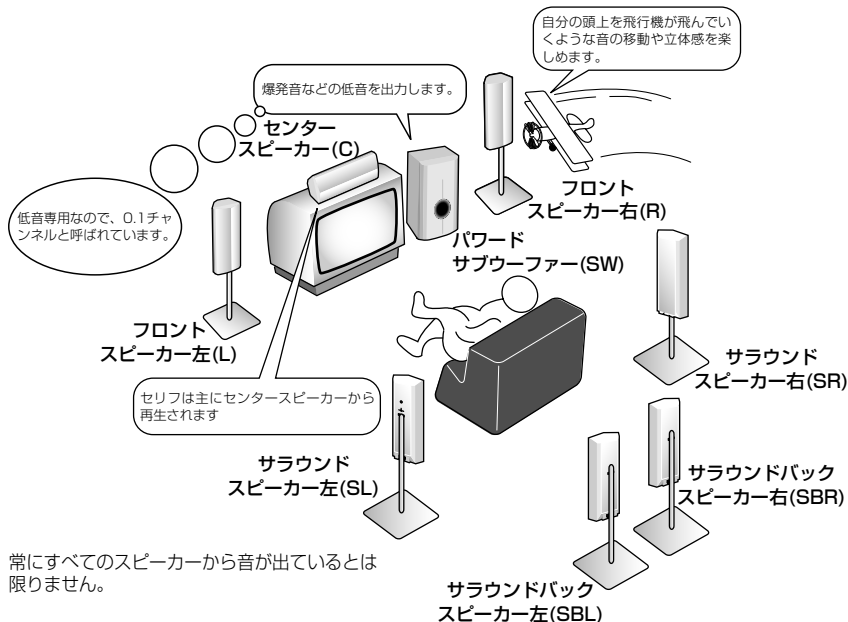
本章「ホームシアター入門」をご覧いただくだけで、簡単にマルチチャンネル再生を楽しむことができます。

ステップ1 **接続する** ……… 「テレビ/DVD プレーヤーとの接続」「スピーカーとの接続」
ステップ2 **設定する** ……… 「リスニング環境を測定して最適な設定をする ～Auto MCACC～ 」
ステップ3 **再生する** ……… 「DVDのサラウンド再生」

マルチチャンネルサラウンド再生とは

3 本以上のスピーカーで多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。

①ドルビーデジタルまたはDTSサラウンドなどのマルチchソフトを再生する場合
マルチchソフト(5.1 ch収録が一般的)には各チャンネルに独立した音声が収録されているため、忠実な5.1 ch再生でも十分な立体感が得られますが、色々なモードとの組み合わせにより、最大7.1 chでの臨場感あふれる再生も可能です。この再生をするにはデジタル接続が必要です。

②CDまたはドルビーサラウンドなどの2 ch(ステレオ)ソフトを再生する場合
ソフトが2 ch収録の場合でも、ドルビープロロジックⅡxやNeo:6技術などを施すことで、最大7.1 chでの再生が可能です。ソフトの内容やお好みにマッチしたモードを見つけることも、ホームシアターの醍醐味です。

DVDソフトの音声記録方式(フォーマット)を知るには？

多くのDVDソフトでは、パッケージ(裏面)に以下のように表示されています。1枚のディスクに2～3種類の音声が収録されていることが多く、聴く音声を選ぶことができます。

例)

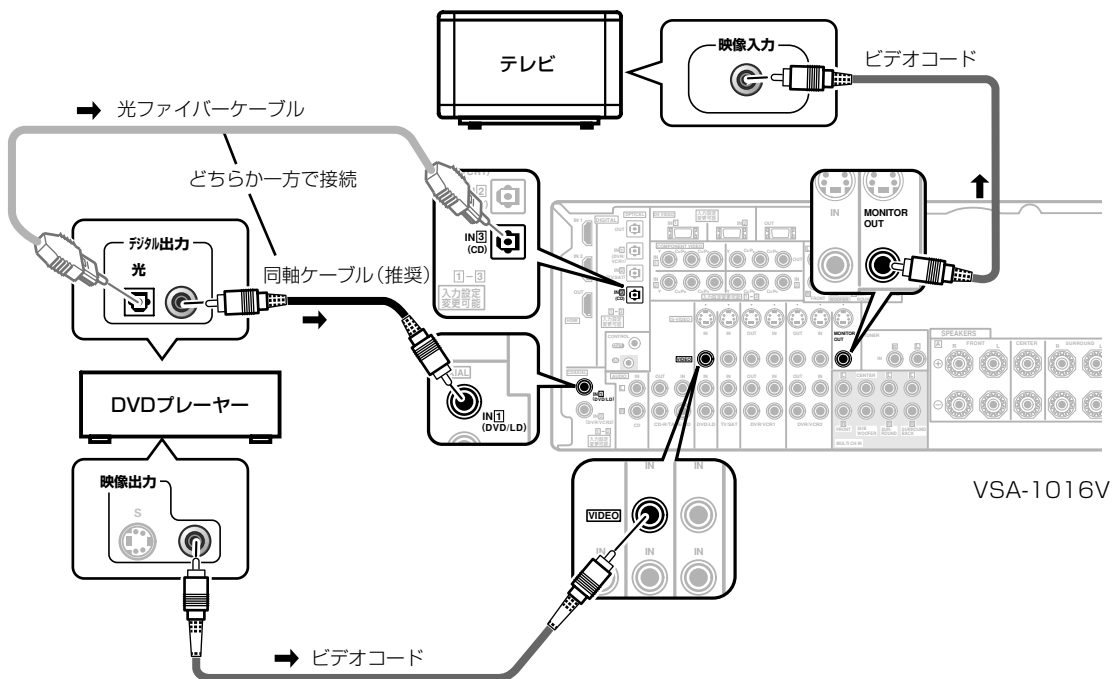
収録音声数	記録方式	音声記録方式(フォーマット)
3	1. 英　語 (5.1 ch サラウンド)	DOLBY DIGITAL
	2. 日本語 (ドルビーサラウンド)	DOLBY SURROUND
	3. 英　語 (DTS 5.1 ch サラウンド)	DIGITAL dts SURROUND

ドルビーデジタルはDVDの標準音声フォーマットであるため、単に「5.1 chサラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル(5.1 ch)」であることを示します。

ステップ1 接続する

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

テレビ／DVDプレーヤーとの接続

ドルビーデジタルやDTSといったマルチチャンネル音声の再生にはデジタル接続が必要です。
接続の前に、別売りのビデオコード2本、同軸ケーブル(または光ファイバーケーブル)1本をご用意ください。
同軸ケーブルにはビデオコードが代用できます。
光ファイバーケーブルで接続した場合は設定の変更が必要となります。詳しくはデジタル入力端子の設定(Digital Input)(→69ページ)をご覧ください。

■同軸ケーブル／光ファイバーケーブル

- 急な角度に折り曲げないでください。保管するときは、直径が15 cm以上になるようにしてください。
- 接続の際は端子の向きを合わせてしっかり奥まで差し込んでください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。

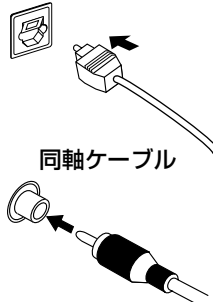
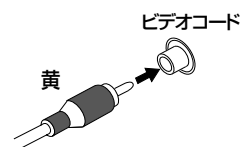
光ファイバーケーブル

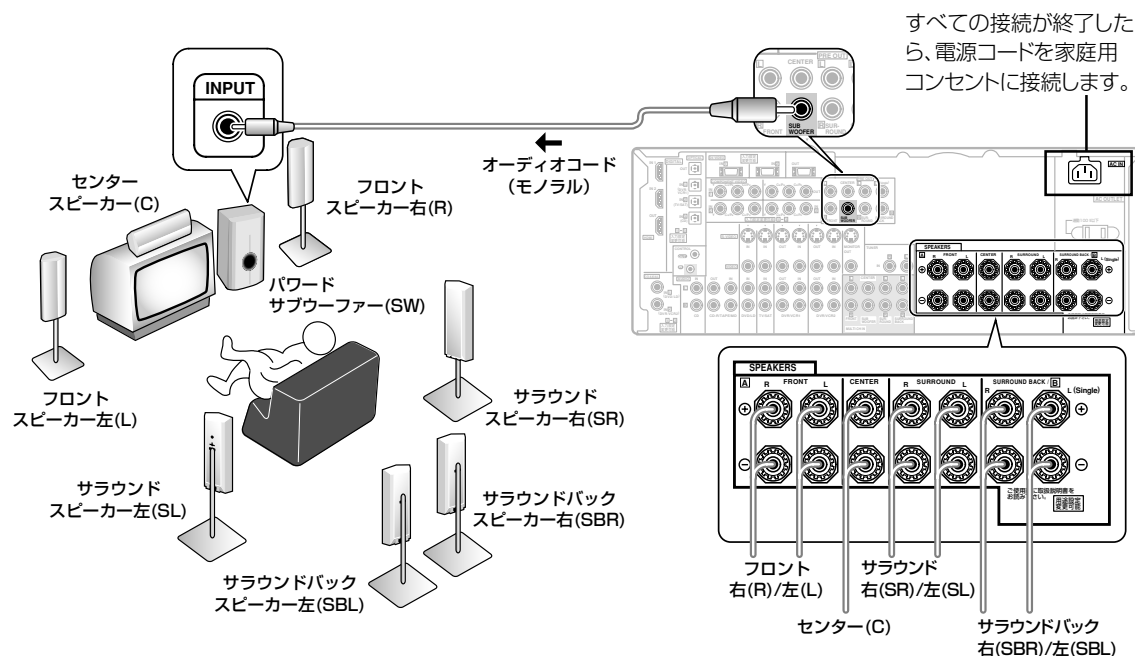
同軸ケーブル

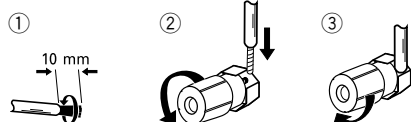
■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

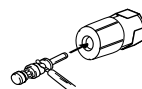
ビデオコード

黄

スピーカーとの接続

7本のスピーカーとサブウーファーをつないだ例です。「ステップ2　設定する」を行うことで、サラウンドバックやセンタースピーカーがない場合でもお持ちのスピーカーに応じたサラウンドサウンドが楽しめます。
接続には、市販のスピーカーコードとオーディオコードをご使用ください。

サラウンドバックスピーカーを1本のみ接続するときはL(Single)端子側に接続してください。

■SPEAKER(スピーカー)端子

①
②
③
① 線をねじる。
② スピーカー端子を緩め、スピーカーコードを差し込む。
③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください。)

注意

- インピーダンスが6 Ω～16 Ωのスピーカーをご使用ください。
- 6 Ω以上8 Ω未満のスピーカーをご使用になるときは「スピーカーインピーダンスの切り換え」(→25ページ)を行ってください。
- スピーカーと本機の＋／－を合わせて正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、＋／－が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

ステップ2 設定する

リスニング環境を測定して最適な設定をする　~Auto MCACC~

本機のオートセットアップでは従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、自動で高精度に測定、設定することができます。スピーカーから出力されるテストトーンを付属のセットアップ用マイクで測定し、解析します。測定項目と全体の流れは右記のとおりです。

右記①～⑦の測定／解析にかかる時間
合計3～8分程度

測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

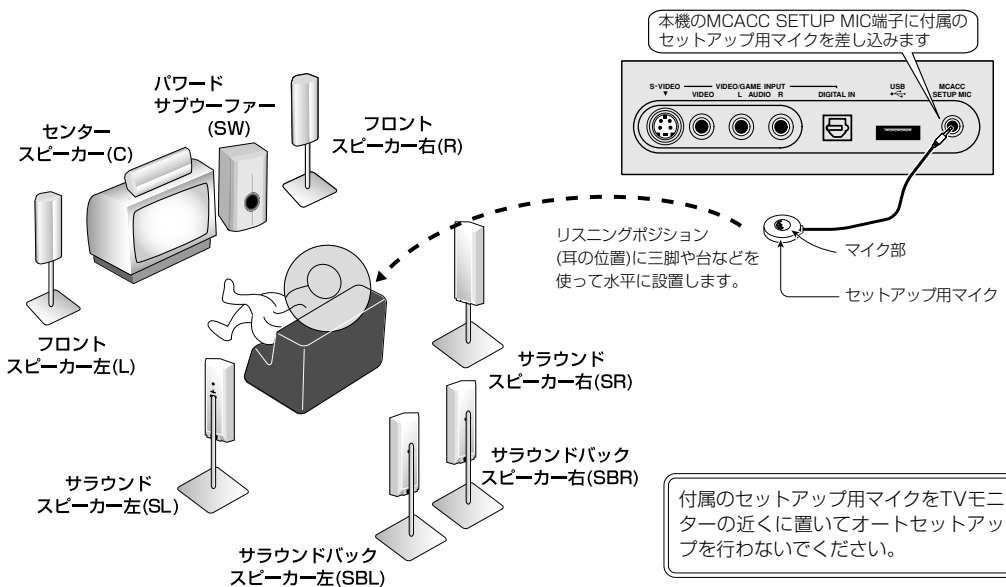
• サラウンドバックチャンネルの設定

初期測定（測定環境のチェック）
① 暗騒音（部屋の騒音）の測定
② マイク感度の診断
③ 各chのスピーカー有り無し判定

スピーカーの有り無し判定結果のユーザー確認（または修正）

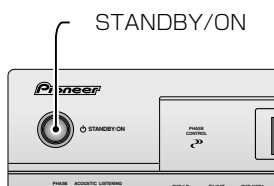
システム全体の解析測定
④ スピーカーシステム（各chの低域再生能力を判定）
⑤ スピーカーからの距離（最適なディレイ値を解析）
⑥ スピーカーの出力レベル（各chの出力バランスを補正）
⑦ 視聴環境の周波数特性（出力音声の音色を統一）

システム全体の解析結果のチェック

1）セットアップ用マイクを接続する

付属のセットアップ用マイクをTVモニターの近くに置いてオートセットアップを行わないでください。

2）測定の開始から自動設定の終了まで

- 測定を途中で中断したときは、それまでの測定内容は確定されません。
- システムセットアップ中に静止画面を3分間放置すると画面にスクリーンセーバー機能が働きますが、いずれかのボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジション（マイク）の間に障害物があると、正確に測定できないことがあります。
- 測定中はリスニングポジションから離れて、各スピーカーの外側からリモコンで操作を行ってください。

1 STANDBY/ON

1 本機とテレビの電源を入れる。

本体の　STANDBY/ONボタンを押します。

> サブウーファーを接続しているときは、測定のためサブウーファーの電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。

2 テレビに本機のメニュー画面を表示させる。

AVアンプボタンを押してから設定ボタンを押します。

> 設定ボタンを押したあとに、テレビにメニュー画面が表示されるようテレビ側の入力切換を合わせてください。

3 [2. Auto MCACC]を選んで決定する。

4 サラウンドバックシステムの設定をする。

通常は[Normal (SB)]を選択します。
詳しくは「スピーカーの使用用途を選択する」(→55ページ)をご覧ください。

5 決定ボタンを押す。

オートセットアップの自動測定に進みます。
手順6(次ページ)へお進みください。

注意

オートセットアップのテストトーンは大音量です。ボリュームを下げることもできますが、正しく設定されない場合があります。小さなお子様が近くにいる場合などはご注意ください。

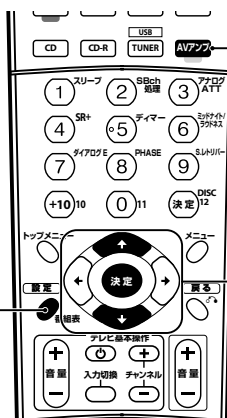
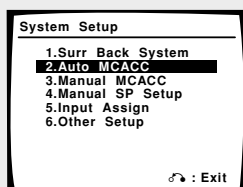
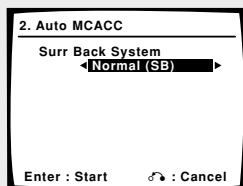
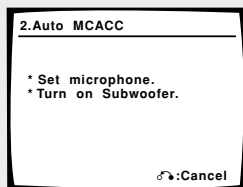
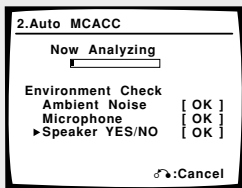
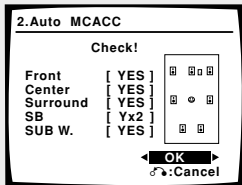
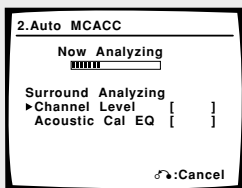
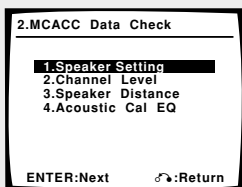
3

System Setup
1.Surr Back System
2.Auto MCACC
3.Manual MCACC
4.Manual SP Setup
5.Input Assign
6.Other Setup
: Exit

4

2. Auto MCACC
Surr Back System
◀ Normal (SB) ▶
Enter : Start　　: Cancel

5

2.Auto MCACC
* Set microphone.
* Turn on Subwoofer.
:Cancel

メッセージの意味
- 付属のオートセットアップ用マイクを接続して、リスニングポジションに配置してください。
- サブウーファーを接続している場合は電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。

エラーが表示されたら

判定結果で[ERROR!]が表示された場合は、スピーカーの接続を間違えている可能性があります。[Retry]しても結果が同じような場合は一度電源を切り、スピーカーの接続を確認してください。また、途中で測定エラーによる警告が表示されている場合がありますので、そのときは画面の指示にしたがってください。指示の詳しい内容については「システムセットアップでのMCACC(音場補正)時に表示されるメッセージの意味」(→103ページ)をご覧ください。

スピーカー有り無しの確認画面で、SUB W.を「NO」から「YES」に直して決定すると、サブウーファーのレベルを確認するためにサブウーファーのみ再測定を行います。

6 自動測定が開始されます。

まずは初期測定(測定環境チェック)です。
Ambient Noise:暗騒音(部屋の騒音)の測定
Microphone:マイクの感度を診断
Speaker YES/NO:各スピーカーの有り無し判定
「Ambient Noise」および「Microphone」のチェックでエラーが表示されたときは、測定環境およびマイクの接続をもう一度確認し、[Retry]を選んでもう一度測定することをお勧めします。⬅➡で[OK]を選択し、次の測定へ進むこともできます。

7 スピーカー有り無しの確認画面になります。

スピーカー有り無し判定については以下の表をご覧ください。
(Check!)画面の見かた

スピーカー ＼ 有無	接続している	接続していない	規定外の接続
Front フロント左右	YES	ERR	ERR
Center センター	YES	NO	– – –
Surround サラウンド左右	YES	NO	ERR
SB サラウンドバック	Y×1(1つ接続) Y×2(2つ接続)	– – –	ERR
SUB W. サブウーファー	YES	NO	– – –

スピーカー有り無し判定結果が正しいとき

[OK]を選んで決定ボタンを押します。

もう一度自動測定をやり直すとき

[Retry]を選んで決定ボタンを押します。

スピーカー有り無し判定結果が間違っているとき

[Retry]を選んでもう一度自動測定をやり直してみてください。それでも間違ってしまうときは⬇⬆⬅➡ボタンで正しい設定に直したあと決定ボタンを押します。

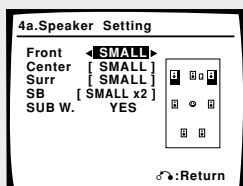
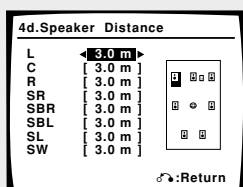
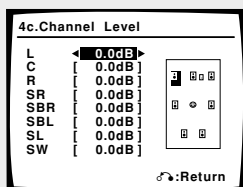
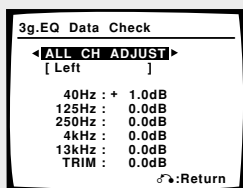
8 補正用測定が開始されます。

Speaker Setting:各スピーカーの低域再生能力判定
Speaker Distance:各スピーカーまでの距離を解析
Channel Level:各chの出力バランスを補正
Acoustic Cal EQ:出力音声の音色を統一
これらの自動設定には接続しているスピーカーの数によって3〜8分程度かかりますので、手順9の画面になるまでしばらくお待ちください。

9 「MCACC Data Check」の画面が表示されたら自動測定は終了です。

「3)測定/設定結果を確認する」にお進みください。

3）測定／設定結果を確認する

1.スピーカーシステム

2.スピーカーまでの距離

3.スピーカーの出力レベル

4.視聴環境の周波数特性

13〜14ページの手順1〜9を行ってから以下にお進みください。

1 **⬇⬆ ボタンで項目を選んで決定し、測定された内容を確認する。**

確認後は戻るボタンを押して項目一覧に戻ります。

- 同じスピーカーを接続していても、部屋の環境や設置の影響によりスピーカーの大小判定が一致しないことがあります。設定を変更したい場合はシステムセットアップの「スピーカー接続と低音再生能力を設定する」（→62ページ）を行ってください。
- サブウーファーまでの距離は、サブウーファー本体が持つ回路の電気的遅延も含めて測定するため、距離がやや遠めに設定されることがありますが、遅延補正として最適な解析結果ですので、距離を修正する必要はありません。また、他のスピーカーも音響特性を測定して距離設定をしているため、実測したスピーカーまでの距離とは異なることがあります。

2 **設定ボタンを押してオートセットアップ(Auto MCACC)を終了する。**

通常動作に戻ります。

ステップ3 再生する

つないだDVDプレーヤーにディスクをセットして、サラウンド再生をします。

DVDのサラウンド再生

1 本体の電源コードをつないで、電源を入れる。

⏻ STANDBY/ONボタンを押して電源をONにします。
（サブウーファーは、「ステップ 2」のAuto MCACCを行ったときと同じ音量にしておきます。）

2 テレビの電源を入れ、テレビの入力切換を本機の出力映像が表示されるように設定する。

たとえば、本機のMONITOR OUT端子と接続しているテレビの入力が「ビデオ1」の場合は、テレビの入力を「ビデオ1」に切り換えます。

3 DVDプレーヤーの電源をONにする。

4 リモコンのDVDボタンを押して、本機の表示を「DVD/LD」にする。

SIGNAL SELECT表示がDIGITAL(AUTO)になっていることを確認してください。
表示がANALOGになっていたらSIGNAL SELECTボタンでDIGITAL(AUTO)に切り換えます。

5 AUTO SURROUNDモードにする。

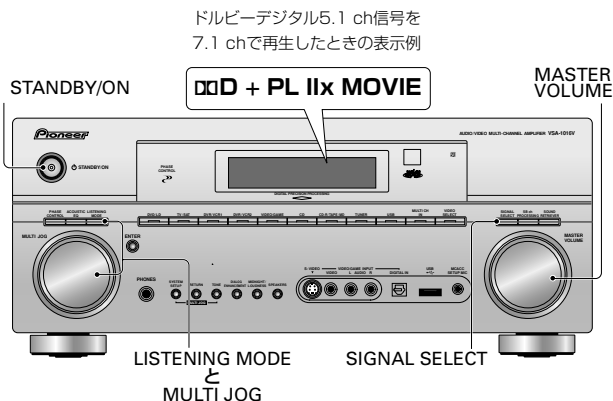
LISTENING MODEボタンを押してAUTO SURROUNDを選択します。

6 DVDを再生する。

再生する前にDVDプレーヤー、DVDソフトの確認をしてください。

① DVDプレーヤーのデジタル出力
ドルビーデジタル 、DTS、および96 kHz PCMの音声信号が出力されるように設定してください。
※本機はMPEG音声に対応していません。PCM音声が出力されるように設定してください。
② DVDソフトの音声の確認
DVDソフトのメニュー画面やDVDプレーヤーの音声切換操作で音声(5.1 chサラウンドまたはドルビーサラウンドなど)を選んでください。

CDなどの場合はステレオ（2 ch）再生になります。

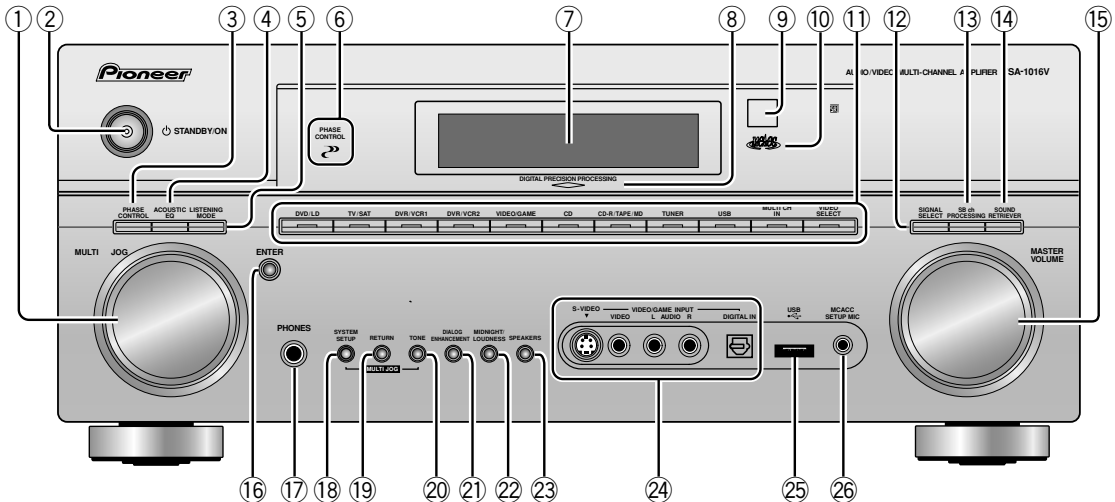
7 適当な音量になるまでMASTER VOLUMEを回して音量を調整する。

サラウンドをより楽しむために

いろいろな音場効果を加えることができます。
（→36ページ）

何か問題はありましたか？

「故障かな？と思ったら」をご覧ください。
（→98ページ）

誤使用防止のため、取扱説明書は必ず最後までお読みください。

フロントパネル

① MULTI JOGダイヤル
フロントパネルの MULTI JOG マークのあるボタンの操作に使用します。

② STANDBY/ON
本機の電源を入／切(スタンバイ)にします。

③ PHASE CONTROLボタン
BASIC PHASE CONTROLモードのON/OFFを切り換えます。(→42ページ)

④ Acoustic EQボタン
アコースティックキャリブレーションEQ設定を選択します。(→40ページ)

⑤ LISTENING MODEボタン
リスニングモードを選びます。(→36ページ)

⑥ PHASE CONTROLインジケーター
BASIC PHASE CONTROLモードをONに設定しているときに点灯します。(→42ページ)

⑦ 表示部(フロントパネルディスプレイ)
(→19ページ)

⑧ DIGITAL PRECISION PROCESSINGインジケーター
デジタル信号を処理しているときに点灯します。

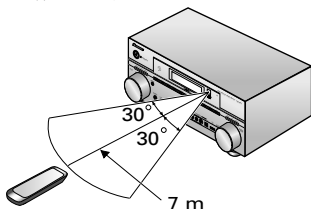
⑨ リモコン受光部
下記「リモコンの操作範囲」参照。

⑩ MCACCインジケーター
アコースティックキャリブレーションEQ設定を有効にしているときに点灯します。(→40ページ)

⑪ 入力ファンクション切換ボタン
リアパネルに接続した各機器から再生機器を選びます。

⑫ SIGNAL SELECTボタン
入力信号の種類(DIGITAL/ANALOGなど)を切り換えます。(→35ページ)

リモコンの操作範囲

本機をリモコンで操作するときは、リモコンをフロントパネルのリモコン信号受光部に向けてください。

- リモコンと本機との間に障害物があったり、リモコン受光部との角度が悪いと操作ができない場合があります。
- リモコン受光部に直射日光や蛍光灯などの強い光が当たると誤動作することがあります。
- 赤外線を出す機器の近くで本機を使用したり、赤外線を利用したほかのリモコン装置を使用したりすると、本機が誤動作することがあります。逆にこのリモコンを操作すると、他の機器を誤動作させることもあります。

⑬ SBch PROCESSING
サラウンドバックチャンネルまたはバーチャルサラウンドバック処理のON/AUTO/OFFを切り換えます。（→41ページ）

⑭ SOUND RETRIEVER
MP3などの2 ch圧縮音声を再生する際、音の密度感、抑揚感を向上させます。（→44ページ）

⑮ MASTER VOLUME
音量を調節します。

⑯ ENTERボタン
システムセットアップやリスニングモードの選択操作を決定します。

⑰ PHONES端子
ヘッドホン端子です。（→35ページ）

⑱ SYSTEM SETUPボタン
本機のシステムセットアップを表示します。
（→54ページ）

⑲ RETURNボタン
システムセットアップで1つ前の画面に戻ります。

⑳ TONEボタン
低音／高音を調整します。（→44ページ）

㉑ DIALOG ENHANCEMENTボタン
ダイアログエンハンスメントモードを切り換えます。
（→43ページ）

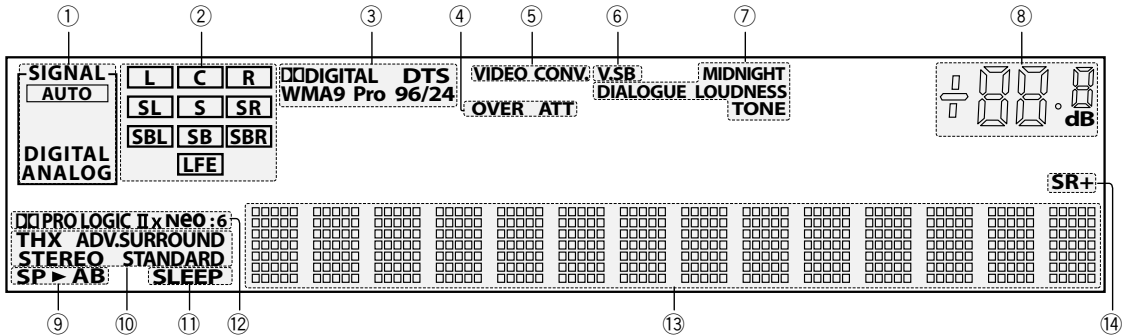
㉒ MIDNIGHT/LOUDNESSボタン
小音量時に音を聴きやすくします。（→43ページ）

㉓ SPEAKERSボタン
スピーカーシステムを切り換えます。（→51ページ）

㉔ VIDEO/GAME INPUT端子
ビデオカメラやゲーム機などのため、前面に備えた入力端子です。（→28ページ）

㉕ USB入力端子
USBメモリーを接続します。（→45ページ）

㉖ MCACC SETUP MIC端子
音場設定の自動測定のときに、付属のセットアップマイクを差し込みます。（→12ページ）

フロントパネルディスプレイ

① **SIGNALインジケーター**
現在選択されている機器の音声入力信号の種類が点灯します。

② **プログラムフォーマットインジケーター**
ドルビーデジタルやDTSなどの信号入力時に、その信号が持っているチャンネルを表示します。

L：フロント左

R：フロント右

C：センター

SL：サラウンド左

S：サラウンド(モノラル)

SR：サラウンド右

SBL：サラウンドバック左

SB：サラウンドバック(モノラル)

SBR：サラウンドバック右

LFE：超低音の効果音(Low Frequency Effect)。

③ **デジタルフォーマットインジケーター**
それぞれのデジタル信号入力時に点灯します。

④ **OVER/ATTインジケーター**
アナログ入力信号のレベルが高すぎるときにOVERが点灯し、その歪みを補正するためにアナログATT機能(→49ページ)が選ばれるとATTが点灯します。

⑤ **VIDEO CONV.**
ビデオコンバーター処理時に点灯します。

⑥ **V.SB**
バーチャルサラウンドバック処理時に点灯します。(→41ページ)

⑦ **音声再生用機能インジケーター**
設定されている機能が点灯します。

⑧ **音量表示(dB)**
現在の主音量レベルを表示します。
音量レベルは、電源を入／切しても保持されています。(音声ミュート時は点滅します。)

⑨ **スピーカーインジケーター**
現在選択されているスピーカーシステムが点灯します。(→51ページ)

⑩ **リスニングモードインジケーター**
選択されているリスニングモードに応じて点灯します。(→36ページ)

⑪ **SLEEP インジケーター**
スリープタイマーが設定されているときに点灯。(→50ページ)

⑫ **デコード処理インジケーター**
マトリックスデコード処理時に点灯します。

PRO LOGICIIx：ドルビープロロジックII処理またはドルビープロロジックIIxデコード時。

Neo：6：Neo:6デコード時。

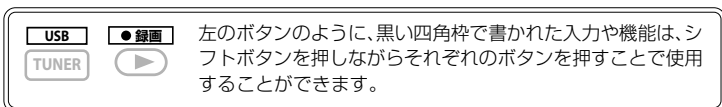
⑬ **キャラクター表示部**
操作中の情報やリスニングモードを表示。

⑭ **SR+インジケーター**
プラズマディスプレイとの連動モード時に点灯。(→82～84ページ)

何らかの操作のあと、キャラクター表示部が数秒間点滅する場合は、操作禁止を意味します。

リモートコントロール

アンプコントロール部、チューナーコントロール部、TV／他機器のコントロール部の3つに分類されます。
本機のリモコンは各操作ボタンごとに以下のように色分けされています。
緑＝アンプコントロール
赤＝DVDコントロール
白＝他機器コントロール

左のボタンのように、黒い四角枠で書かれた入力や機能は、シフトボタンを押しながらそれぞれのボタンを押すことで使用することができます。

アンプコントロール部

本機を操作するときに使います。

AVアンプ ⏻ ボタン
本機の電源をONまたはOFF（スタンバイ状態）にします。

リモコン表示部
操作／設定時の表示画面です。

マルチコントロールボタン
本機の入力を切り換えます。また他機器を操作するときのリモコンの操作モードを切り換えます。
AVアンプボタン
リモコンをアンプ操作モードにします。

アンプ操作ボタン
リスニングモードボタン
（THX、STANDARD、ADV. SURR、STEREO、AUTO SURR）：いろいろな音場効果を加えることができます。
（→36ページ）
ACOUSTIC EQ：アコースティックキャリブレーション EQ設定を選択します。
（→40ページ）
音声切換：入力信号の種類（アナログ／デジタルなど）を切り換えます。
（→35ページ）
エフェクト/CH選択、＋－：ADVANCED SURROUNDモードのエフェクトレベルを調整します。また、テストトーンを使わずに、手動でチャンネルを切り換えて各チャンネルのスピーカーレベルを調整するときに使います。（→41ページ）

シフトボタン
黒い四角枠で表示された入力や機能を選択したいときに、このボタンを押しながらそれぞれのボタンを押します。（→34ページ）

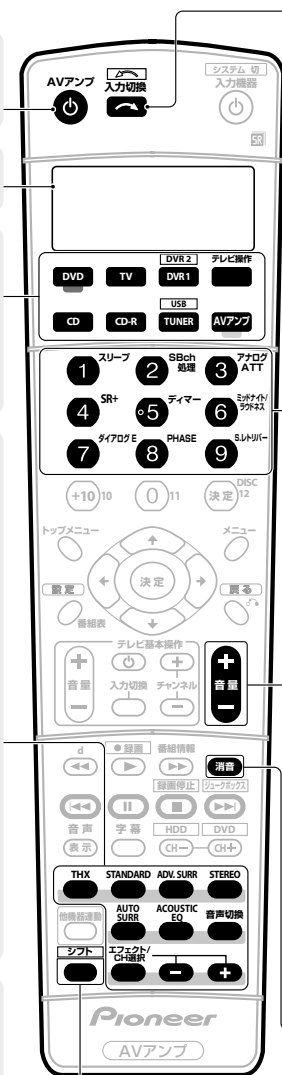
例：USB / TUNER シフトを押しながらTUNERを押すと、USB入力の選択となります。

シフトを押しながら入力切換を押すと、通常とは逆の順番での入力選択となります。

入力切換ボタン
本機の入力を切り換えます。

アンプ操作ボタン（AVアンプボタンを押してから操作します。）
スリープ：スリープタイマーを設定します。（→50ページ）
SBch処理：サラウンドバックチャンネルまたはバーチャルサラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFFを切り換えます。
（→41ページ）
アナログ ATT：アナログ信号が入力されているとき、入力信号のレベルが高すぎて音が歪んでいるときに押すと聴きやすくなります。（→49ページ）
SR+：プラズマディスプレイとの連動モードを切り換えます。（→84ページ）
ディマー：フロントパネル表示部の明るさを切り換えます。（→50ページ）
ミッドナイト／ラウドネス：ミッドナイトリスニングモードやラウドネスモードをONにすると、音量を下げて映画などを楽しむ場合などでも、サラウンド効果が最適なレベルに自動調整されます。（→43ページ）
ダイアログE：ダイアログエンハンスメントを設定します。（→43ページ）
PHASE：BASIC PHASE CONTROLモードのON/OFFを切り換えます。（→42ページ）
S.レトリバー：MP3などの2 chの圧縮音声を再生する際、音の密度感、抑揚感を向上させます。（→44ページ）

音量＋/－ボタン
本機の音量を調節します。

消音ボタン
消音します。

テレビ/他機器コントロール部

テレビや他機器を操作するときに使います。
他機器の操作について詳しくは「リモコンで他機器を操作する」(→77ページ)をご覧ください。

入力機器 ボタン
他機器の電源を入／切します。

マルチコントロールボタン
リモコンの操作モードを切り換えます。

お手持ちのテレビを「テレビ基本操作ボタン」で操作するには、マルチコントロール部の「テレビ操作」ボタンにお手持ちのテレビのプリセットコードを割り当ててください。(→76ページ)

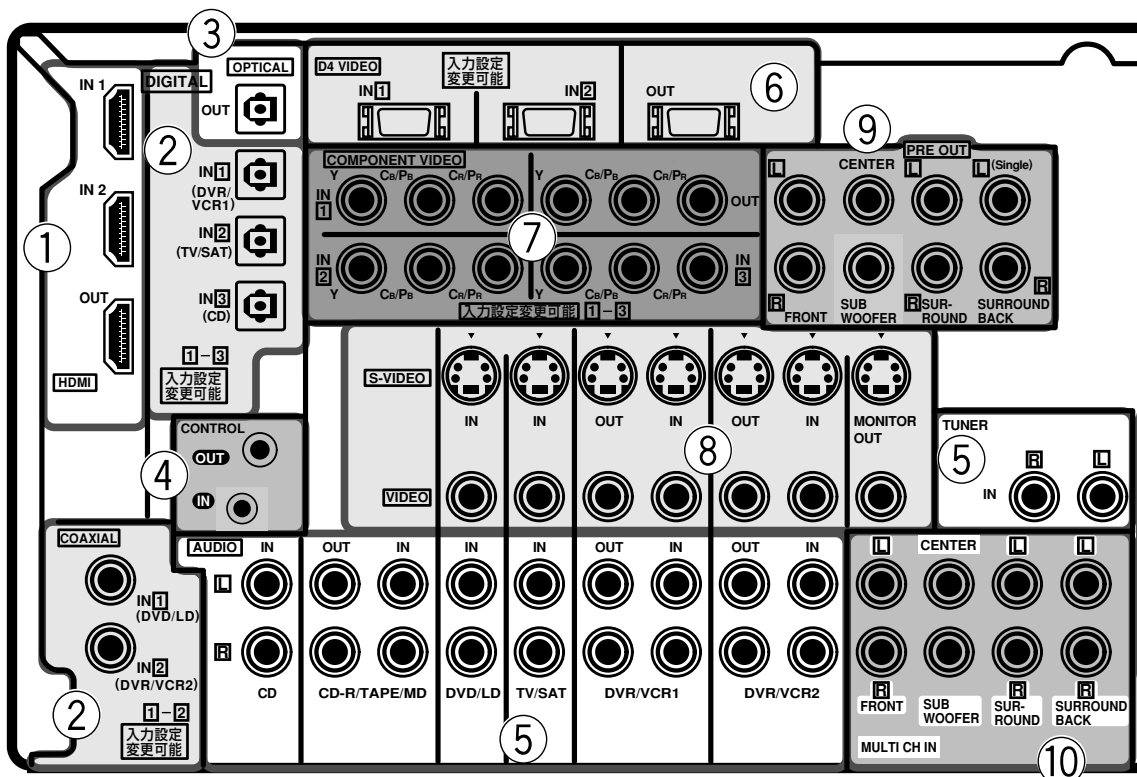
数字ボタン
トラック、チャプター、チャンネル選択に使用します。

メニューボタン
各機器のメニュー画面の操作などをします。

テレビ基本操作ボタン
⏻：テレビの電源を入／切します。
入力切換：テレビの入力を切り換えます。
チャンネル ＋/－：テレビのチャンネルを切り換えます。
音量＋/－：テレビの音量を調節します。

操作ボタン
各機器の再生／停止などの操作や機能の切り換えなどをします。

シフトボタン
黒い四角枠で表示された機能や、シフトボタンを押しながら学習させた機能を使用したいときに、このボタンを押しながらそれぞれのボタンを押します。
(→77、78ページ)
例: ●録画 ▶ シフトを押しながら▶を押すと、録画機能の使用となります。

リアパネル

① **HDMI入出力端子(→47、71ページ)**
接続するときは入力の設定が必要です。

② **デジタル入力端子(→32ページ)**
端子に表示された機器と違う機器を接続するときはデジタル音声入力の設定が必要です。
(→69ページ)

③ **光デジタル出力端子(→32ページ)**

④ **コントロール入出力端子(→81ページ)**

⑤ **アナログ音声入出力端子(→31ページ)**

⑥ **D4ビデオ入出力端子(→30ページ)**
工場出荷時はOFFに設定されています。機器を接続するときはコンポーネント/D4入力の設定が必要です。(→ 70ページ)

⑦ **コンポーネントビデオ入出力端子(→30ページ)**
工場出荷時はOFFに設定されています。機器を接続するときはコンポーネント/D4入力の設定が必要です。(→ 70ページ)

⑧ **ビデオ入出力端子(→27～29ページ)**

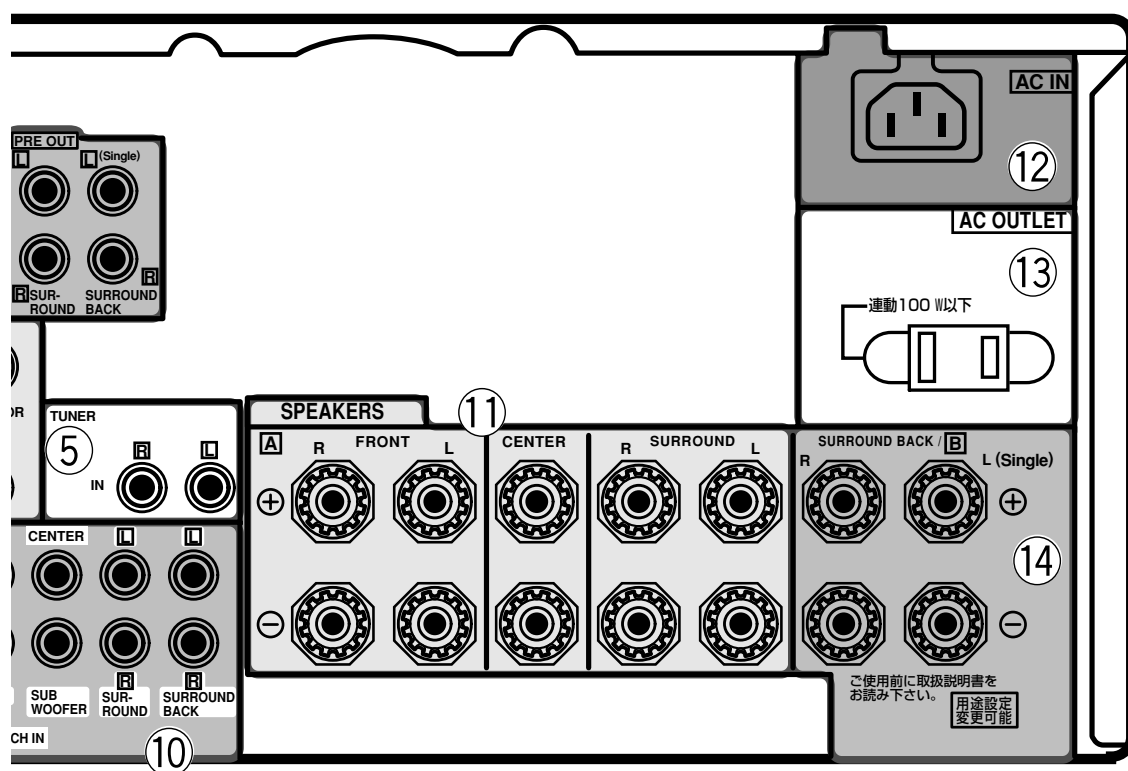
⑨ **プリアウト端子(→31ページ)**

⑩ **マルチチャンネル入力端子(→48ページ)**

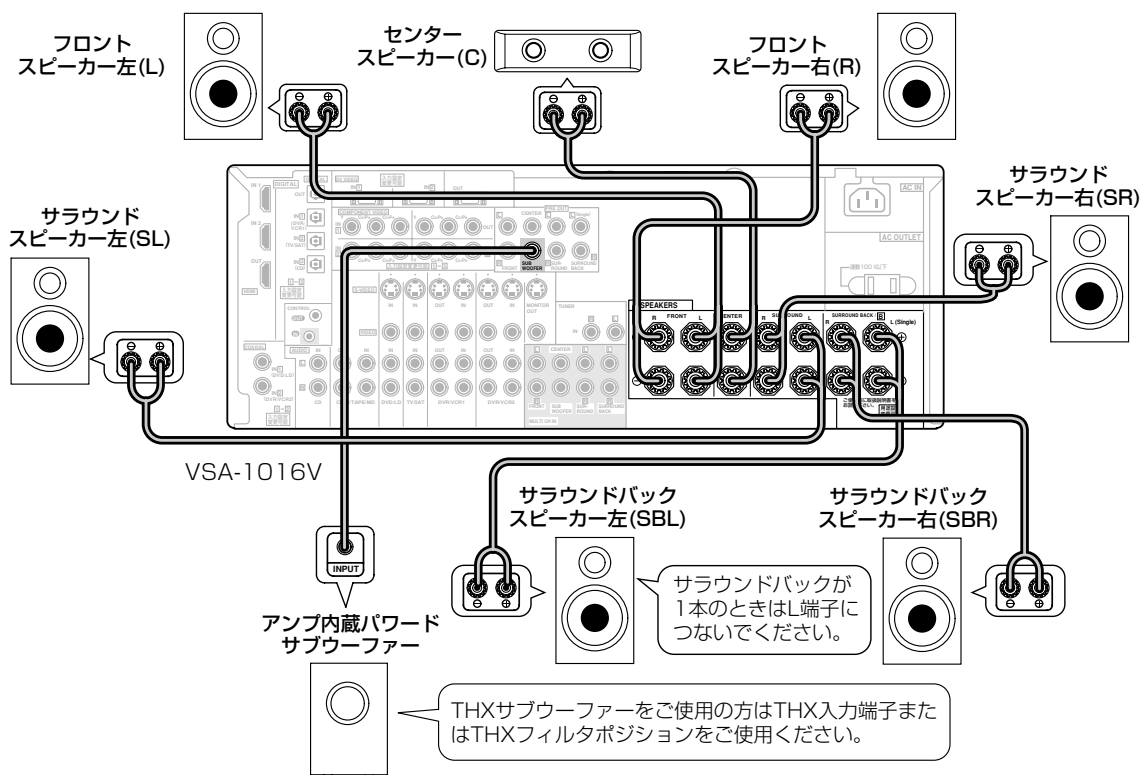
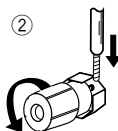
⑪ **スピーカーA端子**
スピーカーインピーダンス6 Ω～16 Ωのスピーカーを使用できます。(6 Ω～8 Ω未満のスピーカーを使う場合は設定変更してください。)(→25ページ)

⑫ **AC IN端子(→33ページ)**
必ず一番最後に接続してください。

⑬ **ACアウトレット予備コンセント(→33ページ)**

⑭ **スピーカーB端子**
サラウンドバックシステムの設定(→55ページ)で下記の用途に使用します。
・サラウンドバックスピーカーの接続(→24ページ)
・フロントスピーカーBi-AMP接続(→80ページ)
・別エリアでのステレオ再生用接続(→80ページ)

機器の接続を行う場合には、必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

スピーカーの接続

以下のように各スピーカーを接続します。本機でサラウンドを楽しむためには、7本のスピーカーとサブウーファーを接続することをお勧めします。
フロントスピーカーのバイアンプ接続をするときは「フロントスピーカーを高品位接続する ～バイアンプ接続～」(→80ページ)をご覧ください。

フロント
スピーカー左(L)

センター
スピーカー(C)

フロント
スピーカー右(R)

サラウンド
スピーカー右(SR)

サラウンド
スピーカー左(SL)

VSA-1016V

サラウンドバック
スピーカー左(SBL)

サラウンドバック
スピーカー右(SBR)

サラウンドバックが
1本のときはL端子に
つないでください。

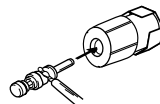
アンプ内蔵パワード
サブウーファー

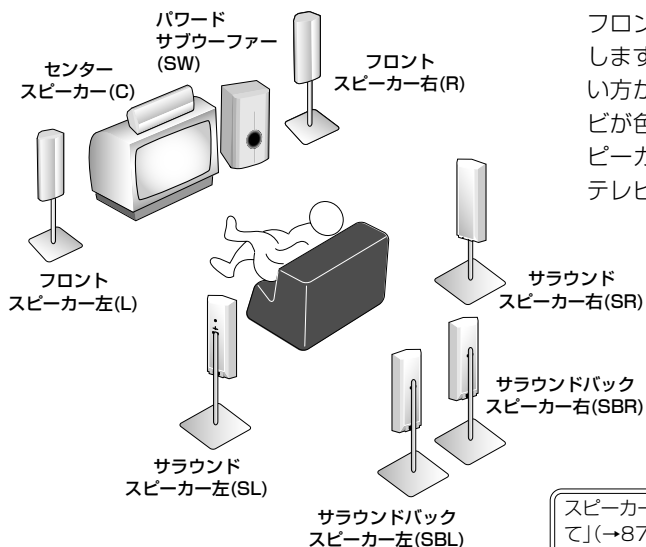
INPUT

THXサブウーファーをご使用の方はTHX入力端子またはTHXフィルタポジションをご使用ください。

■SPEAKER(スピーカー)端子

① 線をねじる。
② スピーカー端子を緩め、スピーカーコードを差し込む。
③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください。)

- **公称インピーダンスが6 Ω～16 Ωのスピーカーをご使用ください。**
  本機ではスピーカーインピーダンスの設定を変更することができます。工場出荷時は8 Ω～１６ Ωですが、お手持ちのスピーカーが6 Ω以上8 Ω未満の場合は、設定を変更してください。詳しくは、「スピーカーインピーダンスの切り換え」(→25ページ)をご覧ください。
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

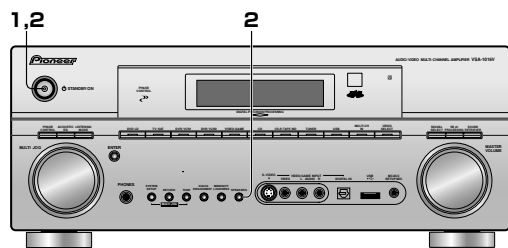
モニターTVとスピーカーの位置関係

フロントスピーカーはテレビから等距離になるようにします。センタースピーカーはモニターT V 画面に近い方がセリフなどが自然に聞こえます。ただし、テレビが色ずれ等を起こすのを防止するため、防磁型のスピーカーを使用してください。防磁型でない場合は、テレビから離して設置してください。

注意 センタースピーカーをテレビの上に設置するときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

スピーカーの配置についてより詳しくは､｢スピーカーの配置について｣(→87ページ)をご覧ください。

スピーカーインピーダンスの切り換え

すべての接続が終了してから行ってください。

スピーカーインピーダンスの設定は、6 Ω以上8 Ω未満と8 Ω～16 Ωの2通りあります。お手持ちのスピーカーが6 Ω以上8 Ω未満の場合は以下の手順で設定を変更してください。（工場出荷時は8 Ω～16 Ωに設定されています。）

1 本機をスタンバイ状態にする。

2 SPEAKERSボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押す。

スピーカーインピーダンスの設定が変更されます。
再度、設定を変更したいときは手順1からやり直してください。

表示	説明
Speaker 8Ω	スピーカーインピーダンスが8 Ω～16 Ωの場合
Speaker 6Ω	スピーカーインピーダンスが6 Ω以上8 Ω未満の場合

映像機器の接続について(パイオニアビデオコンバーター)

本機は入力された映像信号を異なる種類の信号に変換できるビデオコンバーターを搭載していますので、以下のように映像コードの組み合わせを選ぶことができます。各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」(→93ページ)をご覧ください。

映像をテレビに表示する

ソース機器からの映像信号をテレビで表示するには下記の「○」の組み合わせで接続できます。

映像コードの組み合わせ

ソース側の映像コード ＼ TV(モニター)側の映像コード	ビデオ(コンポジット)	Sビデオ	コンポーネントまたはD4ビデオ	HDMI
ビデオ(コンポジット)	○	○注1	○	×
Sビデオ	○注1	○	○	×
コンポーネントまたはD4ビデオ	×	×	○	×
HDMI	×	×	×	○

コンポーネントまたはD4ビデオで接続した場合、入力の設定(Component/D4 Input)(→70ページ)が必要になります。

注1 コンポーネント/D4ビデオ入力の設定を行うと表示することができなくなります(→70ページ)。

映像を録画する

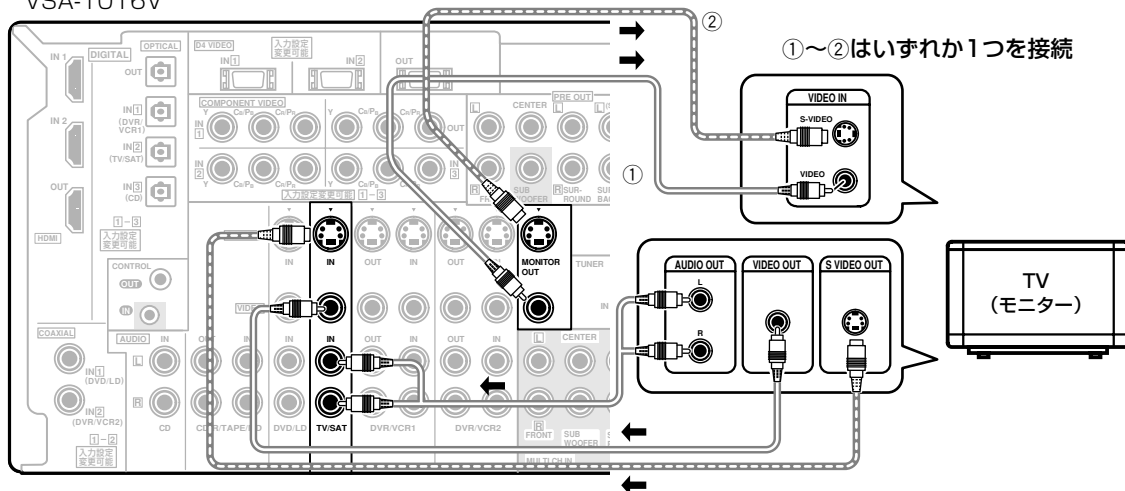
ソース機器からの映像信号を録画するには必ず同じコードで接続します。

映像コードの組み合わせ

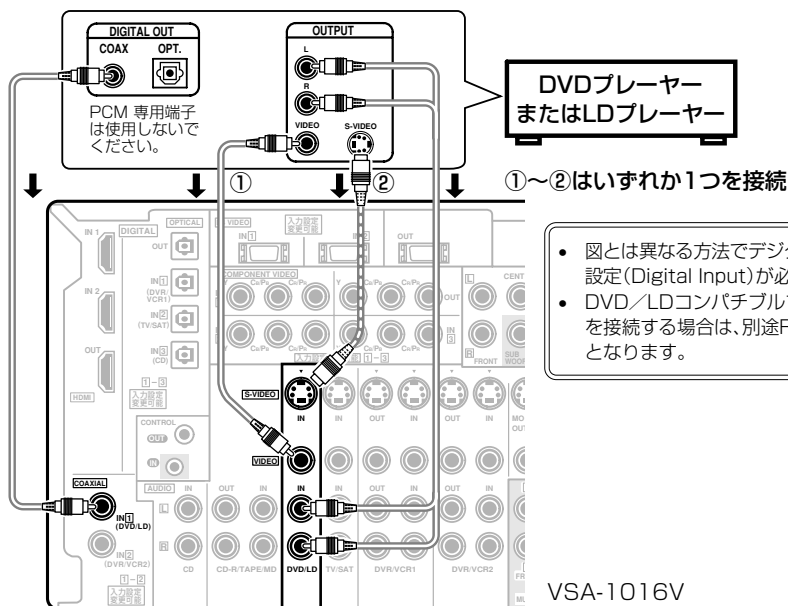
ソース機器 ＼ 録画機器	ビデオ(コンポジット)	Sビデオ	コンポーネントまたはD4ビデオ
ビデオ(コンポジット)	○	×	×
Sビデオ	×	○	×
コンポーネントまたはD4ビデオ	×	×	×

- 入力機器とテレビの両方にSビデオ端子/コンポーネント端子が付いているときは、Sビデオ端子/コンポーネント端子で接続すると、より鮮明な映像を再生することができます(アナログ映像信号の場合、コンポジットよりもSビデオの方が、Sビデオよりもコンポーネントの方が良い画質となります)。入力機器とテレビの両方にHDMI端子が付いているときは、HDMI接続することをお勧めします。映像をデジタルのまま伝送しますので、最高画質をお楽しみいただけます。
- テレビによっては、Sビデオ入力とコンポジット入力の両方を接続していると、信号の有無にかかわらず常にSビデオ入力が優先され、コンポジット端子でのみ接続している機器の映像を見ることができない場合があります。詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。

TV(モニター)の接続

「映像機器の接続について」(→26ページ)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルについては「接続コードについて」(→93ページ)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」(→30ページ)を、HDMI端子で接続するときは「HDMI機器を再生する」(→47ページ)をご覧ください。

TV(モニター)の1つの入力に、Sビデオやコンポーネントビデオなど数種類のコードを複数同時に接続すると、映像が乱れたり汚く映ることがあります。詳しくはTV(モニター)の取扱説明書をご覧ください。

DVDプレーヤーの接続

「映像機器の接続について」(→26ページ)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」(→93ページ)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」(→30ページ)を、HDMI端子で接続するときは「HDMI機器を再生する」(→47ページ)をご覧ください。

- 図とは異なる方法でデジタル接続するときは、デジタル入力端子の設定(Digital Input)が必要です(→69ページ)。
- DVD/LDコンパチブルプレーヤーなどのDDRF出力端子(LD用)を接続する場合は、別途RFデモジュレーター(市販のもの)が必要となります。

ホームシアター入門
各部の名称
接続
再生
応用操作
設定
リモコン
エキスパート
参考/技術資料
困ったとき

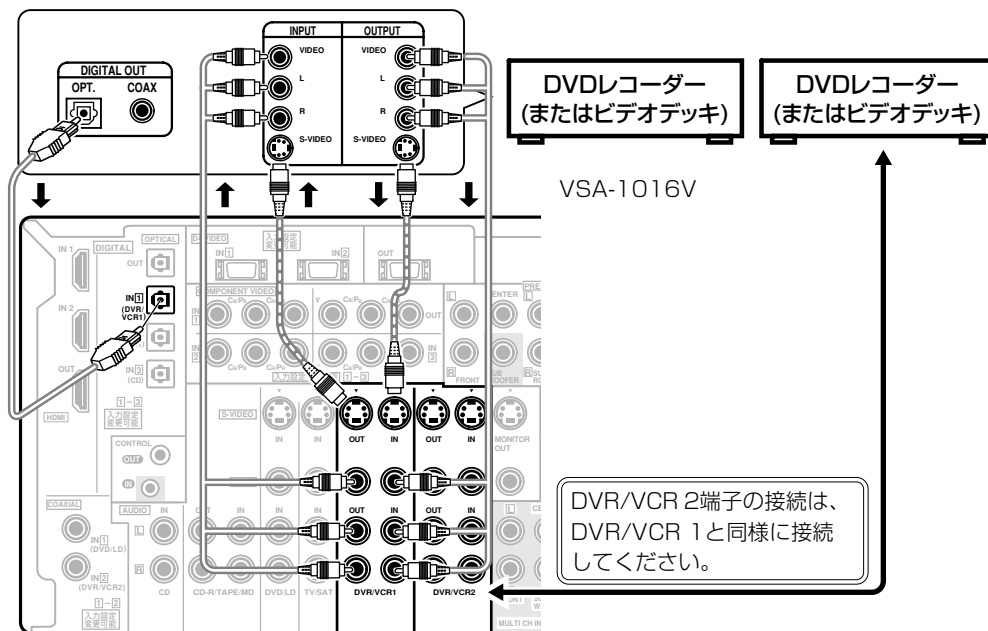
DVDレコーダーやビデオデッキの接続

「映像機器の接続について」（→26ページ）をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」（→93ページ）をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」（→30ページ）を、HDMI端子で接続するときは「HDMI機器を再生する」（→47ページ）をご覧ください。
録画をすることを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。

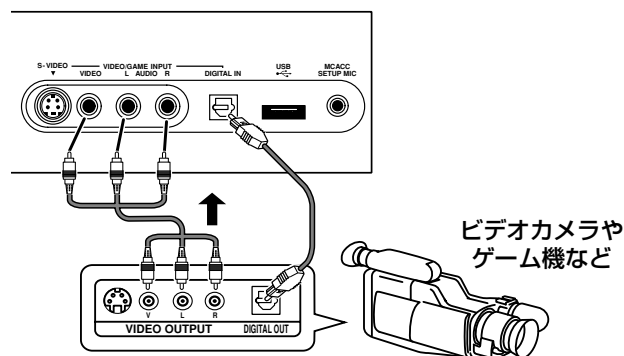
DVDレコーダー（またはビデオデッキ）

DVDレコーダー（またはビデオデッキ）

VSA-1016V

DVR/VCR 2端子の接続は、DVR/VCR 1と同様に接続してください。

前面端子を使った接続

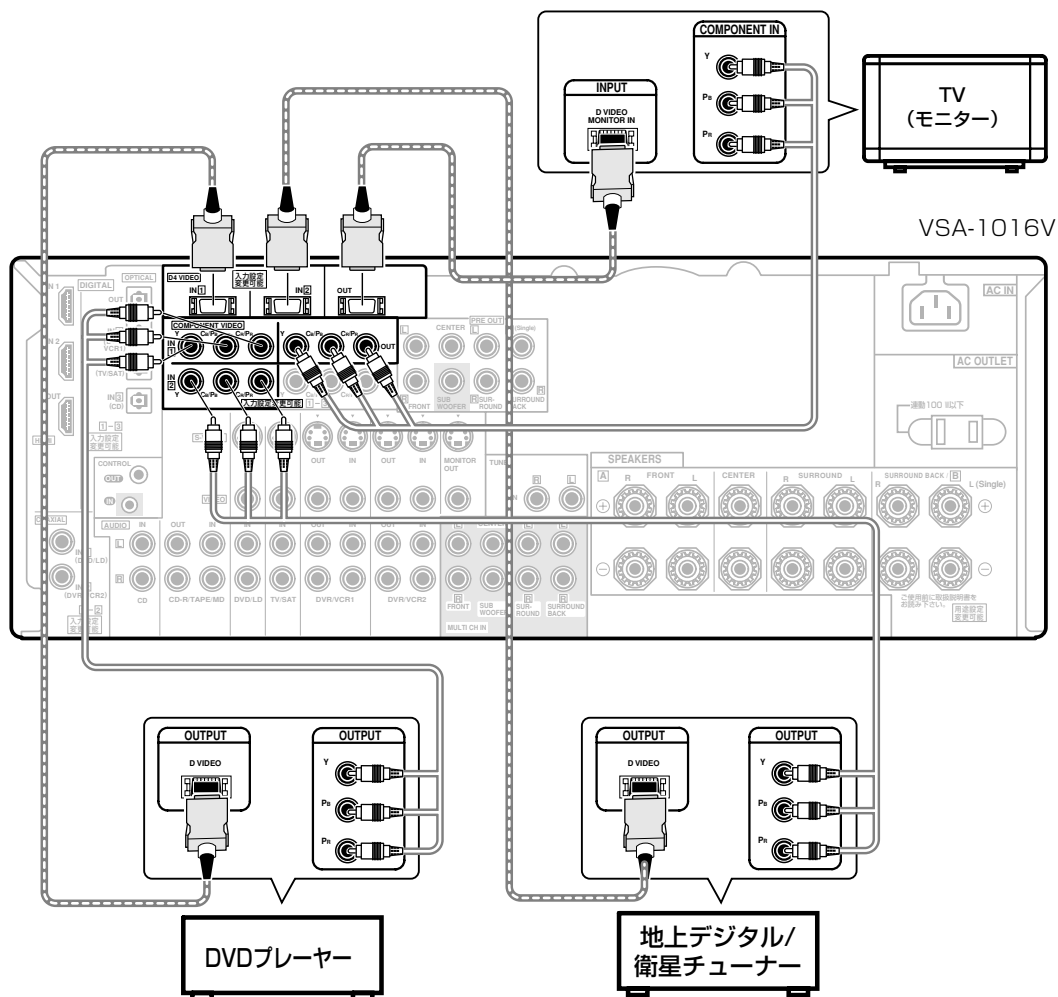
フロントパネルのVIDEO/GAME INPUTを使って各機器を接続できます。この機器を再生するときは、入力ファンクション選択でVIDEO/GAMEを選んでください。

ポータブルＤＶＤプレーヤーなどは、専用の接続コードが付属している場合があります。詳しくは接続する機器の取扱説明書をご覧ください。

地上デジタル/衛星チューナーの接続

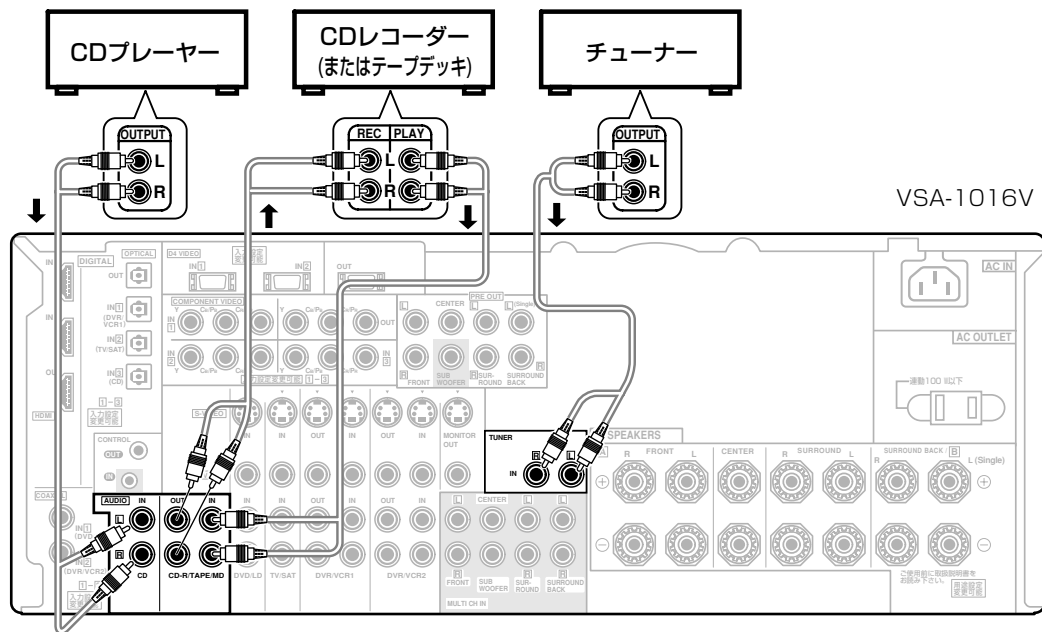
「映像機器の接続について」（→26ページ）をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コードについて」（→93ページ）をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続」（→30ページ）を、HDMI端子で接続するときは「HDMI機器を再生する」（→47ページ）をご覧ください。
同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合はデジタル入力端子の設定（Digital Input）が必要です（→69ページ）。

VSA-1016V

映像信号のコンポーネント/D4ビデオ接続

コンポーネント端子やD端子で接続すると、コンポジットビデオやSビデオ端子で接続したときよりも高品位な映像品質をお楽しみいただくことができます。「映像機器の接続について」(→26ページ)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。コンポーネント端子やD端子で接続するときは、ビデオ入力の設定(Component/D4 Input)が必要です(→70ページ)。
録画をすることを前提とする場合は、ソース機器と録画機器の映像信号をコンポジットかSビデオのどちらかに統一して接続する必要があります。また音声信号についてもアナログ接続する必要があります。

コンポーネント端子やD端子で接続するときは、DVDプレーヤー側でコンポーネントビデオの出力設定が必要な場合があります。

アナログ音声機器の接続

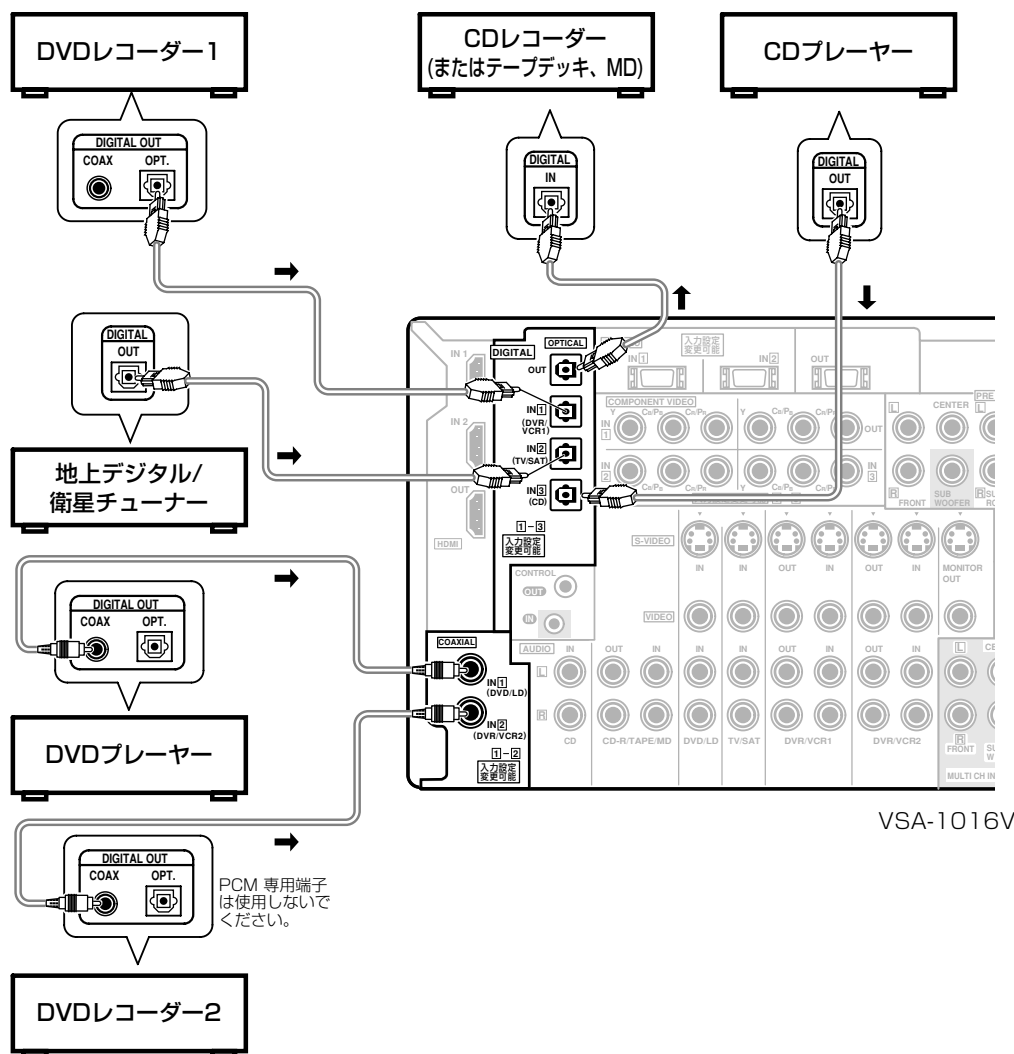
デジタル出力のあるCDプレーヤーやCDレコーダーでは、さらに「デジタル音声機器の接続」(→32ページ)もできます。

カセットデッキを設置する場所によっては、再生したときに雑音などが発生する場合があります。これはアンプのトランスによるリーケージフラックス(漏れ磁束)の影響によるものです。このようなときには、設置する場所を変えるか、アンプから離して設置してください。

プリアウトを使ったパワーアンプの接続

「サラウンドバックシステムの設定」(→55ページ)と連動して、プリアウト端子のサラウンドバックchから出力される音声が以下のように変わります。他のパワーアンプなどを接続する場合はご注意ください。
[Normal(SB)]のとき:サラウンドバックchの音声
[Second Zone]のとき:ダウンミックスされた2 chの音声
[Front Bi-Amp]のとき:フロントchと同じ音声

この接続を行った場合、個々のアンプの能力やボリューム位置などにより音場補正を正確に行うことができない場合があります。

デジタル音声機器の接続

ドルビーデジタルやDTSソフトを再生するには、デジタル接続が必要です。接続は同軸ケーブルまたは光ファイバーケーブルで行います(1つの機器に対してどちらか一方のみで接続します)。
HDMI端子で接続するときは「HDMI機器を再生する」(→47ページ)をご覧ください。

- どのデジタル入力端子をどの機器に使用するかは自由に変更することができます。ただし、工場出荷時の設定(リアパネル表記)と異なる接続を行う場合はデジタル入力端子の設定(Digital Input)(→69ページ)で設定の変更を行ってください。
- HDMI入力端子から入力した信号はデジタル出力端子からは出力されません。

電源コードの接続

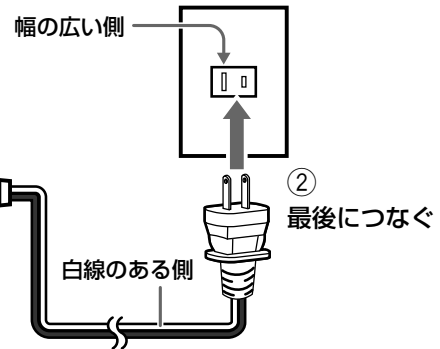
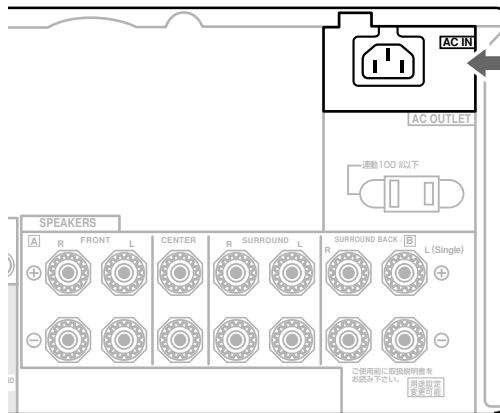
すべての接続が終了したら、電源コードを家庭用電源コンセント(AC 100 V)に接続します。

電源コードのつなぎかた

本機の電源コードは極性管理されています。音質向上のため、極性を合わせせることをお勧めします。下図のように電源コードの白線のある側をコンセントの幅の広い方(アース側)に合わせて差し込んでください。

警告

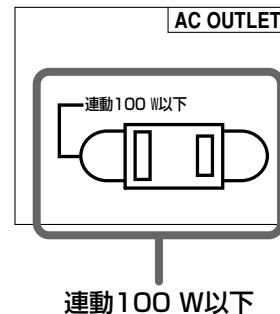
- **本機の電源コードは着脱式になっていますが、付属しているコード(電流容量12 A、機器側3Pプラグインソケット方式)以外の電源コードはご使用にならないでください。**
- 本機のAC INLETのアース端子は本機のシャーシに接続されていません。

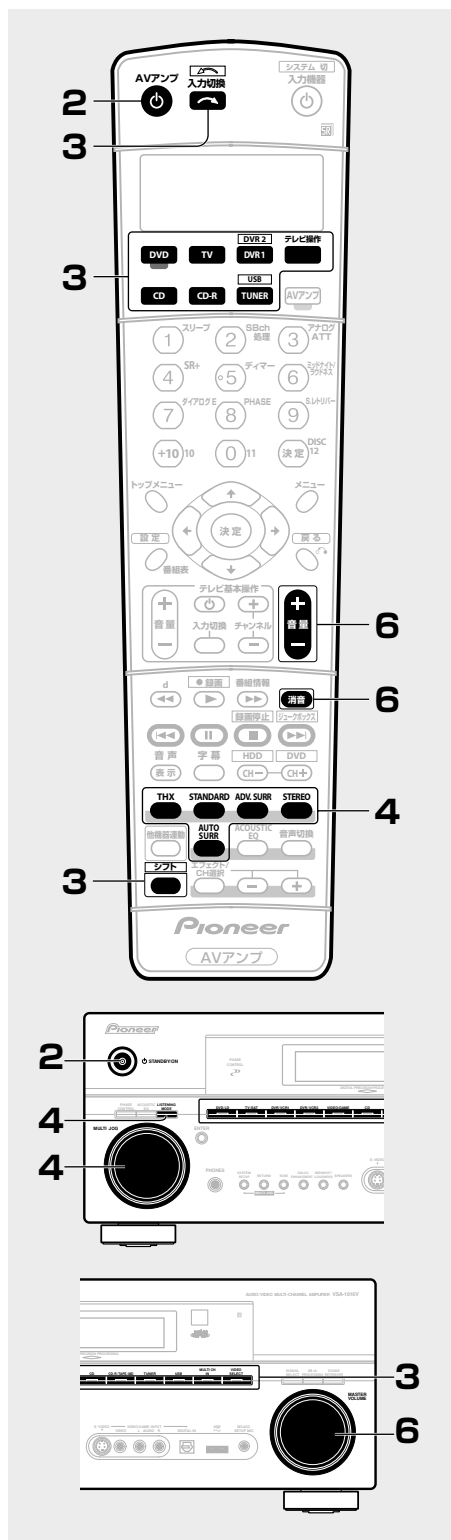
- 旅行などで長期間本機を使用しない場合は、必ず電源コンセントから電源コードを抜いておいてください。長期間、電源コードを抜いた状態でも、本機で設定した各種設定が消去されることはありません。
- 電源コードを抜くときは必ず本体をスタンバイ状態にしてからコードを抜いてください。

予備コンセント(AC OUTLET)の接続

[連動100 W以下]

本機の電源スイッチのON/STANDBY(OFF)の切り換えに連動して、接続した機器の電源をON/OFFできます。
接続した機器の消費電力が100 Wを超えないようにしてください。

注意

- 消費電力がパネルに表示されているワット数を超えるような電気器具(暖房、アイロン、テレビ、トースター、ドライヤーなど)は絶対に接続しないでください。機器の故障や火災の恐れがあります。
- 表示されている消費電力が本機のパネル表示値より少なくてもテレビ、サブウーファー、パワーアンプ、は接続しないでください。電源を入れたときや大きな音で再生する場合に大きな電流が流れる場合があります。

アンプから音を出す　～基本再生～

接続した機器を再生するときの手順です。本機では、「音声入力信号の切り換え」(→35ページ)で入力信号を選んで、「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」(→36ページ)でリスニングモードを選ぶことが主な操作です。

1　再生する機器の電源を入れる。

2　AVアンプ

本機の電源を入れる。

(本体の場合は、 STANDBY/ONを押します。)

3　入力切換

再生する機器を選ぶ。

ボタンを押すたびに入力機器が切り換わります(本体の場合は入力ファンクション切換ボタンで選択します)。マルチコントロールボタンで直接選択することもできます。USBのように黒い四角枠で表示されている入力は、シフトを押しながらそれぞれのボタン(例えばUSBを選ぶときはTUNER)を押すことで選択することができます。

また、必要に応じて音声入力信号の種類を選びます。「音声入力信号の切り換え」(→35ページ)

4

お好みのリスニングモードを選ぶ。

本体の場合はLISTENING MODEボタンとMULTI JOGで選択します。

「リスニングモードでいろいろな音を楽しむ」(→36ページ)

5　再生機器の再生を開始する。

6

音量を調節する。

−80 dB(最小値)から＋12 dB(最大値)の範囲で調節できます。

(本体の場合は、MASTER VOLUMEで調節します)

一時的に音を消したいときは消音ボタンを押します。もう一度押すか音量を調節することで解除します。

音量について

MCACCなどにより正確にチャンネルレベルを補正した場合、0 dBが映画館での再生音量とほぼ同等になります。

(0 dB は大音量です。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします)

本機の対応フォーマット

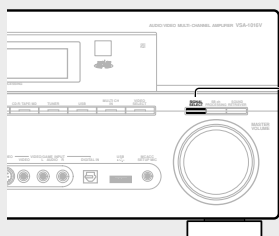
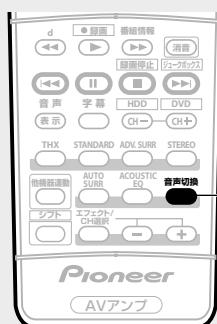
デジタル(光／同軸)入出力端子経由の対応信号

ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC、MPEG-4 AAC、WMA 9Pro、PCM

(サンプリング周波数:32 kHz、44.1 kHz、48 kHz、88.2 kHz、96 kHz)

音声入力信号の切り換え

本機では各入力についてアナログとデジタルの入力信号を切り換えることができます。

1 音声切換

再生したい入力信号を選択する。

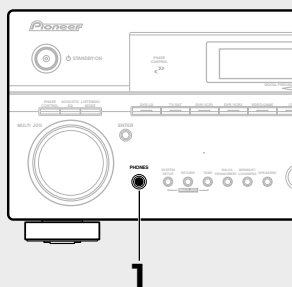
音声切換ボタン(本体はSIGNAL SELECTボタン)を押すたびに、以下のように切り換わります。

→ AUTO → ANALOG → DIGITAL →

- ＡＵＴＯにしたときは、ＤＩＧＩＴＡＬ→ANALOGの優先順位で自動的に入力信号を選択します。

- 音声切換ボタン(本体はSIGNAL SELECTボタン)でANALOGを選択した状態で DTS対応のLDを再生すると、DTSの原信号がそのまま再生されるため、ノイズが発生します。入力信号は必ずDIGITALを選択してください。
- DVDプレーヤーの機種によっては、再生できるデジタル信号に制限があります(DTS信号を出力しないなど)。詳しくは、お使いのDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

- デジタル入力端子が割り当てられていない機器の音声入力は、ANALOGに固定されています。
- USB入力ではANALOGに固定されています。
- 非対応のデジタル信号は再生できません。その場合は(アナログ接続して)音声入力は、ANALOGを選択してください。
- カラオケ機器のマイク音声、およびアナログオーディオのみ収録されているLDの音声はデジタル出力されません。これらを再生するには必ずANALOGを選択してください。

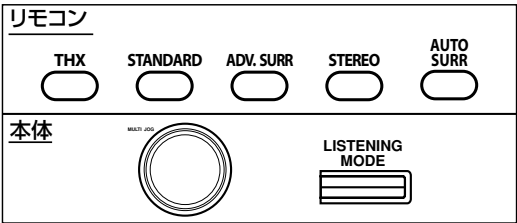
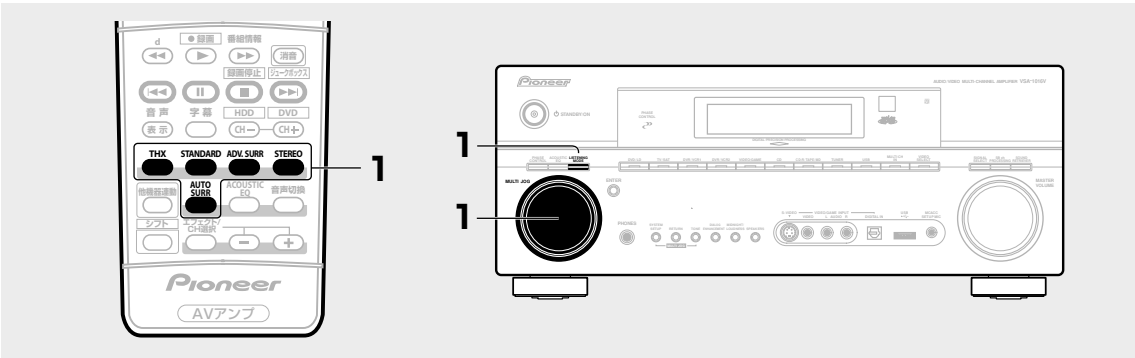
ヘッドホンで聞く

1

ヘッドホンをPHONES端子に差し込む。

差し込むとスピーカーから音は出なくなります。

- リスニングモードは「STEREO」または「PhonesSurround」のみ選択できます。
- MCACCはOFFになり、MCACCインジケーターも消灯します。
- 各リスニングモードの効果は2 chにダウンミックスされます。
- ヘッドホンを差し込むとスピーカーから音は出なくなります。ただし、MULTI CH IN入力のときはサブウーファーからのみ音が出ます。
- MULTI CH IN入力のときは、FRONT L/R端子からの音声のみをヘッドホンから出力します。
- ヘッドホンを差し込んでいるときはシステムセットアップを行うことはできません。

リスニングモードでいろいろな音を楽しむ

再生機器からの信号にいろいろな音場効果を加えることができます。

1 リスニングモードを選ぶ。

本体の場合、LISTENING MODEボタンを押してモードのタイプを選んでからMULTI JOGでモードの種類を選択します。リモコンの場合、それぞれのモードのボタンを押してモードの種類を切り換えて選択します。
それぞれのリスニングモードについて下記の設定が選べます。

モードのタイプ	ボタン	概要	選択肢	用途
HOME THX	THX	映画の再生に適します。デコード処理後THX独自技術を付加することで、映画館や収録スタジオの音場が再現されます。 ＊ THX時は、「便利な音声再生のための機能」などの使用が制限されます。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2 ch信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic Neo:6 CINEMA THX GAMES MODE ■5.1 ch信号入力時 THX CINEMA Pro Logic IIx MOVIE THX Surround EX THX Select2 CINEMA THX MUSICMODE THX GAMES MODE	 映画 古い映画 映画 ゲーム 映画 映画 映画/音楽 映画 音楽 ゲーム
STANDARD SURROUND	STANDARD	サラウンド再生のためのデコードを行います。 2 chソースはマトリックス･サラウンド･デコードをします。 *入力信号や設定により、リスニングモードの選択肢が変わります。*	■2 ch信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic IIx MUSIC Pro Logic IIx GAME Pro Logic Neo:6 CINEMA Neo:6 MUSIC ■5.1 ch信号入力時 Pro Logic IIx MOVIE Pro Logic IIx MUSIC Dolby Digital EX DTS-ES DTS Neo:6	 映画 音楽 ゲーム 古い映画 映画 音楽 映画 音楽 映画/音楽 映画/音楽 映画/音楽
ADVANCED SURROUND	ADV.SURR	デコード処理とパイオニア独自の技術を組み合わせたサラウンド再生モードです。 *数種類からの選択が可能です。（デコード処理を変更することはできません。）*	ADVANCED MOVIE ADVANCED MUSIC TV SURROUND SPORTS ADVANCED GAME EXPANDED 7ch STEREO VIR.SURROUND PhonesSurround	映画 音楽 TV放送 スポーツ ゲーム 2 ch信号など 音楽 映画 ヘッドホン使用時

モードのタイプ	ボタン	概要	選択肢	用途
STEREO/ DIRECT	STEREO	すべての信号を2 ch(最大2.1 ch)で再生します。 ＊ DIRECT時は、「便利な音声再生のための機能」などの使用が制限されます。	STEREO(通常ステレオ再生) DIRECT(高品位ステレオ再生)	音楽 音楽
AUTO SURROUND	AUTO SURR	各フォーマットに最適な再生方式を自動的に選択します。	AUTO SURROUND	すべてのソース

より詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→94ページ)をご覧ください。

HOME THX および STANDARD SURROUNDモードについて
以下3つの要素が複雑に関係するため、選択肢は場合によりさまざまに変化します。
「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→94ページ)にその組み合わせ表があります。
- 入力信号の種類
- 接続(設定)したサラウンドバックスピーカーの本数(→62ページ)
- SBch処理の設定(→41ページ)

より詳しくは、「デジタル音声フォーマットについて」(→88ページ)をご覧ください。
- DTS96/24、PCM(96 kHz/88.2 kHz)信号入力時、HOME THXモードは選択できません。
- MPEG-2 AACのステレオ信号入力時、Neo:6 CINEMAとNeo:6 MUSICは選択できません。
- ▯▯Pro Logicは、最大5.1 chまでの出力となります。
- サラウンドバックスピーカーが1本の接続(設定)の場合、5.1 ch信号入力時でも▯▯Pro Logic IIx MOVIEは選択できません。
- ヘッドホン挿入時はHOME THXモードを選択することができません。

ADVANCED SURROUNDモードについて
- PCM(96 kHz/88.2 kHz)、DTS96/24、WMA9 Pro信号入力時、ADVANCED SURROUNDモードは選択できません。
- より詳しくは、「ADVANCED SURROUNDモードの種類と効果」(→95ページ)をご覧ください。

STEREOモードについて
- 設定や入力ソースにより、サブウーファーからも音が出力される場合があります。

AUTO SURROUNDモードについて
入力信号に収録されたチャンネル数に応じて、再生チャンネル数を自動的に選択します。
- CDなどの2 ch信号入力時→ステレオ再生
- Dolby Surround信号入力時→▯▯Pro Logic IIx MOVIEなど
- デジタル5.1 ch信号入力時→Dolby Digital、DTSなど
- 6.1 ch再生検出信号付きデジタルマルチch信号入力時→▯▯Pro Logic IIx MOVIE、Dolby Digital EX、DTS-ES

「AUTO SURROUND」について、詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→94ページ)をご覧ください。

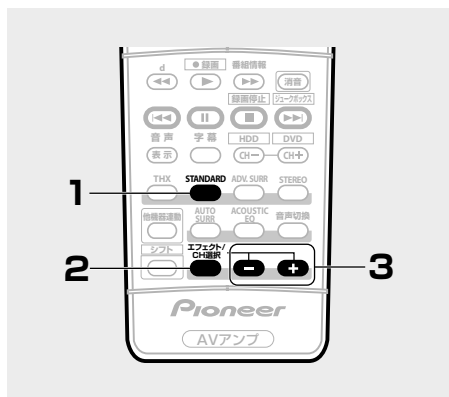
デコードとは

デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、2 chの音源をマルチch化させる演算技術をマトリックス・デコードと言い、5.1 ch信号を6.1 chに伸長させる技術もデコードと呼ぶことがあります。

リスニングモードのオプション機能

DDPRO LOGIC IIx MUSICモードに音響効果を加えて調整する

2 chソースを入力しているとき、STANDARDモードのDDPRO LOGIC IIx MUSIC（またはDDPRO LOGIC II MUSIC）には3つの音響効果を加えることができます。それぞれの説明は以下のとおりです。

CENTER WIDTH（C WIDTH）：センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで、音色の不一致を緩和させることが可能になり、音楽再生により適した音場を創り出すことができます。効果は0～7の範囲で調整することができます。0がセンタースピーカーからのみの出力で、7はセンターチャンネルの音声すべてを左右のフロントスピーカーに振り分けます。工場出荷時は3に設定されています。
DIMENSION（DIMEN.）：リスニングポジションから前方の音場を強くするか、後方の音場を強くするかを調整することで、広がりのある音場を創り出すことができます。＋3から－3の範囲で調整することができます。＋3はリスニングポジションから前方の音場が強くなり、－3はリスニングポジションから後方の音場が強くなります。工場出荷時は0に設定されています。
PANORAMA（PNRM.）：前方の音場を左右に大きく回り込ませ、サラウンドチャンネルにつなげるようなサラウンド効果を加えます。正確な定位よりも雰囲気を楽しむための機能です。オンまたはオフの設定で、工場出荷時はオフに設定されています。

1 STANDARD

DDPRO LOGIC IIx MUSICモードを選択する。

STANDARD ボタンを押します。
（→36ページ）

2 エフェクト/CH選択

「C WIDTH」、「DIMEN.」、「PNRM.」の中から加えたい音響効果を選ぶ。

ディスプレイに設定したい音響効果が表示されるまで押してください。

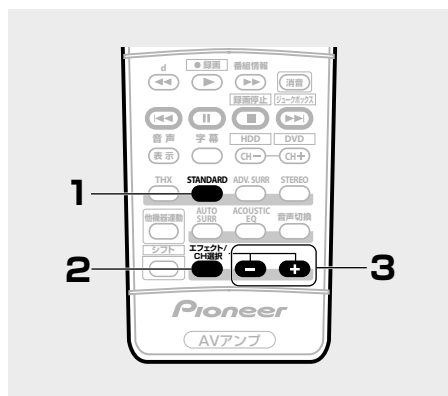
3

音響効果を調整する。

＋/－ボタンで調整します。

「Speaker Setting」（→62ページ）で、センタースピーカーがNO（無し）に設定されていると、「C WIDTH」は調整できません。

Neo:6 MUSICモードに音響効果を加えて調整する

2 chソースを入力しているとき、STANDARDモードのNeo:6 MUSICに音響効果を加えられます。センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで音色の不一致を緩和し、音楽再生に適した音場を創り出すことができます。
CENTER IMAGE(C. IMAGE)：効果は0〜10の範囲で調整することができます。0はセンターチャンネルの音声が左右のフロントスピーカーからも出力されて、音場が広がったように聞こえます。10はセンターチャンネルの音声が主にセンタースピーカーから出力し、センターの音像が明確化されます。工場出荷時は3に設定されています。

1 STANDARD

Neo:6 MUSICモードを選択する。
STANDARDボタンを押します。
(→36ページ)

2 エフェクト/CH選択

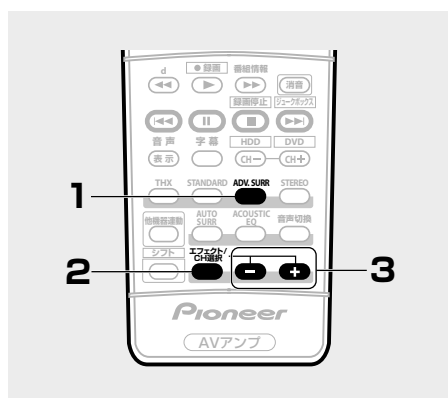
「C.IMAGE」を選ぶ。
ディスプレイに「C.IMAGE」が表示されるまで押してください。

3

Neo:6 MUSICモードのセンターイメージを調整する。
＋/－ボタンで調整します。

「Speaker Setting」(→62ページ)で、センタースピーカーがNO(無し)に設定されていると、「C.IMAGE」は調整できません。

ADVANCED SURROUNDモードの効果を調整する

ADVANCED SURROUNDの各モードに付加される残響音などの効果を調整することができます。

1 ADV.SURR

ADVANCEDモードを選択する。
ADV.SURRボタンを押します。
(→36ページ)

2 エフェクト/CH選択

エフェクトレベルを選択する。
ディスプレイに「EFFECT」が表示されるまで押してください。

3

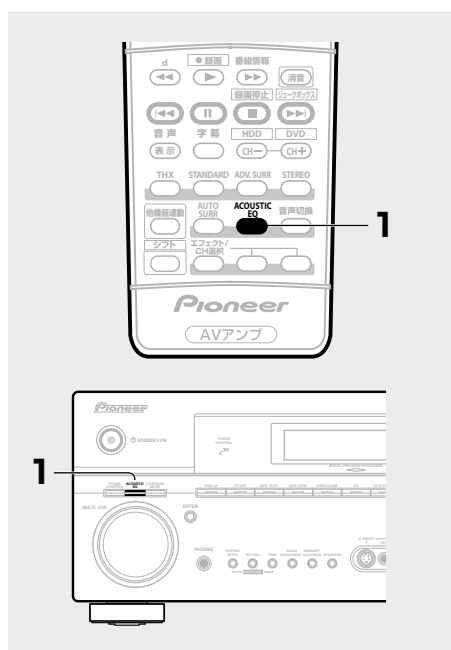
エフェクトレベルを調整する。
エフェクトレベルは10〜90の範囲で調整することができます。

- 工場出荷時は、6/7ch STEREOが90、それ以外のモードが70に設定されています。
- エフェクトレベルは各モードごとに設定できます。

いろいろな状況に合わせた機能を選択/調整する

アコースティックキャリブレーションEQ（周波数特性の補正）の選択

「リスニング環境を測定して最適な設定をする（Auto MCACC）」（→12ページ）などで設定された、アコースティックキャリブレーションEQ（視聴環境の周波数特性の補正）の種類を選択します。チャンネル間の音色の違いを統一させるため、再生音のつながりが良くなり、音場バランスが改善されます。設定項目は以下のとおりです。

ALL CH ADJUST：部屋の特性を含めて、スピーカーシステム全体をフラットに補正した周波数特性です。映画館やダビングステージと同じ補正タイプになります。
FRONT ALIGN：スピーカーシステム全体をフロントchの周波数特性に合わせます。フロントスピーカーには補正をかけずに音場バランスの改善が行えます。
CUSTOM1/2：「自動測定された補正カーブを手動で調整する」（→59ページ）で、上記2つの補正タイプをお好みに調整した設定値です。
EQ OFF:補正を行いません。

1 ACOUSTIC EQ

アコースティックキャリブレーションEQの補正タイプを選ぶ。

押すたびにアコースティックキャリブレーションEQが以下のように切り換わります。

→ ALL CH ADJUST → FRONT ALIGN →
← EQ OFF ← CUSTOM 2 ← CUSTOM 1 ←

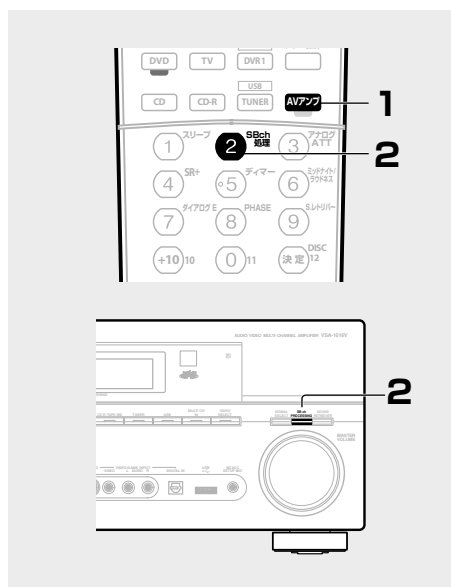
ALL CH ADJUSTまたはFRONT ALIGN、CUSTOM1、CUSTOM2のときはONとなり、MCACCインジケーターが点灯します。

- アコースティックキャリブレーションEQのON/OFFはすべてのファンクションに共通で切り換わります。
- MULTI CH IN入力モードでは、使用できません。
- WMA9 Pro信号入力時は使用できません。
- リスニングモードでDIRECTを選択しているときにアコースティックキャリブレーションEQをONにすると、リスニングモードが自動的にDIRECTからSTEREOに切り換わります。
- 工場出荷時はEQ OFFに設定されていますが、「リスニング環境を測定して最適な設定をする（Auto MCACC）」（→12ページ）または「アコースティックキャリブレーションEQ」（→58ページ）を行ったときは自動的にON（ALL CH ADJUST）になります。
- ヘッドホン使用時には効果がありません。

サラウンドバックch処理を切り換える

サラウンドバックスピーカーを接続しているときに、サラウンドバックch音声の処理を切り換え、最大で7.1 ch再生か5.1 ch再生かを変更できる機能です。また、サラウンドバックスピーカーを接続していないときは、仮想のサラウンドバック音声を創り出します。設定項目は以下のとおりです。

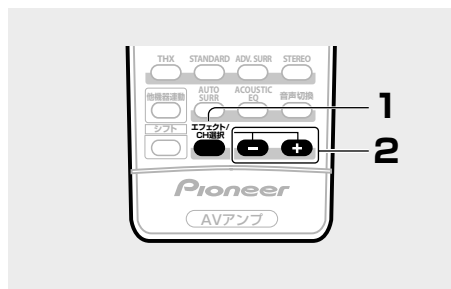
OFF：サラウンドバックchへのデコード処理は行わず、最大5.1 chでの再生となります。
AUTO：入力信号の種類と「6.1 ch再生検出信号」を検出し、サラウンドバックchへのデコード処理技術を自動選択することで、再生チャンネル数を切り換えます。最もソフトに忠実な再生となります。
ON：常にサラウンドバックchへのデコード処理技術を付加するため、最大の出力チャンネル数でお楽しみいただけるモードです。

入力信号、リスニングモードの種類や組み合わせによって、サラウンドバックスピーカーからの音の出力が異なります。詳しくは「リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧」(→94ページ)の表をご覧ください。

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする**

2 2 SBch処理　**SBch処理モードを選択する。**
ボタンを押すたびに、ONとAUTOとOFFが切り換わります。

- 以下のときはSBch処理モード(バーチャルサラウンドバックモード)を切り換えることができません。
  - MULTI CH IN入力を選んでいるとき
  - 「Speaker Setting」(→62ページ)で、サラウンドスピーカーがNO(無し)に設定されている、または「Surr Back System」(→55ページ)でSecond Zone、Front Bi-Ampが選ばれているとき
  - PCM(96 kHz/88.2 kHz)、DTS96/24信号を入力しているとき
  - ヘッドホンを挿入しているとき
  - STEREO/DIRECTモードが選択されているとき
- サラウンドchが収録されていないソース(シーン)では、仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すことはできません。

再生中にスピーカーの出力レベルを調整する

再生している音を聴きながら、チャンネルごとに出力レベルを調整できます。

1 エフェクト/CH選択　**スピーカーのチャンネルを選択する。**
ディスプレイに「L 0.0dB」などと表示されます。押すたびにチャンネルが切り換わります。

2 **出力レベルを調整する。**

−10.0 dBから＋10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整できます。

位相を合わせて音の打ち消し合いを防ぐ（BASIC PHASE CONTROL）

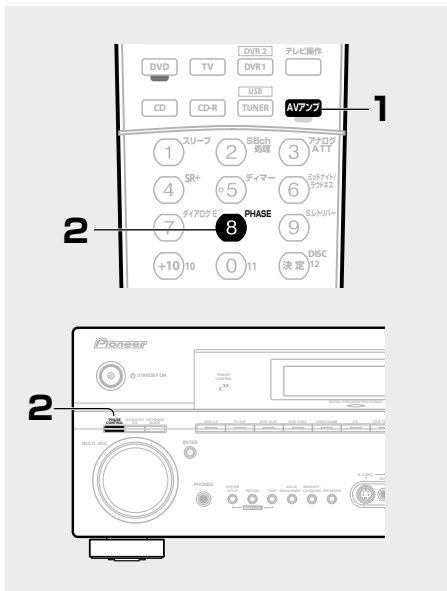
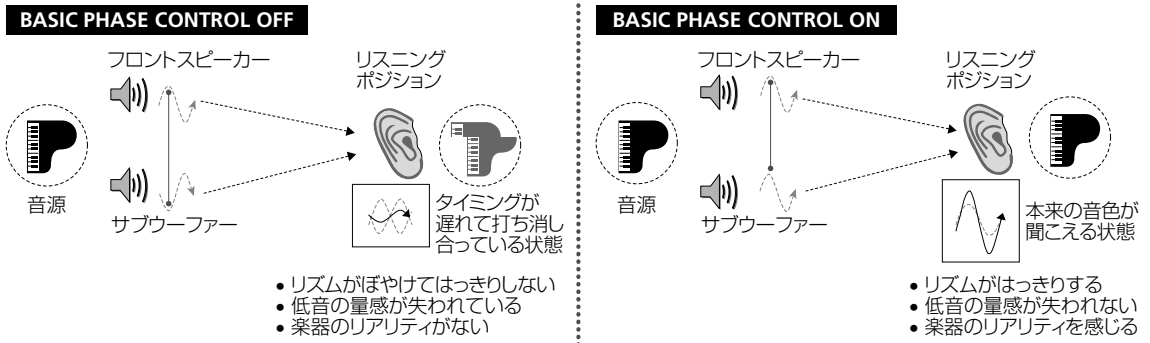
マルチチャンネル再生する際、LFE（超低域）信号や各チャンネルに含まれる低音成分はサブウーファーや他の最適なスピーカーに振り分ける処理がされます。しかし、この処理には原理上、位相がズレてしまう周波数（群遅延）が発生し、低域だけが遅れて聞こえたり他のチャンネルとの干渉により低音の打ち消し合いが発生してしまうなどの問題があります。本機では、BASIC PHASE CONTROLモードをONにすることで、原音に忠実な力強い低音を再現できます。工場出荷時はONに設定されています。通常はONでのご使用をお勧めします。
（位相とは2つの音波の時間的関係を表しています。2つの音波の山と山が合っている状態を位相が合っている、合っていない状態を位相がズレていると言います。）

BASIC PHASE CONTROL OFF

フロントスピーカー
リスニングポジション
音源
サブウーファー
タイミングが遅れて打ち消し合っている状態

- リズムがぼやけてはっきりしない
- 低音の量感が失われている
- 楽器のリアリティがない

BASIC PHASE CONTROL ON

- リズムがはっきりする
- 低音の量感が失われない
- 楽器のリアリティを感じる

1 AVアンプ　リモコンをアンプ操作モードにする

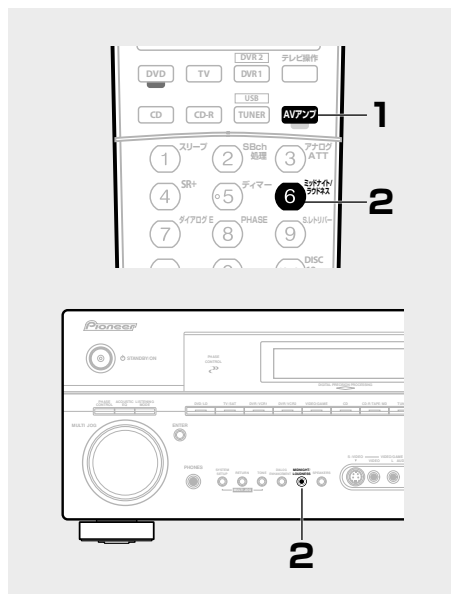
2 8 PHASE　BASIC PHASE CONTROLモードをONにする。

ボタンを押すたびに、ONとOFFが切り換わります。

- BASIC PHASE CONTROL機能はヘッドホン使用時にも効果があります。
- サブウーファー本体にPHASE切替スイッチがついているときはプラス側（0°側）に設定してください。ただし本機のBASIC PHASE CONTROLをONにしても効果が分かりにくいときは、サブウーファーの固体差が考えられますので、効果の大きい方を選んでください。また効果が分かりにくいときはサブウーファーの向き、場所を少しずつ変えてみることもお勧めします。
- サブウーファー内蔵のLowpassフィルタスイッチをOFFにしてください。OFFにできないサブウーファーは高いカットオフ周波数に設定してください。
- スピーカーの距離を正しく設定しないと、BASIC PHASE CONTROLの効果が正しく出ない場合があります。
- MULTI CH IN入力を選んでいるときはBASIC PHASE CONTROLモードをONにすることができません。

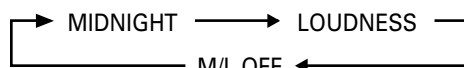
便利な音声再生のための機能

小さな音でも聴き取りやすくする（ミッドナイト／ラウドネス）

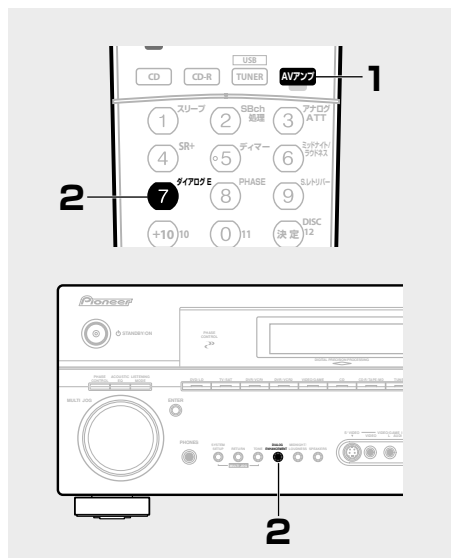
MIDNIGHT：夜間などの小音量再生では、音の響きが不足したり、微小な音やセリフが聞こえにくくなります。小さな音でも映画や音楽の微小な音やセリフを聴き取りやすくする効果があります。
LOUDNESS：低域・高域のレベルを自然に調整するため、小さな音でも音楽を聴き取りやすくする効果があります。（フロントchのみ有効）

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 **ミッドナイトリスニング／ラウドネスモードをONにする。**

6 ミッドナイト/ラウドネス

ボタンを押すたびに、以下のように切り換わり、それぞれのインジケーターが点灯します。

- 音量に合わせて効果も自動調整されます。
- DIRECTモードのときはSTEREOモードに切り換わります。
- 以下のときはミッドナイト／ラウドネスモードをONにすることができません。
  - MULTI CH IN入力を選んでいるとき
  - リスニングモードがHOME THXモードのとき
  - PCM（96 kHz/88.2 kHz）、DTS96/24、WMA9 Pro信号を入力しているとき

セリフやボーカルの音を際立たせる（ダイアログエンハンスメント）

音に定位感を持たせることで映画／ドラマのセリフや音楽のボーカルを際立たせ、より聴き取りやすい音にします。

1 AVアンプ　**リモコンをアンプ操作モードにする。**

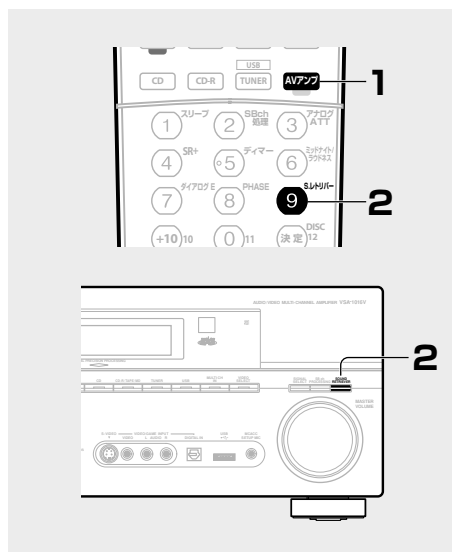
2 **ダイアログエンハンスメント機能をONにする。**

7 ダイアログ E

ボタンを押すたびに、ONとOFFが切り換わります。

- 以下のときはダイアログエンハンスメントモードをONにすることができません。
  - MULTI CH IN入力を選んでいるとき
  - リスニングモードがHOME THXモードのとき
  - PCM（96 kHz/88.2 kHz）、DTS96/24、WMA9 Pro信号を入力しているとき

圧縮音声を聴き取りやすくする(サウンドレトリバー)

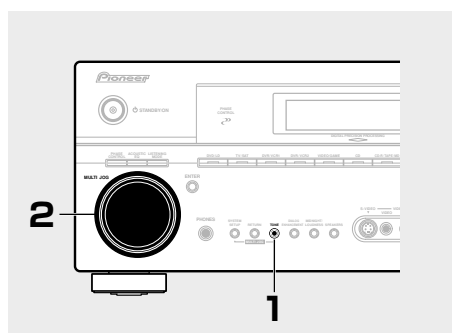
MP3 などの圧縮音声は圧縮処理される際、削除されてしまう部分が発生します。サウンドレトリバー機能では、DSP 処理によってその削除されてしまった部分を補い、音の密度感、抑揚感を向上させます。

1 AVアンプ **リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 S.レトリバー 9 **サウンドレトリバー機能をONにする。**

ボタンを押すたびに、ONとOFFが切り換わります。

サウンドレトリバー機能はPCM(96 kHz/88.2 kHz)、DTS96/24およびWMA9 Pro以外の2 ch音声信号にのみ有効です。

ステレオ再生時の低音/高音を調整する(トーンコントロール)

本体のTONEボタンとMULTI JOGを使って低音、高音の調整(トーンコントロール)ができます。

1 TONE **低音(BASS)か高音(TREB)のどちらのトーンを調整するか選択する。**

ボタンを押すたびに、低音(BASS)と高音(TREB)が切り換わります。

2 MULTI JOG **トーンを調整する。**

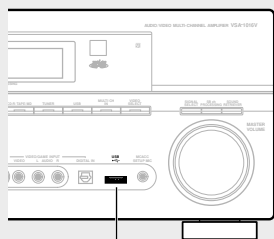
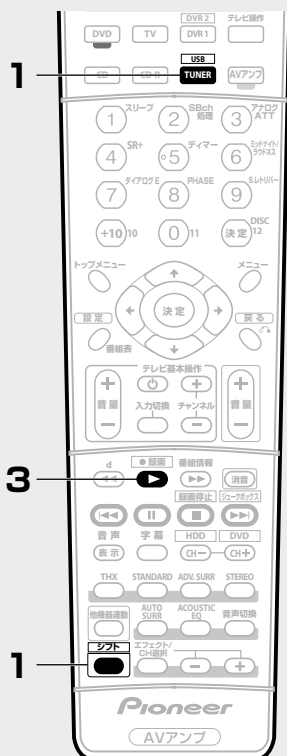
−6 dBから+6 dBの範囲内で、2 dB間隔で調整できます。

トーンコントロールはSTEREOモードのときのみ有効です。
ただし、AUTO SURROUNDでSTEREOモードが選ばれているときは調整することができません。

USBメモリーの再生

USBメモリーを再生する

お手持ちのUSBメモリーを本機に接続することで、USBメモリーに記録されている音楽ファイルを本機で再生することができます。本機ではステレオまたはモノラル音声を再生することができます。

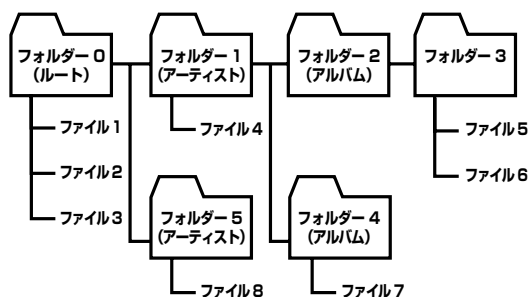
- 本機で再生できるUSBメモリーのファイルは、WMA、MP3、MPEG-4 AACのいずれかで、著作権保護のかかっていない音楽ファイルのみです。
- 本機とパソコンをUSBケーブルで接続して音楽ファイルを再生することはできません。本機が対応しているUSBメモリーは、外付ハードディスクや携帯フラッシュメモリー、デジタルオーディオ再生機（FAT16、FAT32のフォーマットに対応）などのUSBマスストレージクラスに属する機器です。
- 本機ではすべてのUSBメモリーの再生、および電源の供給を保証できない場合があります。また、本機と接続したことで、USBメモリーのファイルが万が一損失した場合、当社は一切の責任を負うことができませんので、あらかじめご了承ください。
- 容量の大きいUSBメモリーを接続したときは、読み込みに多少時間がかかることがあります。
- 本機はUSBハブには対応していません。

1

USBボタン（シフトを押しながらTUNER）を押す。

2 本機のUSB端子にUSBメモリーを接続する。

USB端子はフロントパネルにあります。

3 リモコンの再生ボタンを押して再生を開始する。

ファイルが複数のフォルダーに記録されている場合は、以下の例のような順番で再生します。このとき同じフォルダー内では、ファイル名に従って再生されます。
例）以下のようなフォルダー構成の場合、フォルダー0から5の順番でファイル1から8の順に再生します。

USBメモリーを抜くときは、本機の電源を切ってから抜いてください。

ボタン	機能
▶	再生を開始します。
❙❙	一時停止／一時停止解除します。
◀◀	早戻しします （2回押すことで速度が増します）。
▶▶	早送りします （2回押すことで速度が増します）。
❙◀◀	再生中のトラックの先頭に戻ります。 続けて押すと、前のトラックに戻ります。
▶▶❙	次のトラックの先頭に進みます。

USB ERR(USBエラー)について

USB ERRと表示されたときは以下の内容をご確認のうえ、下記の操作を行ってみてください。

USB ERR	内容
USB ERR 1	USBメモリーの消費電力が大きすぎます。
USB ERR 2	対応していないUSB機器が接続されています。
USB ERR 3	「故障かな？と思ったら」（103ページ）をご確認ください。

- 本機の電源を切ってから、再度電源を入れてみてください。
- 本機の電源を切ってからUSBメモリーを抜き、再度USBメモリーを接続して電源を入れてみてください。
- DVD/LD などの他の入力に切り換えてから、再度USB入力にしてみてください。
- ACアダプターが付属されているUSBメモリーをお使いの場合は、ACアダプターを接続して使用してみてください

上記の操作を行ってもUSB ERRが表示されるときは、USBメモリーが本機に対応していないということになります。

再生できる圧縮ファイルについて

本機では標準的なサンプリング周波数/ビットレートで圧縮されたフォーマットの多くに対応しておりますが、一部対応していないフォーマットもあります。本機で対応している圧縮フォーマットは以下のとおりです。

- **MP3**（MPEG-1/2/2.5 オーディオレイヤー3）：サンプリングレートは8 kHz～48 kHz 、ビットレートは8 kbps～320 kbps（128 kbps以上を推奨）、ファイル拡張子は.mp3に対応しています。

- **WMA**（Windows Media Audio）：サンプリングレートは32 kHz/44.1 kHz 、ビットレートは32 kbps～192 kbps（128 kbps以上を推奨）、ファイル拡張子は.wmaに対応しています（WMA9 Pro やロスレスエンコーディング（loss-less encoding ）には対応しておりません）。

- **AAC**（MPEG-4 Advanced Audio Coding）：サンプリングレートは11.025 kHz ～48 kHz 、ビットレートは16 kbps～320 kbps（128 kbps以上を推奨）、ファイル拡張子は.m4aに対応しています（アップルロスレスエンコーディング（Apple loss - less encoding）には対応しておりません）。

- 著作権保護のかかったファイルは再生することができません。
- 可変ビットレート（VBR）で圧縮されたファイルも再生できますが、経過時間が正しく表示されないことがあります。

MPEG-4 AAC について

AACとは、「Advanced Audio Coding」の略で、MPEG-2 、MPEG-4で使用される音声圧縮技術に関する基本フォーマットです。AACデータは、作成に使用したアプリケーションによってファイル形式と拡張子が異なります。本機では、iTunes® によってエンコードされた、拡張子が「.m4a 」のAACファイルを再生することができます。ただし、著作権保護のかかったファイルやエンコードするiTunesのバージョンによっては再生できないことがあります。
iTunesは、米国および他の国々で登録されたApple Computer,Inc.の商標です。

WMA について

外装箱に印刷された、Windows Media® のロゴは、本機がWMAデータの再生に対応していることを示しています。
WMAとは、「Windows Media Audio」の略で、米国Microsoft Corporationによって開発された音声圧縮技術です。本機ではWindows Media Playerによってエンコードされた、拡張子が「.wma」のWMAファイルを再生することができます。ただし、著作権保護のかかったファイルやエンコードするWindows Media Playerのバージョンによっては再生できないことがあります。
Microsoft 、Windows Media 、Windowsのロゴは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。

HDMI機器を再生する

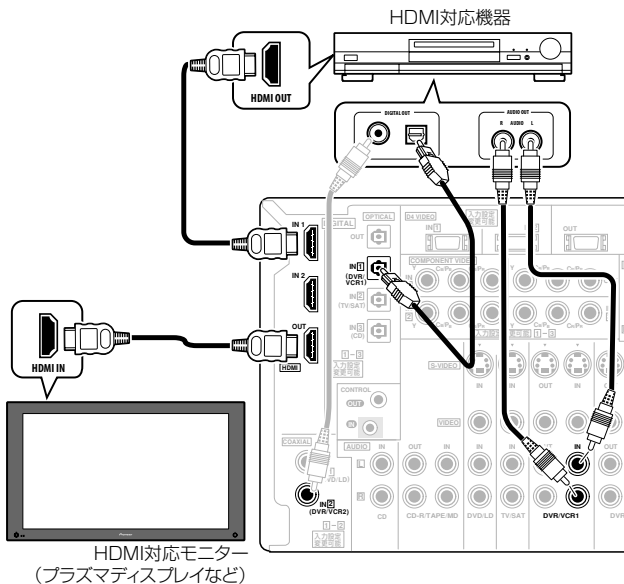
HDMIとはHigh-Definition Multimedia Interfaceの略です。パソコンディスプレイなどで使われているDVI (Digital Video Interface)端子を拡張した、次世代テレビ向けのデジタルインターフェースの規格です。本機ではHDMI対応機器とHDMI対応のプラズマディスプレイなどを接続することで、圧縮されていないデジタル映像と音声(ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC、またはリニアPCM)を1本のケーブルで伝送できます。接続にはHDMIケーブルをお使いください。

HDMI機器を接続したときは「HDMI入力端子を設定する(HDMI Input)」(→71ページ)が必要になります。

音声信号については、本機を通してHDMI OUTと接続したテレビ(プラズマディスプレイなど)から再生されます。本機と接続したスピーカーからHDMI機器の音声を再生するときは、音声接続が必要となります。このとき、HDMI入力の設定が必要になります。詳しくは「HDMI入力端子を設定する(HDMI Input)」(→71ページ)をご覧ください。

HDMI対応機器のHDMI端子の規格がバージョン1.0のものでは、DVDオーディオ信号を伝送することはできません。

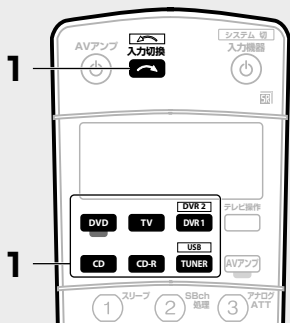
HDMI対応機器を接続する

HDMI INに入力された映像信号にはビデオコンバーター機能が働きませんので、必ずHDMI OUTからHDMI対応のプラズマディスプレイなどに接続してください。

本機はHDMI機器との接続を目的として設計されています。DVI機器に接続した場合、DVI機器によっては正常に動作しない場合があります。

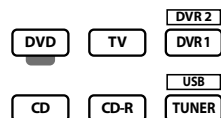
HDMI™
HIGH-DEFINITION MULTIMEDIA INTERFACE

HDMI、HDMIロゴ及びHigh-Definition Multimedia InterfaceはHDMI Licensing LLCの商標文または商標登録です。

HDMI対応機器を再生する

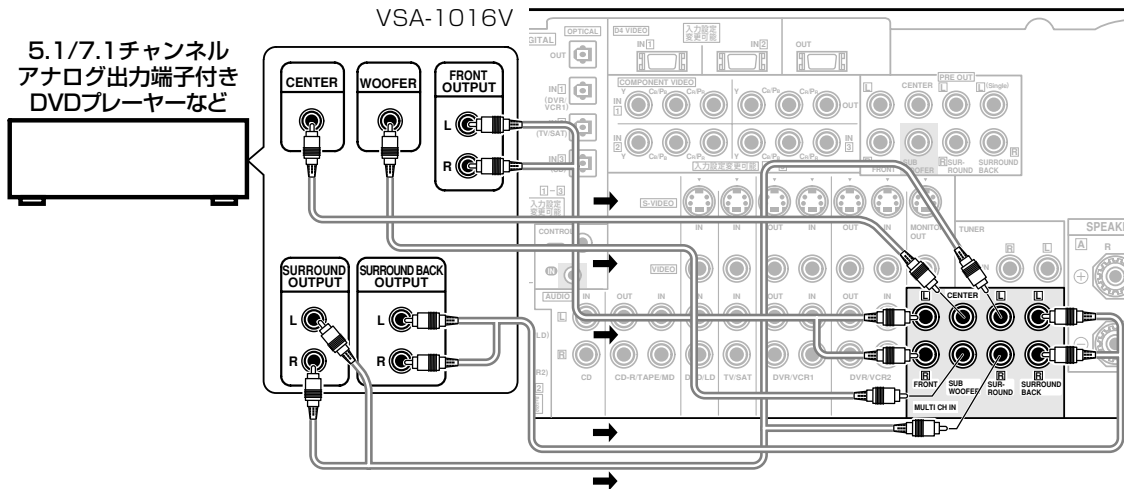
1 入力切換

または

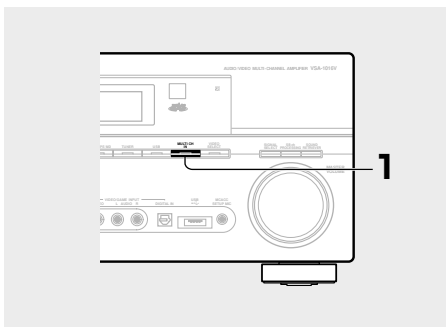
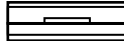
HDMI入力が割り当てられた入力を選ぶ。

本体の入力ファンクション切換ボタンでも選ぶことができます。

テレビ(プラズマディスプレイ)に映像が何も出ないときは対応機器とテレビの設定を合わせてください。それでも映像が出ないときは、他の映像コードで接続してください。

マルチチャンネルアナログ信号を再生する

ソース機器の5.1 ch/7.1 chアナログ出力端子と本機のMULTI CH IN端子を接続して、すべてアナログ処理の高SN比の再生をすることができます。HDMIを使用しないでDVDオーディオやSACDを再生させる場合や、本機の対応フォーマット（→34ページ）以外のマルチチャンネル信号を再生させたいときに効果的です。

マルチチャンネルアナログ接続

- ソース機器によっては、5.1 ch/7.1 chアナログ出力の各種設定があるものもあります。出力のON/OFF設定はONにしてください。また、出力チャンネルの設定がある場合は、本機に接続しているスピーカーの数に合わせてください。詳しくはソース機器の取扱説明書をご覧ください。
- MULTI CH IN端子に入力された信号は本機でダウンミックス処理を行うことができません。

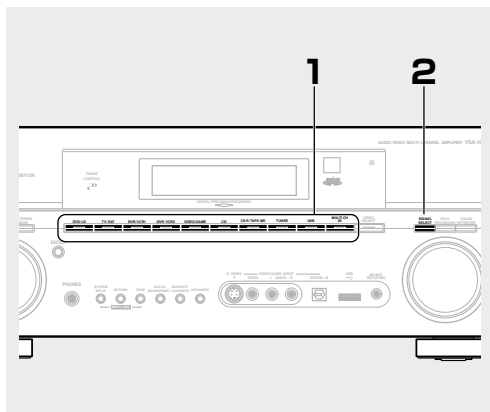
マルチチャンネルアナログ再生する

1 MULTI CH IN

MULTI CH IN入力にする。

ボタンを押すたびにMULTI CH IN入力ともとの入力とが切り換わります。

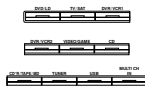
- MULTI CH IN入力でのMCACCの各補正は、チャンネルレベルのみ有効となります。
- MULTI CH IN入力では以下の機能が動作できなくなります。
「リスニングモード」（→36ページ）/「便利な音声再生のための機能」（→43ページ）/「BASIC PHASE CONTROL機能」（→42ページ）/「アナログATT」（→49ページ）

DVDプレーヤーによってはサブウーファーチャンネルのアナログ出力レベルが小さいものがあります。この場合は以下の方法で、サブウーファーの入力レベルを10 dB上げることができます。本機の電源をスタンバイ状態にして、本体のSBch PROCESSINGボタンを押しながら ⏻ STANDBY/ONボタンを5秒以上押します。SW IN +10 dBと表示され、入力レベルが10 dB上がります。工場出荷時はSW IN 0 dBに設定されています。元に戻すときは同じ操作を行ってください。

接続した機器間で録音／録画をする

本機を通して録画／録音を行う場合、双方の機器は同じタイプのコードで接続されている必要があります。
録音/録画端子には、音声のアナログ/デジタル、映像のコンポジット/Sビデオ信号の間の相互変換を行っていないため、接続コードを一致させてください。

1 録音/録画するソースを選ぶ。

2 入力信号を選択する。

SIGNAL SELECT

デジタル録音するときは、DIGITALを選択します。詳しくは「音声入力信号の切り換え」(→35ページ)をご覧ください。

3 録音/録画機器の録音/録画を開始する。

4 録音/録画するソースを再生する。

- 本機の音量、チャンネルレベル、便利な音声再生のための機能、サラウンドの設定などは、録音信号には効果がありません。
- 市販ソフトの録音／録画は、個人で楽しむ場合を除いて、著作権法上認められていません。また、コピーガード信号により録音／録画のできないものもあります。
- デジタル録音について、ソフトによってはコピー回数制限のあるものがあります。詳しくは録音機器の取扱説明書をご覧ください。
- MCACC測定中は、録音／録画を行わないでください。
- MULTI CH IN端子に入力された音声は、フロントL、Rの2 chのみ録音することができます。

アナログ入力信号の歪みを低減する

アナログ音声信号が過度に入力され（フロント表示部のOVERインジケーターが点灯して）音が歪んでしまうとき、入力信号レベルを下げて歪みを低減することができます。

1 AVアンプ　アンプ操作モードにする。

2 ③ アナログATT　アナログATTボタンを押す。

押すたびにインプットアッテネーター機能のONとOFFが切り換わり、ONのときにATTインジケーターが点灯します。

映像信号を切り換えて再生する（ビデオセレクト機能）

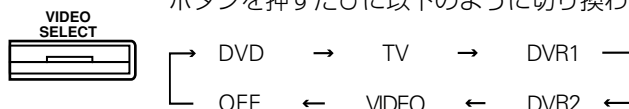
ビデオセレクト機能は、お好みの音楽ソースを聞きながら別の機器のビデオ映像などを同時に見ることができる機能です。

1 音楽ソースを再生する。

「アンプから音を出す」（→34ページ）

2 VIDEO SELECT 映像のみを再生したいビデオ入力を選択する。

ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。

DVD → TV → DVR1 → DVR2 → VIDEO → OFF → DVD

3 手順2で選択したビデオ入力機器を再生する。

「アンプから音を出す」（→34ページ）

- ビデオセレクト機能は、本機の電源を切ったり、入力ファンクションを切り換えると設定が解除されます。
- HDMI入力の映像を選ぶことはできません。

フロントパネル表示部の明るさを調整する

フロントパネル表示部の明るさを4段階に調整することができます。

1 AVアンプ アンプ操作モードにする。

2 5 ディマー 好みの明るさに調整する。

押すたびに表示部の明るさが4段階で切り換わります。

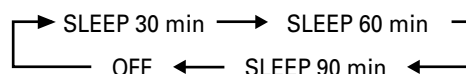
- 明るさを一番暗い設定にしたときは、ボリューム表示とSTANDBYインジケーターを残して、すべてを消灯します。
- 設定した明るさにかかわらず、何かの操作をしたときや、入力信号のフォーマットが変わったときなどは明るく点灯し、数秒後に元の明るさに戻ります。
- エラー表示や禁止メッセージは、この設定にかかわらず明るく表示されます。

スリープタイマーを設定する

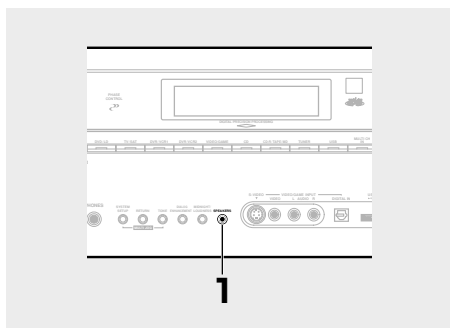
1 AVアンプ アンプ操作モードにする。

2 1 スリープ スリープボタンを押してタイマーを設定する。

押すたびにスリープタイマーの時間が以下のように切り換わります。
スリープタイマーが設定されるとSLEEPインジケーターが点灯します。

SLEEP 30 min → SLEEP 60 min → SLEEP 90 min → OFF → SLEEP 30 min

スリープタイマーを設定したあとにスリープボタンを1 回押すと、残り時間が表示できます。

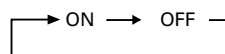
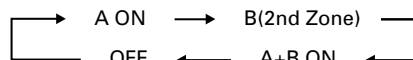
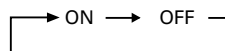
スピーカーシステムを切り換える

スピーカーシステムA/Bを切り換えると、再生されるスピーカーが切り換わります。必要に応じて使用するスピーカーシステムを選択してください。

ヘッドホンをPHONES端子に差し込んでいる間は自動的にOFFに切り換わります。(ただし、Second Zoneに設定されているときは、スピーカー端子🄱からは音が出ます。)

1 SPEAKERS

スピーカーシステムを切り換える。

サラウンドバックシステムの設定(→55ページ)によって選択できるモードが換わります。ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

「Normal (SB)」に設定している場合

「Second Zone」に設定している場合

「Front Bi-Amp」に設定している場合

各スピーカーシステム選択時の出力音声について

「Normal (SB)」に設定している場合

A (SP►A) ： すべてのスピーカーから出力されます。

「Second Zone」に設定している場合

A (SP►A) ： スピーカー端子🄰に接続されたスピーカーから出力されます。(サラウンド再生が可能です。)

B (SP►B) ： スピーカー端子🄱に接続されたスピーカーからのみ出力されます。(2 chステレオ再生のみ可能です。)MULTI CH INでは音が出力されません。

A+B (SP►AB)： 上記A (SP►A)とB (SP►B)の音声が同時に出力されます。

「Front Bi-Amp」に設定している場合

A+B (SP►AB)： すべてのスピーカーから出力されます。スピーカー端子🄱から出力される音声はスピーカー端子🄰のフロント出力と同じ音声です。

上記の全設定共通

OFF (SP►) ： スピーカーから出力されません。
(プリアウト端子からは常に音声が出力されているため、サブウーファーからは音が出る場合があります。)

本機で設定できること

本機のシステムセットアップで設定できる全項目です。

システムセットアップ項目		詳細項目		内容	参照ページ
1	Surr Back System （サラウンドバックシステムの設定）	——		SPEAKER B 端子の用途設定	55
2	Auto MCACC （サラウンドの自動設定）		Speaker Setting	スピーカーシステムの自動設定	12、53
			Speaker Distance	スピーカーまでの距離の自動設定	12、53
			Channel Level	スピーカー出力レベルの自動設定	12、53
			Acoustic Cal EQ	周波数特性の自動補正	12、53
3	Manual MCACC （詳細なサラウンドの設定）	a	Fine Ch Level	各チャンネルの出力レベルの微調整	56
		b	Fine SP Distance	各スピーカーまでの距離の微調整 （最適なディレイ値の詳細設定）	57
		c	EQ Auto Setting	音場補正の補正カーブを自動測定	58
		d	EQ Data Copy	補正カーブの保存	59
		e	EQ Custom1 Adjust	補正カーブの調整	59
		f	EQ Custom2 Adjust	補正カーブの調整	59
		g	EQ Data Check	補正カーブの確認	61
4	Manual SP Setup （聴感によるサラウンドの設定）	a	Speaker Setting	スピーカー接続の有り無し、低域再生能力などの設定	62
		b	Crossover Network	クロスオーバーの周波数の変更	64
		c	Channel Level	各チャンネルの出力レベルを補正	65
		d	Speaker Distance	各スピーカーまでの距離の入力 （最適なディレイ値に設定）	66
		e	THX Audio Setting	サラウンドバックスピーカー間の距離の設定	67
		f	THX Speaker Setup	Auto MCACC時のTHXスピーカーの設定	68
5	Input Assign （入力に関する設定）	a	Digital Input	デジタル入力端子の割り当て入力ファンクションの変更	69
		b	Component/D4 Input	コンポーネントおよびD端子の割り当て入力ファンクションの変更	70
		c	HDMI Input	HDMI入力端子の割り当て 入力ファンクションの変更	71
6	Other Setup （その他の設定）	a	DRC Setup	ダイナミックレンジ圧縮レベルの変更	72
		b	Dual Mono Setup	デュアルモノラル音声の選択	73
		c	LFE ATT Setup	LFE（超低域信号成分）のレベル減衰	74
		d	SR+ Setup	パイオニアプラズマディスプレイとの連動設定	83
		e	Video Conv.Setup	ビデオコンバーターのON/OFF	75

リスニング環境の設定について　～サラウンド再生のための設定～

本機のMCACCとは

以下4つの設定（補正）を音場補正と呼んでいます。サラウンド再生のための設定とは、この音場補正を行うことをいいます。本機のオートMCACCセットアップ機能を使うと、これら4つの設定（音場補正）を自動で行うことができます。

スピーカーシステムの設定 (Speaker Setting)

これはソースに含まれる音声成分のすべてを再生するための基本設定です。この設定が正しく行われないと、サウンドトラックの特定チャンネルに収録された音声が再生されなかったり、低域成分が欠落してしまう、などの不具合が発生する場合があります。スピーカー接続の有り/無しや低域再生能力などを設定し、上記の問題を回避します。

スピーカーまでの距離の設定 (Speaker Distance)

実際には距離を設定することで各チャンネル間の遅延（ディレイ）を算出・補正しています。マルチチャンネル再生では特に重要で、音の定位感や移動感を正確に再現するために必要です。測定用のマイクを使用した実測では、電気的な遅延現象（特にサブウーファーに多く見受けられる）をも測定します。よって、メジャーで測った物理的な距離より大きい値が設定されることもありますが、遅延補正として正しい値になっています。

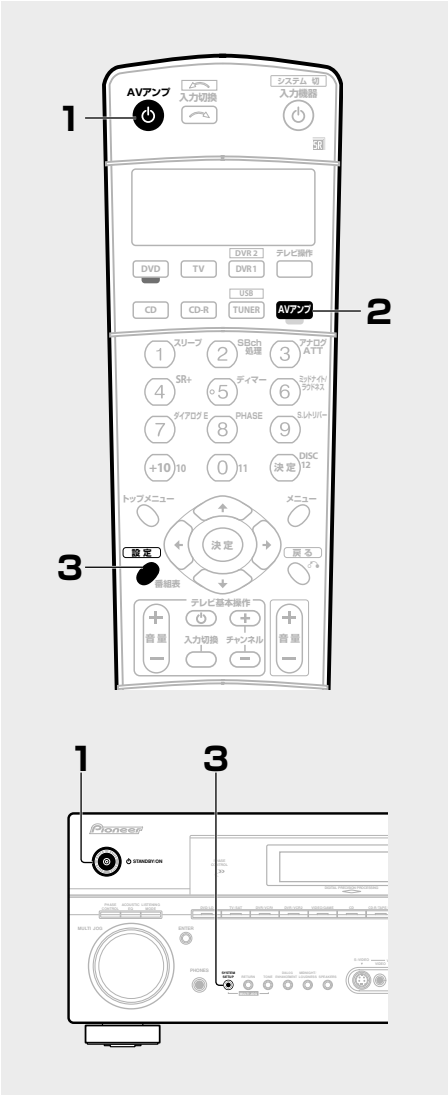
スピーカー出力レベルの設定 (Channel Level)

リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせる設定です。「スピーカーまでの距離の設定」と同様に、音の定位感や移動感を正確に再現することが目的です。この設定が正しく行われないと、いわゆる「バランスの悪い音」になってしまいます。これまでは聴感での設定が一般的でしたが、この方法では正確な設定は不可能です。プロのスタジオ・エンジニアは、ミキシング作業前に必ず専用の音圧測定器で測定を行い、バランスの微調整を施します。本機ではMCACCによって、このプロレベルの精密な調整を誰でも簡単にできるようになりました。

視聴環境の周波数特性の補正 (Acoustic Cal EQ)

「視聴環境の周波数特性の補正」とは、リスニングポイントでの視聴環境トータルの周波数特性（以下、Ｆ特）の補正を意味します。全チャンネルに同じ種類のスピーカーを使用しても、リスニングポイントでは音色が違って聞こえます。これは、設置場所・設置方法・壁面・内装、など様々な影響により実際のＦ特が違ってしまうためです。
本機の「視聴環境の周波数特性の補正」では、リスニングルーム固有のＦ特まで含めた補正をすることで、各チャンネルの音のつながりが飛躍的に向上し、これまでにない実像感やリアルな移動感を再現します。スタジオや映画館などにおいてはこの補正は絶対に欠かせないものです。これがホームシアターとの大きな差でしたが、当社の研究により、一般家庭環境におけるＦ特の補正には最も有効であるエンベロープ補正方式を採用し、この差を埋めることを可能にしました。全チャンネルの周波数特性をフラットにする「ALL CH ADJUST」と、フロントスピーカーの特性に合わせ込む「FRONT ALIGN」の2種類の補正カーブを用意しました。

システムセットアップ設定の手順

電源を入れてメニュー画面を開くまでの手順です。ここから各設定の操作に進めます。

1 AVアンプ

本機の電源を入れ、テレビの電源も入れる。

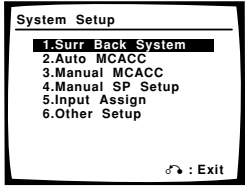
テレビは本機の出力映像が表示されるようにしておきます。

2 AVアンプ

リモコンをアンプ操作モードにする。

3 設定

システムセットアップにする。

テレビ画面にシステムセットアップが表示されます。

システムセットアップの操作には下記のボタンを使います。

リモコンボタン	本体ボタン	用途
設定	SYSTEM SETUP	システムセットアップを開く／閉じる
決定	ENTER MULTI JOG	カーソル移動と設定値の変更 選択項目を決定する
戻る	RETURN	1つ前の画面に戻る

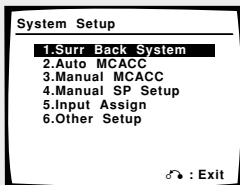
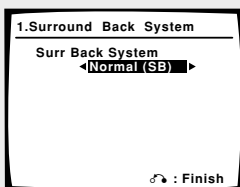
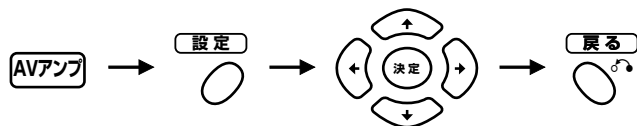
- ヘッドホン使用中は、システムセットアップは表示できません。
- 約3分間放置するとシステムセットアップ画面には自動的にスクリーンセーバー機能が働きます。
- 一度登録した設定内容は本機に記憶されるため、システムを使用するたびに設定し直す必要はありません。ただし、スピーカーシステムの構成や配置を変更したり、新しくスピーカーを追加したときには、設定し直す必要があります。
- システムセットアップ中は電源を切らないでください。電源を切るときはシステムセットアップを終了してください。

スピーカーの使用用途を選択する ～ Surr Back System ～

ここではスピーカー端子Ⓑ(サラウンドバックチャンネル)の使用用途を設定します。以下の項目から選択します。
[Normal(SB)]：一般的なサラウンドバックスピーカー用(6.1 chまたは7.1 chシステム)
[Second Zone]：メインの5.1 chシステムの音を、メインとは別に2 chダウンミックスしたステレオ再生用
[Front Bi-Amp]：フロントスピーカーのバイアンプ駆動用(5.1 chシステム)

1

System Setup
1.Surr Back System
2.Auto MCACC
3.Manual MCACC
4.Manual SP Setup
5.Input Assign
6.Other Setup
: Exit

2

システムセットアップで使用するボタン

1 [1.Surr Back System]を選んで決定する。

[Normal (SB)]と[Second Zone]、[Front Bi-Amp]の選択画面が表示されます。詳しい説明は上記をご覧ください。

2 [Normal (SB)]か[Second Zone]、[Front Bi-Amp]のいずれかを選んで決定する。

3 戻るボタンを押す。

サラウンドバックシステムの設定を終了します。

[Second Zone]、[Front Bi-Amp]を選ぶと、サラウンドバックスピーカーについての各種設定を行うことはできません。

プリアウト出力について

上記設定に連動して、プリアウト端子のサラウンドバックchから出力される音声が以下のようになります。
[Normal(SB)]のとき：サラウンドバックchの音声
[Second Zone]のとき：ダウンミックスされた2 chの音声
[Front Bi-Amp]のとき：フロントchと同じ音声

サラウンドの自動設定 ～ Auto MCACC ～

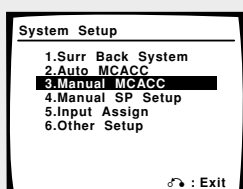
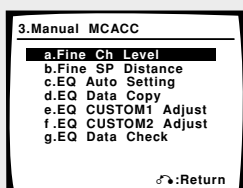
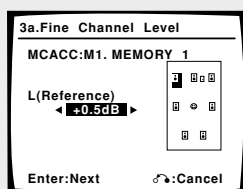
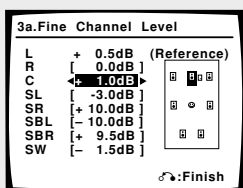
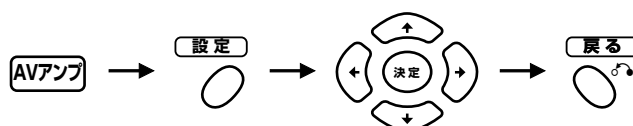
本機のオートセットアップでは従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、付属のセットアップ用マイクを使い自動で高精度に測定、設定することができます。「リスニング環境を測定して最適な設定をする(Auto MCACC)」をご覧ください。(→12ページ)

リスニング環境をお好みに調整する ~ Manual MCACC ~

Manual MCACCでは、設定をより詳細に手動で調整することができます。

スピーカー出力レベルの微調整(Fine Ch Level)

フロント左スピーカーを基準としてその他のチャンネルレベルを調整します。選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルからテストトーンが再生されますので、そのテストトーンどうしが同じ大きさに聞こえるように調整します。
音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75 dB SPLに調整してください。

1

2

3

4

システムセットアップで使用するボタン

1 [3.Manual MCACC]を選んで決定する。

2 [Fine Ch Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの微調整を行う画面になります。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0 dBになり、テストトーンが再生されます。

3 フロント左チャンネルのレベルを調整して決定する。

フロント左チャンネルからテストトーンが出力されます。

4 調整したいスピーカーを選んでチャンネルレベルを調整する。

選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルから交互にテストトーンが出力されます。
-10.0 dBから+10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

5 戻るボタンを押す。

スピーカー出力レベルの微調整を終了します。

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

スピーカーまでの距離の微調整（Fine SP Distance）

選択したチャンネルとそのチャンネルに対して最適と思われるもう1つのチャンネルからテストパルスが再生されます。その2つのスピーカーに対してリスニングポジションから右図のように向き、2つのテストパルスの聞こえるポイントが中央になるように数値を調整します。このときさらに細かくポイントを中央にしたいときは、スピーカーの位置を数cm単位で動かしたり、向きを少し動かすことでポイントを中央にすることができます。なお、サブウーファーのテストパルスは他chと音色が異なります。サブウーファーの音がはっきり聞こえるように調整してください。また、サブウーファーの調整はお持ちのスピーカーの低域再生能力によって、設定値を上下したりスピーカーの位置を変えても聞こえ方の変化がわかりにくい場合があります。

1

```
System Setup
  1.Surr Back System
  2.Auto MCACC
  3.Manual MCACC
  4.Manual SP Setup
  5.Input Assign
  6.Other Setup
                         : Exit
```

2

```
3.Manual MCACC
  a.Fine Ch Level
  b.Fine SP Distance
  c.EQ Auto Setting
  d.EQ Data Copy
  e.EQ CUSTOM1 Adjust
  f .EQ CUSTOM2 Adjust
  g.EQ Data Check
                        :Return
```

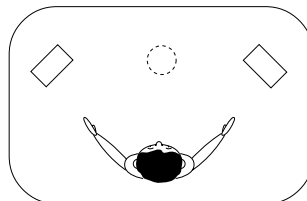
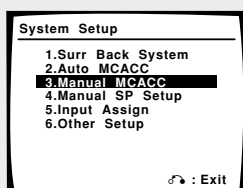
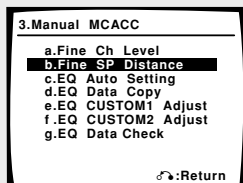
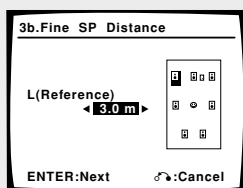
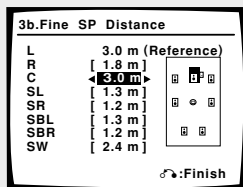
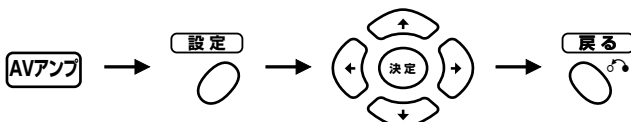
3

```
3b.Fine SP Distance

L(Reference)
      ◀ 3.0 m ▶

ENTER:Next            :Cancel
```

4

```
3b.Fine SP Distance
L        3.0 m (Reference)
R      [ 1.8 m ]
C      ◀ 3.0 m ▶
SL     [ 1.3 m ]
SR     [ 1.2 m ]
SBL    [ 1.3 m ]
SBR    [ 1.2 m ]
SW     [ 2.4 m ]
                        :Finish
```

システムセットアップで使用するボタン

1 [3.Manual MCACC]を選んで決定する。

2 [Fine SP Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の微調整を行う画面になります。

3 フロント左チャンネルのスピーカーまでの実測距離を入力して決定する。

4 調整したいスピーカーを選んでスピーカーまでの距離を調整する。

選択したチャンネルのスピーカーともう1つのスピーカーからテストパルスが以下のように出力されます。

R - L
C - L
SL - L
SR - SL
SBL - SL
SBR - SBL
SW - L

0.1 mから9.0 mの範囲内で、0.1 m間隔で設定できます。

テストパルスは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0 dBになりテストパルスが再生されます。

5 戻るボタンを押す。

スピーカーまでの距離の微調整を終了します。

テストパルスの聞こえるポイントがどうしても中央に定位しないときは、スピーカーと本機の 、 端子が正しく接続されているかを確認してください。 と が逆に接続されていると中央に定位しません。

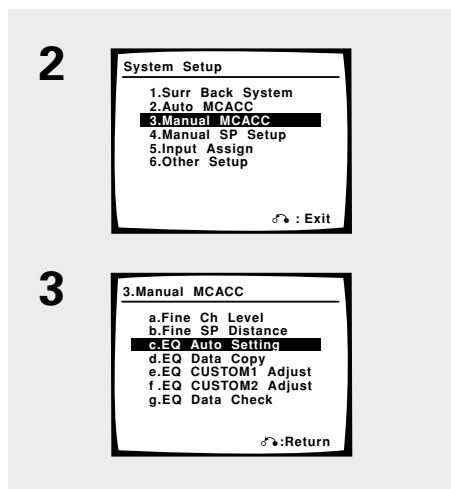
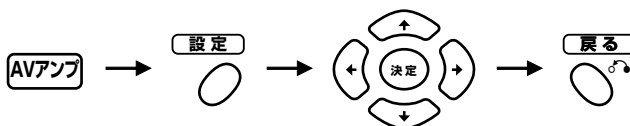
スピーカーまでの距離調整とは

距離の調整は、映像の「ピント合わせ」によく似ています。ピントが合っていない映像はどこで見てもぼやけて見えますが、ピントが合った映像は遠くからでも見ることができます。音の焦点も同じで、ある特定の場所（リスニングポジション）できちんとピント（音でいうと距離）を合わせておけば、多少ズレたポイントでも心地よく聞こえるようになります。

視聴環境の周波数特性の補正（Acoustic Cal EQ）

視聴環境のトータルな周波数特性をマイクを用いたオートセットアップにより 、自動で補正（均一化）します。補正カーブには「ALL CH ADJUST」と「FRONT ALIGN」の2種類がありますが、それらの補正カーブをお好みで調整して「CUSTOM1」、「CUSTOM2」として保存することもできます。

補正カーブを自動測定する

サラウンドの設定を手動で行ったときにこの「EQ Auto Setting」で補正カーブを自動測定します。「リスニング環境を測定して最適な設定をする（Auto MCACC）」（→12ページ）でオートセットアップしたときは、すでにこの自動測定は行われていますので不要です。

システムセットアップで使用するボタン

1 付属のセットアップ用マイクをMCACC SETUP MIC端子につなぐ。

2 [3.Manual MCACC]を選んで決定する。

詳細なサラウンド設定になります。

3 [EQ Auto Setting]を選んで決定する。

補正カーブの自動測定がスタートします。

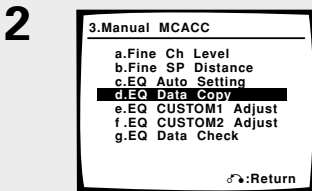
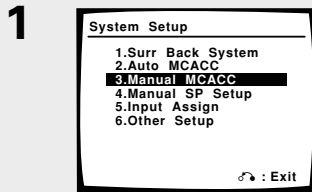
テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0 dBになり､テストトーンが再生されます。

測定が終了すると、自動的に手順3のディスプレイに戻ります。この測定のデータを使って下記の項目に進めます。
[EQ Data Copy]：測定結果を保存する
[EQ Custom1/2 Adjust]：保存データを調整する
[EQ Data Check]：測定結果を確認する

自動測定された補正カーブを手動で調整する

あらかじめ、「Auto MCACC」(→12ページ)または「EQ Auto Setting」(→58ページ)を行い、補正カーブを自動で調整しておいてください。ここではすでに調整されている「ALL CH ADJUST」または「FRONT ALIGN」の補正カーブを「CUSTOM1」または「CUSTOM2」に保存し、その補正カーブを手動で調整する方法を説明します。

1

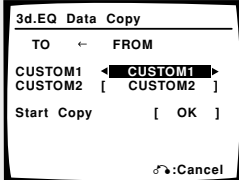
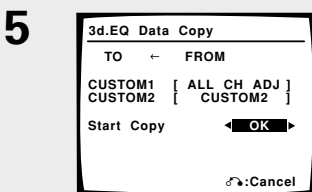
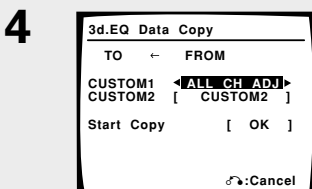
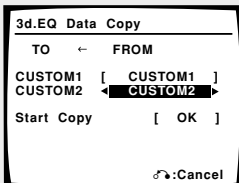
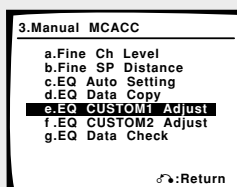
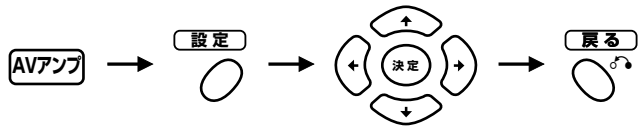
2

3 [CUSTOM1]に保存するとき

[CUSTOM2]に保存するとき

4

3d.EQ Data Copy
TO ← FROM
CUSTOM1 ◀ ALL CH ADJ ▶
CUSTOM2 [CUSTOM2]
Start Copy [OK]
:Cancel

5

3d.EQ Data Copy
TO ← FROM
CUSTOM1 [ALL CH ADJ]
CUSTOM2 [CUSTOM2]
Start Copy ◀ OK ▶
:Cancel

6

システムセットアップで使用するボタン

1 **[3.Manual MCACC]を選んで決定する。**

詳細なサラウンド設定になります。

2 **[EQ Data Copy]を選んで決定する。**

[CUSTOM1]または[CUSTOM2]に保存する補正カーブの種類を選択する画面になります。

3 **[CUSTOM1]または[CUSTOM2]のどちらに保存するかを選ぶ。**

4 **補正カーブの種類を選んで決定する。**

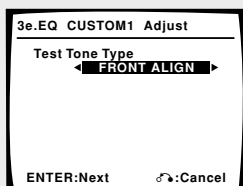
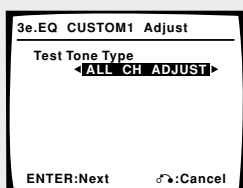
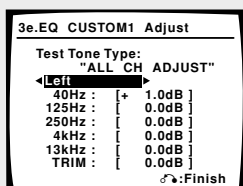
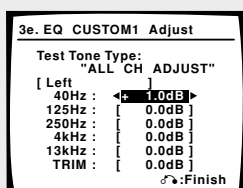
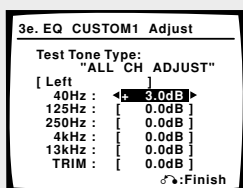
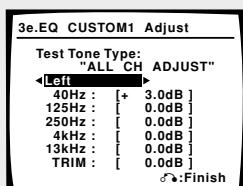
[ALL CH ADJ]と[FRONT ALIGN]、[CUSTOM1]と[CUSTOM2]から選択します。

5 **[OK]を選んで決定する。**

補正カーブが保存されます。
手順6からは保存した補正カーブの調整を行います。
戻るボタンを押すとコピーは行われません。

6 **手順3で選んだ保存先([EQ CUSTOM1 Adjust]または[EQ CUSTOM2 Adjust])を選んで決定する。**

保存した補正カーブの手動調整になります。

7

8

9

10

12

7 テストトーンの種類として[ALL CH ADJUST]または[FRONT ALIGN]を選んで決定する。

テストトーンが出力されます。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0 dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

[ALL CH ADJUST]：サブウーファーを除いたすべてのスピーカーのフラット化補正。
[FRONT ALIGN]：フロントスピーカーの特性に合わせた補正。
それぞれの周波数帯域が同じレベルになるように調整してください。

8 調整したいチャンネルを選ぶ。

手順7で[FRONT ALIGN]を選択したときは、ここで[Left]と[Right]を選択することはできません。

9 調整したい周波数帯域を選ぶ。

10 手順9で選んだ周波数帯域を調整する。

−6.0 dBから+6.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

- 調整中に「OVER!!」がディスプレイに表示されたときは、その帯域または他の帯域のレベルが高すぎるので、「OVER!!」表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げてください。
- 「スピーカーシステムの設定」でSMALL（小）に設定されたチャンネルは40 Hzを選択することはできません。
- 「TRM」では、それぞれの帯域を調整することで、変わってしまったそのチャンネルレベルの全体的なバランスを調整します。

11 手順9〜10を繰り返して、各周波数帯域を調整します。

12 チャンネル選択のディスプレイにする。

手順8へ戻ります。手順8〜12を繰り返して、各チャンネルの周波数帯域を調整します。

13 戻るボタンを押す。

手順7へ戻ります。

14 戻るボタンを押す。

[EQ CUSTOM Adjust]モードを終了します。

補正カーブを確認する

「Auto MCACC」(→12ページ)または「EQ Auto Setting」(→58ページ)で設定された、すべての補正カーブを確認することができます。

1

```
System Setup
  1.Surr Back System
  2.Auto MCACC
  3.Manual MCACC
  4.Manual SP Setup
  5.Input Assign
  6.Other Setup
                    : Exit
```

2

```
3.Manual MCACC
  a.Fine Ch Level
  b.Fine SP Distance
  c.EQ Auto Setting
  d.EQ Data Copy
  e.EQ CUSTOM1 Adjust
  f.EQ CUSTOM2 Adjust
  g.EQ Data Check
                  :Return
```

3

```
3g.EQ Data Check
 ◀ALL CH ADJUST▶
  [ Left        ]

   40Hz : + 1.0dB
  125Hz :   0.0dB
  250Hz :   0.0dB
    4kHz :   0.0dB
  13kHz :   0.0dB
   TRIM :   0.0dB
                  :Return
```

4

```
3g.EQ Data Check
  ALL CH ADJUST
 ◀Left         ▶

   40Hz : + 1.0dB
  125Hz :   0.0dB
  250Hz :   0.0dB
    4kHz :   0.0dB
  13kHz :   0.0dB
   TRIM :   0.0dB
                  :Return
```

システムセットアップで使用するボタン

1 [3.Manual MCACC]を選んで決定する。

詳細なサラウンド設定になります。

2 [EQ Data Check]を選んで決定する。

3 補正カーブの種類を選んで決定する。

[ALL CH ADJUST]、[FRONT ALIGN]、[CUSTOM1]、[CUSTOM2]から選びます。

再生中にEQ CHECKを行うと、補正カーブごとに試聴でき、聴き比べることができます。なお[OFF]はEQ補正をしていない音です。

4 確認したいチャンネルを選ぶ。

そのチャンネルの周波数帯域の設定値がディスプレイに表示されますので、確認します。
手順3で[FRONT ALIGN]を選択したときは、ここで[Left]と[Right]を確認することはできません。

5 手順3〜4を繰り返して補正カーブとチャンネルを確認します。

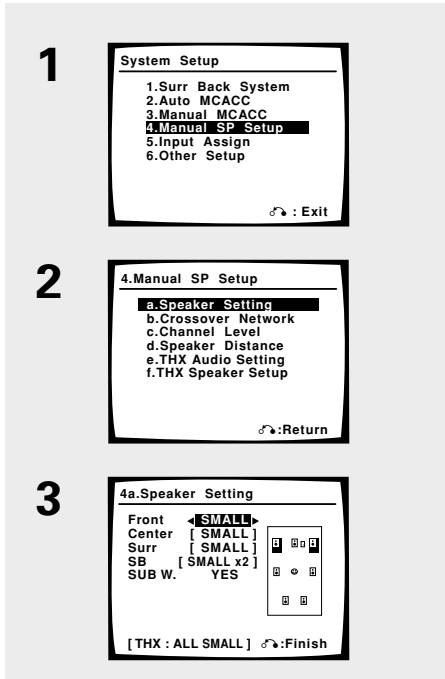
6 戻るボタンを押す。

[EQ Data Check]モードを終了します。

スピーカーやサブウーファーの音を調整する ~Manual SP Setup~

「リスニング環境を測定して最適な設定をする(Auto MCACC)」(→12ページ)でオートセットアップを行った場合はすでに設定されています。必要に応じてお好みで再設定できます。

スピーカー接続と低音再生能力を設定する(Speaker Setting)

各チャンネルに接続されたスピーカーの有無や低域再生能力の大小を設定することで、再生するソースの全音域を最適なチャンネルへ配分します。お持ちのスピーカーシステムや視聴環境などに合わせて正しく設定してください。サブウーファーの再生する音域成分については、63ページをご覧ください。

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Speaker Setting]を選んで決定する。

スピーカーシステムの設定になります。

3 それぞれのスピーカーについて、それらのサイズや再生能力に合わせて設定する。

スピーカーごとに以下を選べます。各項目の意味と設定方法については次ページの説明をご覧ください。

Front (フロント)	[LARGE] [SMALL]
Center (センター)	[LARGE] [SMALL] [NO]
Surr (サラウンド)	[LARGE] [SMALL] [NO]
SB (サラウンドバック)	[LARGE×2] [LARGE×1] [SMALL×2] [SMALL×1] [NO]
SUB W. (サブウーファー)	[YES] [PLUS] [NO]

4 戻るボタンを押す。

[Speaker Setting]を終了します。

THX認証のスピーカーシステムをご使用の際は、すべて[SMALL]に設定してください。

スピーカーシステム設定の目安

スピーカーシステム組み合せ可能一覧

Front （フロント）	[**SMALL**]		[LARGE]		
Center （センター）	[**SMALL**] [NO]		[LARGE] [SMALL] [NO]		
Surr （サラウンド）	[**SMALL**]	[NO]	[LARGE]	[SMALL]	[NO]
SB （サラウンドバック）	[**SMALL ×2**/ ×1] [NO]	[NO]	[LARGE ×2/ ×1] [SMALL ×2/ ×1] [NO]	[SMALL ×2/ ×1] [NO]	[NO]
SUB W. （サブウーファー）	[**YES**]		[YES] [NO] [PLUS]		

太字：工場出荷時の設定

[SMALL]　：低域再生能力が十分ではない小型スピーカー
（低音域は他の[LARGE]スピーカーやサブウーファーから出力）

[LARGE]　：低域再生能力のあるフルレンジ・スピーカー

[×2/×1]　：サラウンドバックスピーカーの接続本数（2本または1本）

[YES]　：サブウーファーを接続している場合

[PLUS]　：フロント/センターの低域成分を、サブウーファーからも同時に出力させる低域の再生量がもっとも多いモード
常に(2 ch再生時でも)サブウーファーから低域が出力されるため、量感のある重低音をお好みの方にお勧めの設定(詳しくは下図参照)

[NO]　：接続していない場合（該当chの成分は他のスピーカーより出力）

サブウーファーの[PLUS]はオートセットアップでは設定されません。お好みに応じて設定を変更してください。

サブウーファーの再生する音域成分

フロント、センタースピーカーの設定によってサブウーファーの再生する音域成分は以下のようになります。

フロント／センタースピーカー	サブウーファー	LFE(超低域効果音)成分	低域成分	中･高域成分
SMALL	YES			
LARGE	YES			
LARGE	NO			
LARGE	PLUS			

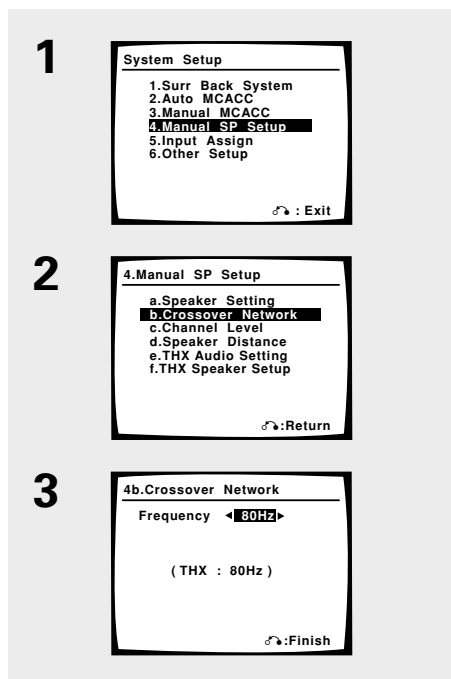
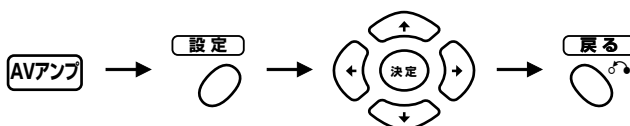
サブウーファーの再生音域

フロント/センターの再生音域

クロスオーバー周波数(工場出荷時：80 Hz)
お手持ちのスピーカーに合わせて設定してください
（→64ページ）

サブウーファー[PLUS]に設定した場合、サブウーファーの低域成分とフロントの低域成分の打ち消し合いが発生し、十分な低音の効果が発揮されないことがあります。このような場合は、Auto MCACCでスピーカーの距離の設定（Speaker Distance）を行い（→12ページ）、BASIC PHASE CONTROLモードを「ON」にしてください（→42ページ）。

クロスオーバー周波数を設定する（Crossover Network）

「スピーカーシステムの設定」で [SMALL]（小）に設定されたスピーカーがあるとき、何Hz以下の低音域を他のスピーカー（サブウーファーを含む）で再生するか、またはLFE信号の何Hz以下の低音域を再生するかを設定します。
サブウーファーの再生する音域成分については、63ページをご覧ください。

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Crossover Network]を選んで決定する。

クロスオーバー周波数の設定になります。

3 他のスピーカーで再生する低音域を何Hz以下にするかを選択して決定する。

[50 Hz][80 Hz][100 Hz][150 Hz][200 Hz]の中から選びます。

4 戻るボタンを押す。

クロスオーバー周波数の設定を終了します。

- 工場出荷時は80 Hzに設定されています。
- それぞれのスピーカーの性能によりますが、小型スピーカーを使用している場合は200 Hzに設定することをお勧めします。
- THXスピーカーをご使用の場合、80 Hzに設定してください。

テストトーンを聞いて出力レベルを調整する(Channel Level)

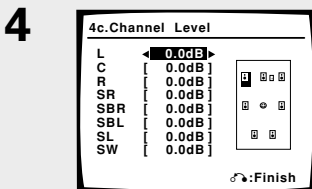
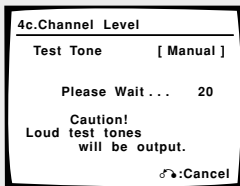
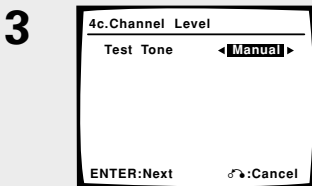
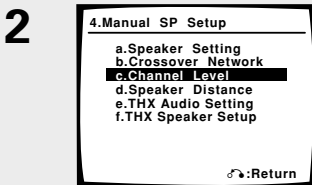
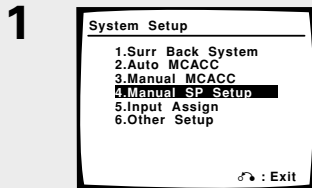
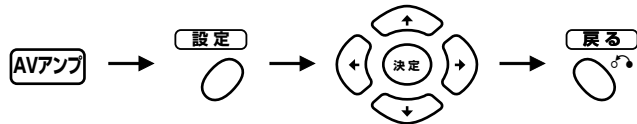
リスニングポジション(視聴位置)での各チャンネルの音量レベルが一定にそろうように調整します。実際に出力されるテストトーンを耳で確かめながら手動で各スピーカーの出力レベルを調整します。音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75 dB SPLに調整してください。

1

2

3

4

で各チャンネルレベルの調整を行うこともできます。エフェクト/CH選択ボタンを押すたびにチャンネルが切り換わります。(この場合OSD表示はされません)

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Channel Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの設定になります。

3 設定方法を選んで決定する。

[Manual]：テストトーンを出力するスピーカーを手動で切り換えて調整します。
[Auto]：テストトーンを出力するスピーカーが自動で切り換わります。

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0 dBになり、テストトーンが再生されます。

4 それぞれのチャンネルレベルを調整する。

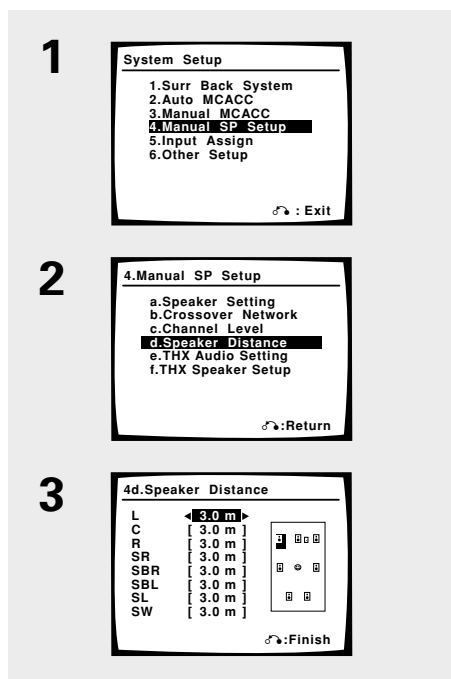
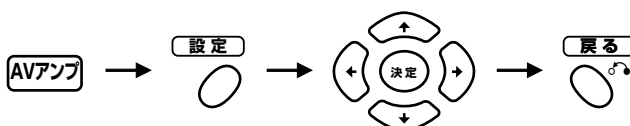
－10.0 dBから＋10.0 dBの範囲内で、0.5 dB間隔で調整することができます。

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため、実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

5 戻るボタンを押す。

[Channel Level]を終了します。

スピーカーまでの距離を調整する（Speaker Distance）

リスニングポジション（視聴位置）からスピーカーまでの距離を設定することにより、各チャンネルの遅延時間が自動的に算出され、リスニングポジションで適切なサラウンド効果を得ることができます。マニュアルで設定する場合は、それぞれのスピーカーから視聴位置までの距離を測り、ここで指定してください。

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [Speaker Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定になります。

3 設定するスピーカーを選んでスピーカーまでの距離を設定する。

0.1 mから9.0 mの範囲内で、0.1 m間隔で設定できます。

> サラウンドバックスピーカーを2本接続した場合は、それらの設置(「SBR」と「SBL」)および設定をリスニングポジションから等距離にしますと、THXモードの効果が最大限に発揮されます。

4 戻るボタンを押す。

[Speaker Distance]を終了します。

> より正確な距離の調整は、「スピーカーまでの距離の微調整(Fine SP Distance)」(→57ページ)をご覧ください。音像や定位感がさらに向上します。

サラウンドバックスピーカー間の距離を設定する（THX Audio Setting）

THX Ultra2規格で新規に開発されたASA（Advanced Speaker Array）技術を用いた、THX Select2 CinemaとTHX MusicMode、THX Games Modeに最適な効果をもたらすための設定です。サラウンドバックスピーカー間の距離（0 m～0.3 m、0.3 m～1.2 m、1.2 m以上の3段階）に応じて処理を変化させます。THXの推奨するスピーカー配置は下図のとおりです。
「Speaker Setting」（→62ページ）でサラウンドバックスピーカーを[NO]または[×1]で設定したときは、この項目は選択できません。また、「Surr Back System」（→55ページ）で「Second Zone」または「Front Bi-AMP」を選択したときもこの項目は選択できません。

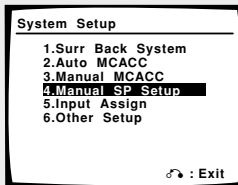
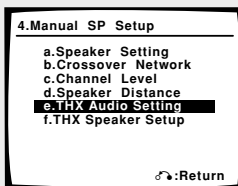
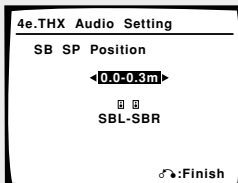
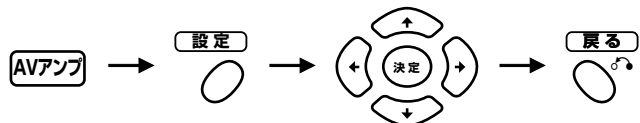
1

```
System Setup
  1.Surr Back System
  2.Auto MCACC
  3.Manual MCACC
  4.Manual SP Setup
  5.Input Assign
  6.Other Setup
                    : Exit
```

2

```
4.Manual SP Setup
  a.Speaker Setting
  b.Crossover Network
  c.Channel Level
  d.Speaker Distance
  e.THX Audio Setting
  f.THX Speaker Setup
                    :Return
```

3

```
4e.THX Audio Setting
  SB SP Position
      ◀0.0-0.3m▶
        SBL-SBR
                    :Finish
```

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [THX Audio Setting]を選んで決定する。

サラウンドバックスピーカー間の距離の設定になります。

3 サラウンドバックスピーカー間の距離を選ぶ。

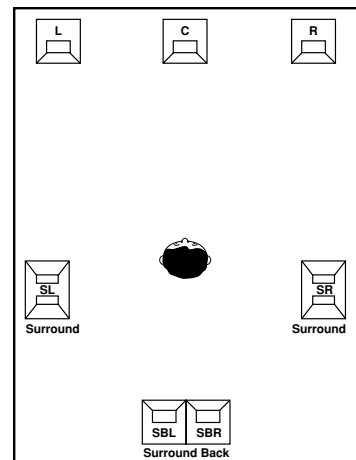
[0.0－0.3 m]、[>0.3－1.2 m]、[1.2 m<]のいずれかを選びます。

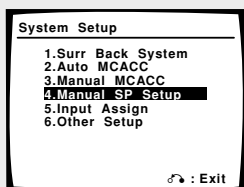
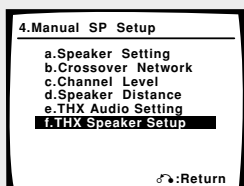
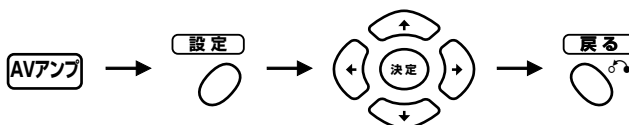
4 戻るボタンを押す。

[THX Audio Setting]を終了します。

THXの推奨するスピーカー配置

サラウンドバックスピーカーは隣接させ、それぞれリスニングポジションから等距離となるように設置します。

ダイポール型スピーカー

Auto MCACC時のTHXスピーカー設定(THX Speaker Setup)

THX認証のスピーカーシステムを使用しているときは[YES]を選択します。[YES]に設定すると、Auto MCACCを行った際、[Speaker Setting]ですべてのスピーカーがSMALL(小)に設定されます。

システムセットアップで使用するボタン

1 [4.Manual SP Setup]を選んで決定する。

2 [THX Speaker Setup]を選んで決定する。

3 THXスピーカーシステムかどうかを選ぶ。
[NO]または[YES]のどちらかを選びます。

4 戻るボタンを押す。
[THX Speaker Setup]を終了します。

リアパネル端子に入力した音声/映像信号を設定する ~Input Assign~

デジタル入力端子を設定する（Digital Input）

デジタル入力端子（Optical 1～3およびCoaxial 1～2）に接続したデジタル機器が、工場出荷時の設定と異なるときに設定します。たとえば、 光デジタル端子（Optical 1～3）を使ってDVDプレーヤーをつなぎたい場合（初期設定ではDVDプレーヤーはCoaxial 1のため）、設定を変更します。

- 「TUNER」、「USB」はデジタル入力の設定をすることができません。

1

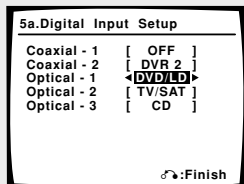
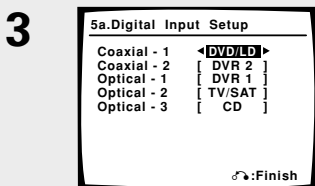
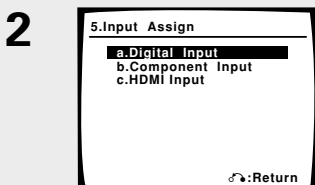
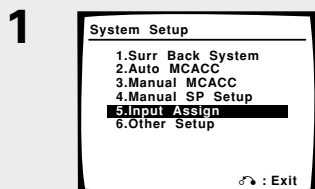
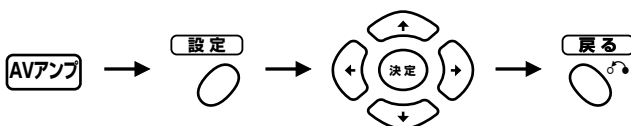
2

3

⬇

5a.Digital Input Setup

Coaxial - 1 [OFF]
Coaxial - 2 [DVR 2]
Optical - 1 ◀DVD/LD▶
Optical - 2 [TV/SAT]
Optical - 3 [CD]

:Finish

システムセットアップで使用するボタン

1 **[5.Input Assign]を選んで決定する。**

入力に関する設定画面になります。

2 **[Digital Input]を選んで決定する。**

デジタル入力の設定になります。

3 **変更したい入力を選んで適切な機器に変更する。**

たとえば、Optical1にDVDプレーヤーをつないだ場合は、[Optical-1]を[DVD/LD]に変更します。

4 **戻るボタンを押す。**

[Digital Input]を終了します。

システムセットアップを終了するときは、設定 を押します。

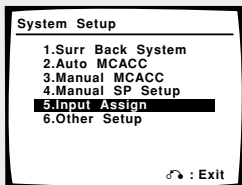
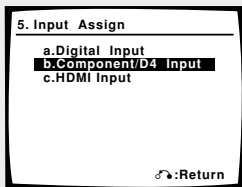
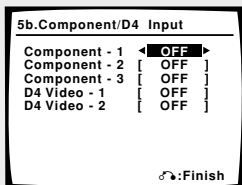
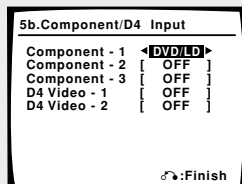
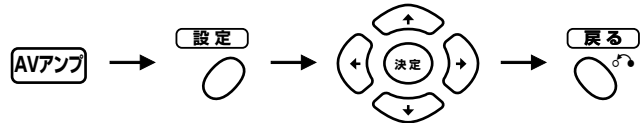
- 工場出荷時の各入力端子の設定は以下のとおりです。
  Optical 1:DVR/VCR1　Coxial 1:DVD/LD
  Optical 2:TV/SAT　Coxial 2:DVR/VCR2
  Optical 3:CD
- 同軸デジタル入力（Coxial 1、2）と光デジタル入力（Optical 1～3）で同じ入力を選択することはできません。同じ入力を選択した場合は、元に設定されていた入力がOFFに切り換わります。

コンポーネント/D4ビデオ入力端子を設定する（Component/D4 Input）

コンポーネントビデオ入力端子（Component 1～3）またはD4ビデオ入力端子（D4 Video 1または 2）に映像機器を接続したときにこの設定を行います。

- 選択できる入力は[DVD/LD]、[TV/SAT]、[DVR/VCR1]および[DVR/VCR2]です。

システムセットアップで使用するボタン

AVアンプ → 設定 → 決定 → 戻る

1 [5.Input Assign]を選んで決定する。

入力に関する設定画面になります。

2 [Component/D4 Input]を選んで決定する。

コンポーネント/D4ビデオ入力の設定になります。

3 変更したい入力を選んで設定変更する。

たとえば、Component 1 にDVDプレーヤーを接続したときは、[Component-1]で[DVD/LD]を選びます。（この場合、音声についてもDVD/LD音声入力を使用してください。）

4 戻るボタンを押す

[Component/D4 Input]を終了します。
システムセットアップを終了するときは、設定を押します。

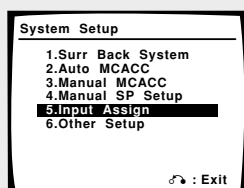
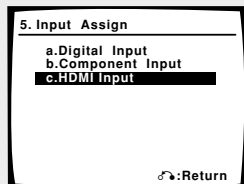
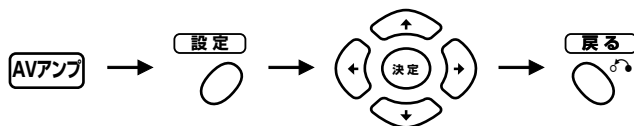
- Comonent 1～3とD4 Video 1～2で、同じ入力を選択することはできません。同じ入力を選んだときは、先に設定されていた入力がOFFに切り換わります。
- コンポーネントビデオ端子、Dビデオ端子の使用については、「映像機器の接続について」（→26ページ）をご覧ください。
- コンポーネントビデオまたはD4ビデオ入力を設定したときは、ビデオコンバート機能が働かなくなります。本機と他機器をコンポーネントビデオまたはD4ビデオで接続するときはテレビともコンポーネントビデオまたはD4ビデオで接続してください。

HDMI入力端子を設定する（HDMI Input）

HDMI入力端子1～2に接続した機器の映像をどの入力ファンクションで再生するかを設定します。
HDMI機器の音声を本機で再生するときは、HDMI接続とは別に、音声端子の接続が必要になります。詳しくは「HDMI対応機器を接続する」（→47ページ）をご覧ください。

- 選択できる入力は[DVD/LD]、[TV/SAT]、[DVD/VCR1]および[DVD/VCR2]です。

1

2

システムセットアップで使用するボタン

1 [5.Input Assign]を選んで決定する。

入力に関する設定画面になります。

2 [HDMI Input]を選んで決定する。

HDMI入力の設定になります。

3 変更したい入力を選んで設定変更する。

たとえば、HDMI IN 1にHDMI対応DVDプレーヤーを接続したときは、[HDMI-1]を[DVD/LD]にします。（この場合、HDMI対応DVDプレーヤーの音声もDVD/LD音声入力を使用してください。）

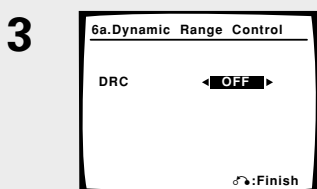
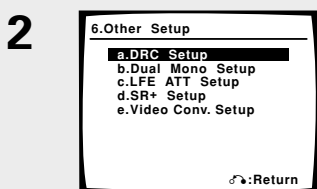
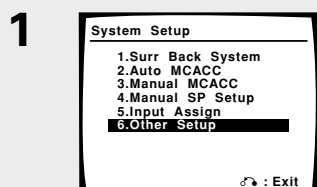
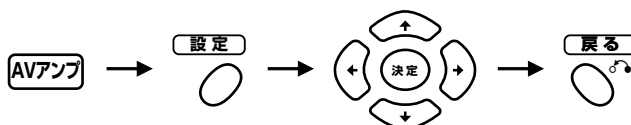
4 戻るボタンを押す。

[HDMI Input]を終了します。

システムセットアップを終了するときは、設定を押します。

その他の設定をする　～Other Setup～

ダイナミックレンジコントロールを設定する（DRC Setup）

ダイナミックレンジとは再生能力を表す用語で、どのくらい小さい音から大きい音までを正しく（小さな音はノイズに埋もれずに、大きな音は歪まずに）再生できるかを数値（dB）で表したものです。ダイナミックレンジコントロールとは、このダイナミックレンジを圧縮する機能です。音量を下げて映画などを楽しむ場合でも、微小な音が聞き取りやすくなります。この効果が得られるのは、ダイナミックレンジコントロール対応のドルビーデジタルまたはDTSソフトだけです。

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選んで決定する。

2 [DRC Setup]を選んで決定する。

ダイナミックレンジコントロールの設定になります。

3 [OFF]、[MID]、[MAX]から選択する。

[OFF]: ダイナミックレンジを圧縮しません。
[MID]：ダイナミックレンジを多少圧縮します。
[MAX]：ダイナミックレンジを最大に圧縮します。

4 戻るボタンを押す。

[DRC Setup]を終了します。

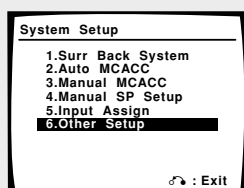
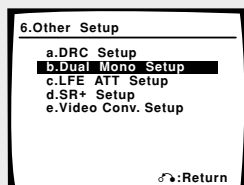
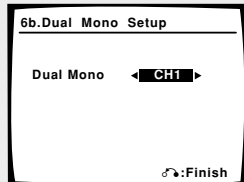
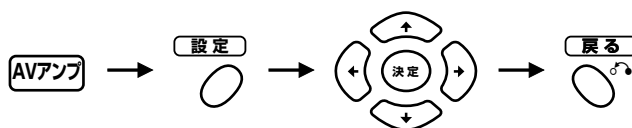
システムセットアップを終了するときは、設定 を押します。

- 工場出荷時は[OFF]に設定されています。
- 大きい音量で楽しむときは、DRCをOFFにすることをお勧めします。

デュアルモノラル音声を設定する（Dual Mono Setup）

モノラルの音声チャンネルを2つ持つデジタル信号のことを1+1デュアルモノラル信号といいます。ここではデュアルモノラル信号が入力されたときにどちらの音声を再生させるかを設定します。以下のような1+1デュアルモノラルフォーマットのソースにのみ有効です。

- BSデジタル放送(MPEG-2 AAC)のモノラルの二カ国語放送や音声多重放送など
- 二カ国語放送などをDVDレコーダーのドルビーデジタル・デュアルモノラルモードで録画したもの
  ステレオの二カ国語放送などはデュアルモノラルとは異なるフォーマットになります。
  録画モードの名称は機器によって異なります。詳しくはDVDレコーダーの取扱説明書をご覧ください。

1

2

3

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選んで決定する。

2 [Dual Mono Setup]を選んで決定する。

デュアルモノラル音声の設定になります。

3 [CH1]、[CH2]、[CH1 CH2]から選択する。

[CH1]：チャンネル1の音声のみを再生する場合。
[CH2]：チャンネル2の音声のみを再生する場合。
[CH1 CH2]：チャンネル1、2の音声を左右のフロントスピーカーから振り分けて再生する場合。

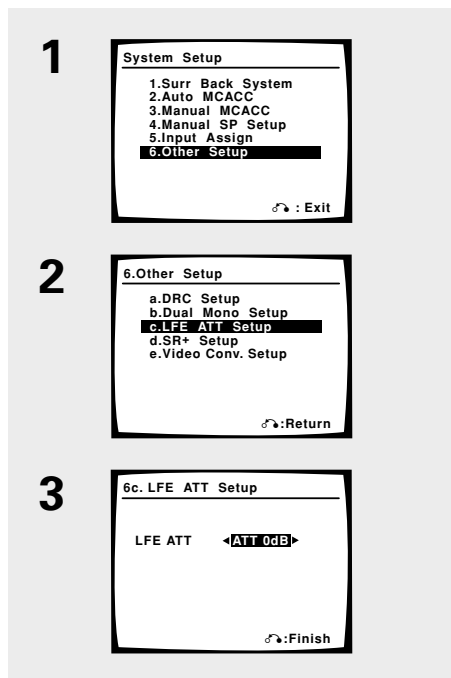
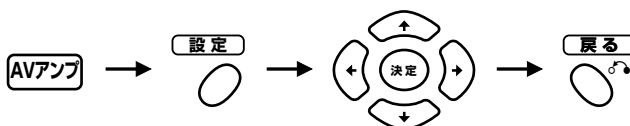
4 戻るボタンを押す。

[Dual Mono Setup]を終了します。

システムセットアップを終了するときは、設定 を押します。

工場出荷時は「CH1」に設定されています。

LFE アッテネーターを設定する (LFE ATT Setup)

ドルビーデジタル信号やDTS信号に含まれるLFE成分(超低域信号成分)の信号レベルが大きすぎて、スピーカーから出る音に歪みが生じてしまう場合に、その信号レベルをアッテネート(減衰)する量を設定することができます。

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選んで決定する。

2 [LFE ATT Setup]を選んで決定する。

LFEアッテネーターの設定になります。

3 [0]、[10]、[OFF]から選択する。

[0]:収録されているレベルのまま再生します。
[10]:レベルを10 dBアッテネート(減衰)します。
[OFF]:LFE成分の音が出なくなります。

4 戻るボタンを押す。

[LFE ATT Setup]を終了します。

システムセットアップを終了するときは、設定を押します。

- すべてのアッテネート(減衰)量で試し、最適な状態に設定することをお勧めします。
- 工場出荷時は[0]に設定されています。

ビデオコンバーターを設定する（Video Conv. Setup）

ビデオコンバーターを[ON]にすると、すべてのアナログ映像信号をすべてのMONITOR OUT端子から出力することができます。詳しくは「映像機器の接続について（パイオニアビデオコンバーター）」（→26ページ）をご覧ください。

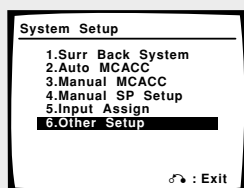
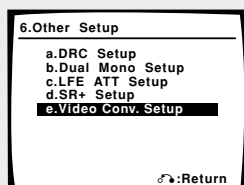
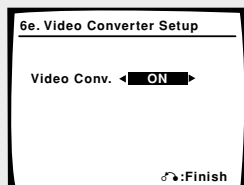
1

System Setup
1.Surr Back System
2.Auto MCACC
3.Manual MCACC
4.Manual SP Setup
5.Input Assign
6.Other Setup
: Exit

2

6.Other Setup
a.DRC Setup
b.Dual Mono Setup
c.LFE ATT Setup
d.SR+ Setup
e.Video Conv. Setup
:Return

3

6e. Video Converter Setup
Video Conv. ◀ ON ▶
:Finish

システムセットアップで使用するボタン

1 [6.Other Setup]を選んで決定する。

2 [Video Conv. Setup]を選んで決定する。

ビデオコンバーターの設定になります。

3 [ON]または[OFF]を選ぶ。

[ON]：ビデオコンバーター機能が働きます。
[OFF]：ビデオコンバーター機能は働かずに、入力された映像信号と同じ出力信号のみがMONITOR OUTから出力されます。

4 戻るボタンを押す。

[Video Conv. Setup]を終了します。

システムセットアップを終了するときは、設定を押します。

「コンポーネント/D4ビデオ入力端子を設定する」（→70ページ）で設定を行った場合、設定された入力は「ON」に設定されていてもビデオコンバート機能が働かなくなります。

他機器を操作するためのリモコン設定をする

付属のリモコンを使って、本機以外のパイオニア製品や他社の機器(ビデオデッキ、テレビ、DVD、CDプレーヤーなど)を操作することができます。お手持ちの機器のプリセットコードがリモコンに登録されている場合は、該当するコードを呼び出すだけで操作できるようになります。また、プリセットコード非対応の機器でも、その機器に付属のリモコンから直接登録(学習)することが可能です。

他機器のリモコン信号を本機のリモコンに呼び出す(プリセットコード設定)

本機付属のリモコンには、複数のAV機器(他社製品を含む)のリモコンコードが登録されています。登録する機器のブランド名から検索することが可能です。
各ボタンの役割は「リモコンで他機器を操作する」(→77ページ)をご覧ください。

1 AVアンプ ＋ 設定

AVアンプボタンを押しながら設定ボタンを押す。

リモコンに「SETUP」が表示されます。
設定を中止するにはAVアンプボタンを2秒間押し続けます。

2

「PRESET」を選んで決定する。

「EXIT」を選んで決定すると設定を終了します。

3 DVD / TV / DVR 2 DVR1 / テレビ操作 / CD / CD-R / USB TUNER / 決定 / シフト

操作したい機器のマルチコントロールボタンを選んで決定する。

DVR2のように黒い四角枠で表示された機器はシフトボタンを押しながら選びます(例:DVR2を選ぶときはシフトとDVR1を押す)。

4

登録する機器のブランド名の頭文字を選んで決定する。

たとえば、パイオニアを登録するときは、「P」を選びます。

5

登録する機器のブランド名を選んで決定する。

6

登録する機器とコード番号を選んで決定する。

たとえば、DVDプレーヤーの場合は「DVD」、コード番号が複数あるときはそれぞれのコード番号で試してみてください。入力機器　ボタンを押して、その機器の電源を入／切できれば正しいものが選ばれたことになります。
「OK」が表示されて、登録が終了します。

7 AVアンプ

AVアンプボタンを2秒間押し続けて、プリセットコード設定を終了する。

- プリセットのコード番号は、数字が大きいほど新しい機器に対応しています。
- 正しく設定できているようでも、一部のボタンのみ違うコード番号も複数あります。実際に操作できるかを確認してください。
- すべてのモデルには対応していませんので、使用できない機能は学習させてください(→78ページ)。もとの機器に入っていない機能は動作しません。

パイオニア製の他機器コードに関する諸注意

- HDD内蔵DVDレコーダーの4コードはPIONEER DVR 487、488、489、493に対応しています。
- 05年夏以前に発売されたプラズマディスプレイをお持ちの方は、667、638(地上波対応)や639(BSデジタル対応)など、必要に応じてお試しください。一部海外向けのコードも内蔵されているため、TVの10 ch/11 ch/12 chが誤作動するものもあります。
- TVのコード番号670はHDD内蔵プラズマディスプレイの録画再生機能に対応しています。誤動作防止のため、通常TV系コードを使用する場合は、コード番号669以下のコード番号を選んでください。

現在設定されているコード番号の確認

登録後に、そのプリセットコードを確認できます。手順3で「READ ID」を選んで決定すると、登録されているブランド名とコード番号が約3秒間表示されます。

リモコンで他機器を操作する

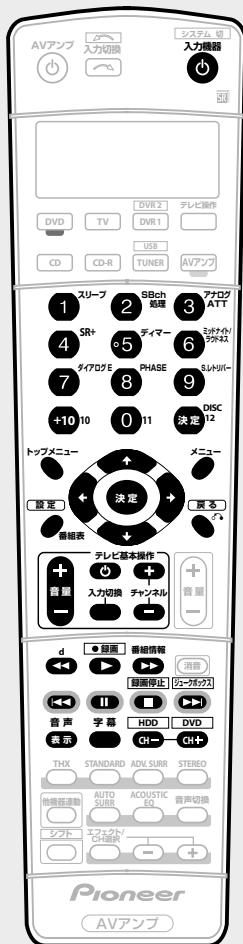
- 以下のリモコン操作を行うには、あらかじめ操作したい機器のリモコンコードを登録しておく必要があります。詳しくは「他機器のリモコン信号を本機のリモコンに呼び出す（プリセットコード設定）」（→76ページ）をご覧ください。
- 実際に操作を始める前に操作したい機器の他機器操作ボタンを押して、リモコンをその機器の操作モードにしてください。各機器の詳しい機能については、それぞれの取扱説明書をお読みください。
- 機種によっては操作できないボタンもあります。

機能 ボタン	DVDプレーヤー LDプレーヤー	DVDレコーダー	ビデオデッキ	CDプレーヤー CDVプレーヤー MDレコーダー カセットデッキ	テレビ CATV BS/CSデジタルチューナー 地上デジタルチューナー
入力機器	電源の入／切（スタンバイ）				
	前チャプター （トラック）頭出し				青、ページ戻る
	次チャプター （トラック）頭出し				黄、ページ進む
	一時停止				赤、テレビ/ラジオ
	再生				テレビ切換
	早送り				番組情報
	早戻し				d（データ連動）
	停止				緑、信号切換
録画 (シフト+)		録画／録音の開始			
録画停止 (シフト+)		録画／録音の停止			
ジュークボックス （シフト + ）		ジュークボックス機能の 操作			
数字ボタン	メニュー画面の操作		チャプター（トラック）の選択		チャンネルの選択
＋10ボタン	チャプター（トラック）の選択（10以上の数値入力用）				チャンネルの選択 （2桁以上の 数値入力用）
決定/ DISC	[DVDプレーヤー] CLEARボタン として使用 [LDプレーヤー] A/B面の切り換え	セットアップ画面 (DISC NAVI)の 表示	決定ボタンと して使用	[CDチェンジャー] ディスクの選択	チャンネル入力に使用
トップメニュー	トップメニューの表示				BSメニュー画像切換
メニュー	ディスクのメニュー画面の表示				メニュー画面の選択
⬇⬆⬅➡ + 決定	各メニュー画面の操作				
番組表	セットアップ画面の表示				番組表の表示
CH +/−	チャンネルの選択				チャンネルの選択
音声	音声（言語）の選択				音声切換、衛星切換
字幕	字幕（言語）の選択				チャンネル戻し
HDD (シフト + CH−)		[HDD内蔵 DVDプレーヤー] HDD操作の選択			
DVD (シフト + CH+)		[HDD内蔵 DVDプレーヤー] DVD操作の選択			
戻る					戻るまたは EXITの選択
シフト + トップメニュー					地上アナログ
シフト + メニュー					地上デジタル
シフト + 番組表					BSデジタル
シフト + 戻る					CSデジタル

* DVDプレーヤーによっては10以上を選ぶとき＋10方式ではなく、ENTER方式で番号を決める機種がありますが、その機種も本機リモコンでは＋10ボタンで操作することができます。

好きなボタンに他機器の操作を記憶させる（学習モード）

他機器のリモコンの操作を本機のリモコンに直接学習させることができます。プリセットコードを登録しただけでは使用できない操作などは、以下の手順で追加登録（学習）してください。

手順4　学習可能なボタン

上記イラストの反転表示されているボタンに登録（学習）が可能です。
ただし、「テレビ基本操作」ボタンは、マルチコントロールの「テレビ操作」を選んだ場合のみ登録(学習)できます。
また、「テレビ基本操作」ボタン以外は、シフトボタンを併用することで1つのボタンに2種類のコードを学習させることができます。たとえば、字幕ボタンに字幕操作と併用してGコードのボタン操作を登録したいときは、手順4でシフトを押しながら字幕ボタンを押します。学習終了後、字幕ボタンだけを押したときは「字幕」操作を、シフトを押しながら字幕ボタンを押したときは「Gコード」操作を行います。

1　AVアンプ ＋ 設定

AVアンプボタンを押しながら設定ボタンを押す。

「SETUP」が表示されます。設定を中止するにはAVアンプボタンを2秒間押し続けます。

2

「LEARNING」を選んで決定する。

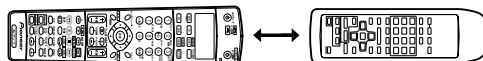
「EXIT」を選んで決定すると設定を終了します。

3

操作したい機器のマルチコントロールボタンを選んで決定する。

「PRES KEY」が表示されます。DVR2のように黒い四角枠で表示された機器はシフトボタンを押しながら選びます（例：DVR2を選ぶときはシフトとDVR1を押す）。

4　**本機器と他機器のリモコンを向かい合わせて、記憶させたい本機のボタンを押す。**

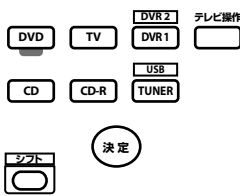
2 cm~5 cm

「PRES KEY」が点滅します。
学習できるボタンについては左図をご覧ください。

5　**記憶させたい他機器のリモコンのボタンを、数秒押して離す。**

「OK」が表示されて、登録（学習）が終了します。
「ERROR」が表示された場合は、手順4からやり直してみてください。

6　**同じ他機器リモコンについて登録（学習）を続けるには、手順4～5を繰り返す。**

別の他機器リモコンを登録するには、手順7へ進み、いったん終了してからもう一度行ってください。

7　AVアンプ　**AVアンプボタンを2秒間押し続けて、学習モードを終了する。**

- 登録（学習）できる操作の数はパイオニアフォーマットで、およそ200コードです。
- 手順4～5は、強い蛍光灯の下やTVの前で行わないでください。異なるコードが登録されてしまうことがあります。

リモコンの登録操作の解除と設定全解除

特定のボタンに登録された操作のみを解除する

1 **AVアンプボタンを押しながら設定ボタンを押す。**
「SETUP」が表示されます。
設定を中止するにはAVアンプボタンを2秒間押し続けます。

2 **「ERASE」を選んで決定する。**

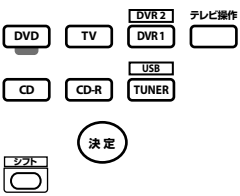
3 **解除したい機器のマルチコントロールを選んで決定する。**
「PRES KEY」が点滅します。

4 **消去したい操作ボタンを2秒間押し続ける。**
「OK」が表示されて、消去が終了します。

5 **AVアンプボタンを2秒間押し続けて、登録解除を終了する。**

リモコンに設定されたプリセットコードと学習させた他機器の操作を解除する

1 **AVアンプボタンを押しながら設定ボタンを押す。**
「SETUP」が表示されます。
設定を中止するにはAVアンプボタンを2秒間押し続けます。

2 **「RESET」を選んで決定する。**
「RESET」が点滅します。

3 **決定ボタンを2秒間以上押し続ける。**
「OK」が表示されて、設定が解除されます。

マルチコントロールボタンの入力切換を解除する(ダイレクトファンクション)

ダイレクトファンクションはマルチコントロールボタンを押したときに、本機の入力ファンクションを連動して切り換えるかを設定する機能です。オフにすると入力ファンクションは切り換わらず、リモコンの操作ボタンの機能だけが切り換わります。工場出荷時はすべてオンになっています。

1 **AVアンプボタンを押しながら設定ボタンを押す。**
「SETUP」が表示されます。
設定を中止するにはAVアンプボタンを2秒間押し続けます。

2 **「DIRECT F」を選んで決定する。**

3 **操作したい機器のマルチコントロールボタンを選んで決定する。**

4 **手順3で選んだ機器について、ダイレクトファンクションのON、OFFを選んで決定する。**
「OK」が表示されます。

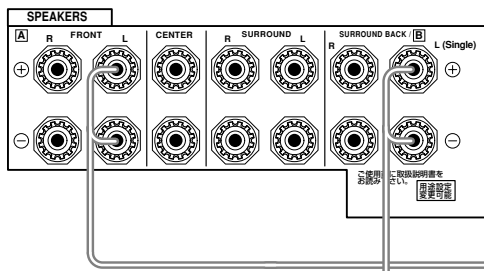
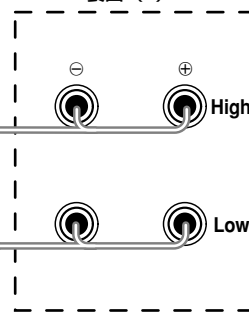
5 **AVアンプボタンを2秒間押し続けて、ダイレクトファンクションの設定を終了する。**

スピーカーの応用接続

リアパネルのSURROUND BACK端子は、サラウンドバックスピーカーを接続するだけでなく、フロントスピーカーの高音質化や、別エリアでのステレオ再生に使用できます。（ただし、メインシステムは最大5.1 chまでとなります。）

フロントスピーカーを高品位接続する　～バイアンプ接続～

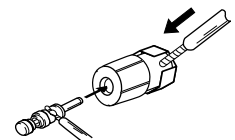
フロントch用スピーカーがバイワイヤリング対応であれば、さらに高品位なBi-Amp再生が可能です。

・接続

スピーカー端子Ⓐのフロントchとスピーカー端子Ⓑの出力は同じです。High/LowはⒶ/Ⓑのどちらとでも接続できます。

・サラウンドバックシステムの設定（→55ページ）
「Front Bi-Amp」を選択してください。
サラウンドバックchは自動的に「NO(無し)」に固定されます。

・スピーカーシステムの切り換え（→51ページ）
A+B（SP►AB）が通常再生状態となります。

フロントスピーカーのBi-Amp接続をするときはアンプへの悪影響を防ぐため、スピーカーに付属されているHigh-Lowのショート金具は必ず外してください。
詳しくはスピーカーの取扱説明書もご覧ください。

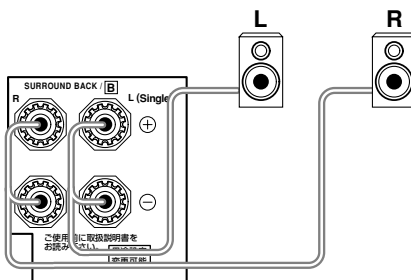
Bi-wire（バイワイヤ接続の場合）
「Normal (SB)」または「Second Zone」でシステムを組む場合は、Bi-AmpではなくBi-wire接続が可能です。スピーカー端子Ⓐに、バイワイヤリング対応スピーカーのHighとLowの2本を並列に接続してください。

1本はバナナプラグを用いると便利です

この方法で異なる2つのスピーカーを接続しないでください。

ネットワークが着脱できるスピーカーの場合、ネットワークが外れた状態では効果が得られませんのでご注意ください。

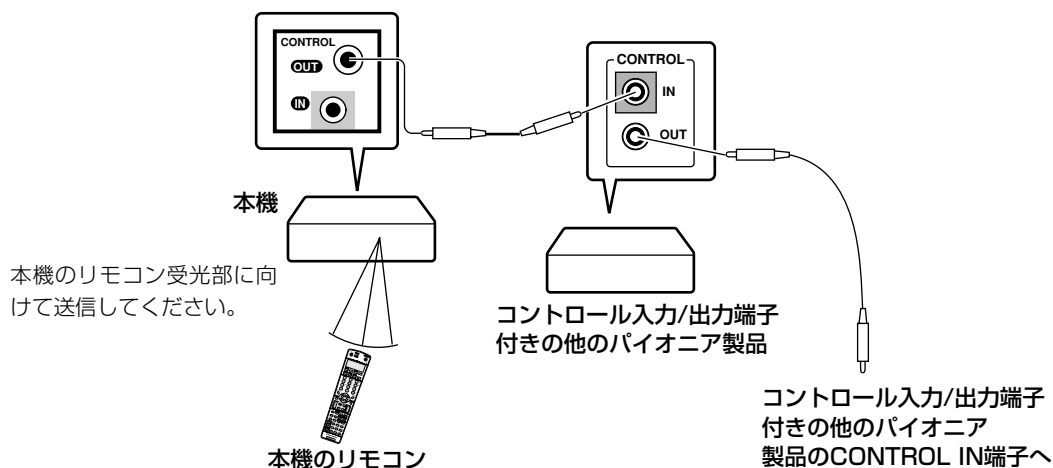
別の部屋でのステレオ再生用スピーカーを接続する　～セカンドゾーン接続～

寝室やキッチンなど、メインのリスニングルームとは別の場所でステレオ再生が可能です。

・接続

・サラウンドバックシステムの設定（→55ページ）
「Second Zone」を選択してください。
サラウンドバックchは自動的に「NO(無し)」に固定されます。

・スピーカーシステムの切り換え（→51ページ）
BまたはA＋Bを選択してください。

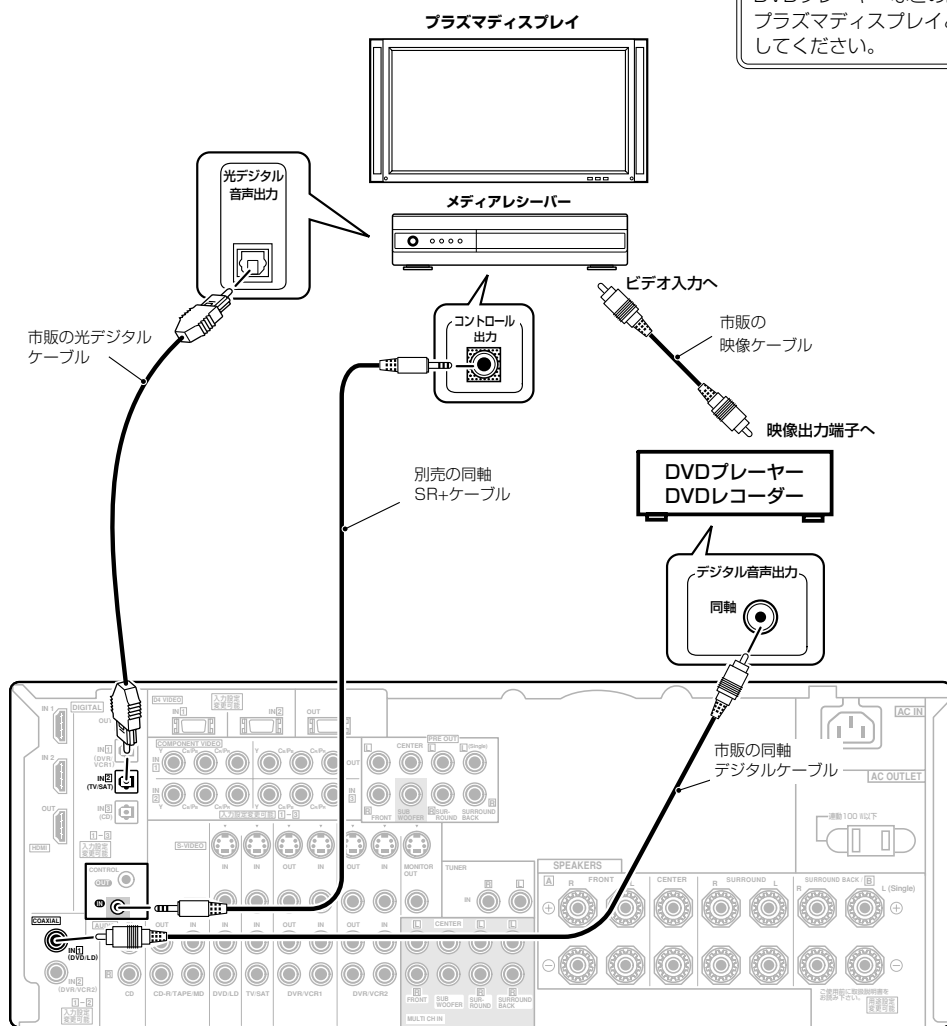
他のパイオニア製品をつないで集中コントロールする

コントロール入力/出力端子の付いた複数のパイオニア機器を、本機のリモコン受光部を使って集中コントロールすることができます。リモコン受光部を持たない機器や、受光部が信号を受けられないところに設置した機器もリモコン操作が可能になります。

- 本機のCONTROL IN端子にコントロールコードを接続すると、リモコンを本機に向けて直接操作することはできません（リモコン信号受光部が機能しなくなります）。
- 接続には市販のモノラルミニプラグ付きコード（抵抗なし）をお使いください。
- コントロール端子の接続をする場合は、必ずオーディオコードまたは映像ケーブルの接続もしてください。デジタル接続だけでは、システムコントロールは正しく動作しません。

パイオニアのプラズマディスプレイと連動操作する

SR＋に対応したプラズマディスプレイ(2003年以降に発売されたモデル)を、SR＋ケーブルで接続することでシステム動作を実現します。プラズマディスプレイの画面を見ながら本機のシステムセットアップをしたり、音量やリスニングモードの確認ができます。また、本機とプラズマディスプレイの入力を連動させて切り換えることができます。本機とプラズマディスプレイをシステム動作させるには、下記の接続および設定が必要となります。

プラズマディスプレイとの接続

このシステム動作を実現するためには専用のSR＋ケーブル(パイオニア部品番号：ADE7095)が必要となります。詳しくはパイオニア部品受注センターへご連絡ください。市販の4極ミニジャック(両端とも)付コードでも使用できます。

本機にSR+ケーブルを接続すると、本機のリモコン受光部はリモコン信号を受け付けなくなりますので、リモコンはプラズマディスプレイに向けて操作してください。プラズマディスプレイの電源が切れているときはリモコンで本機の操作ができません。

プラズマディスプレイとの連動モードを設定する（SR+ Setup）

本機とプラズマディスプレイの連動について、以下の3つの設定を行います。

PDP Volume Control：音量連動モードの設定
連動モードを実行したとき(→84ページ)にプラズマディスプレイの音量を下げるかどうか設定します。
「ON」に設定すると連動モードを実行したとき瞬時にプラズマディスプレイの音から本機の音に切り換えることができます。

PDP Input Select：プラズマディスプレイの入力連動設定
本機の音声とプラズマディスプレイの映像の入力を連動させるための設定です。ソース機器の映像出力を直接プラズマディスプレイの映像入力に接続した場合、本機の入力切り換えと連動してプラズマディスプレイの映像入力も自動で切り換わります。プラズマディスプレイに内蔵されているテレビチューナーの音声出力を本機に接続したときにも利用できます。

Monitor Out：システムセットアップ表示連動の設定
本機のシステムセットアップを表示するために、接続したプラズマディスプレイの入力を設定します。システムセットアップを開始したときに自動的にプラズマディスプレイの入力も切り換わり、また、本機のシステム表示とプラズマディスプレイのSR+表示が重ならないように連動させます。

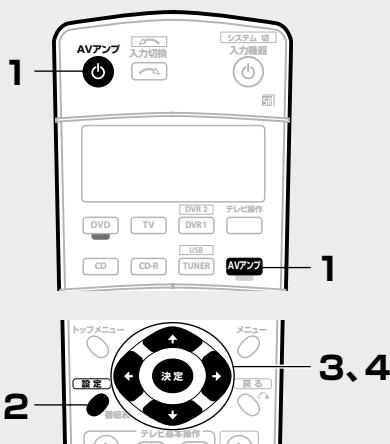
3

System Setup
1.Surr Back System
2.Auto MCACC
3.Manual MCACC
4.Manual SP Setup
5.Input Assign
6.Other Setup
: Exit

4

5

6

本機とプラズマディスプレイをSR+ケーブルで接続して、本機とプラズマディスプレイの電源を入れてください。

1 本機の電源を入れて、AVアンプボタンを押す。

リモコンがアンプ操作モードになります。
システムセットアップ画面を表示するためには、テレビの電源を入れて入力を切り換えてください。

2 設定ボタンを押す。

システムセットアップが表示されます。

3 [6.Other Setup]を選んで決定する。

4 [SR+ Setup] を選んで決定する。

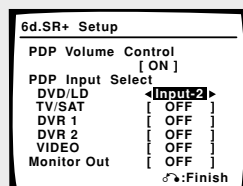
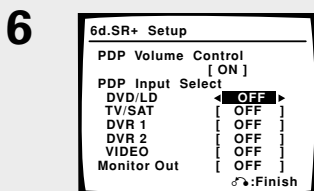
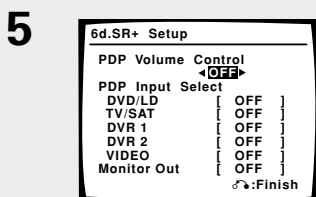
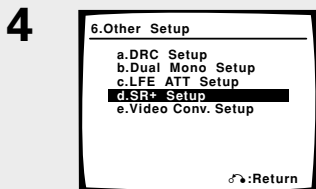
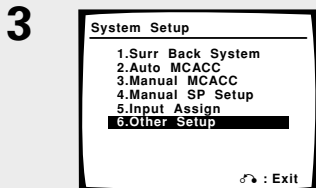
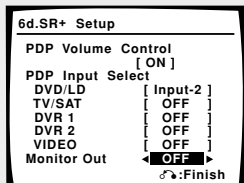
5 PDP Volume Contorolについて、音声連動を選択する。

[ON]：連動モードを実行するとプラズマディスプレイの音量を消音します。
[OFF]：音声連動しません。

6 PDPの映像入力に合わせたい本機の音声入力を選んでプラズマディスプレイの映像入力を設定する。

たとえば、DVDの音声を本機のDVD/LDに、映像をプラズマディスプレイのビデオ入力2に接続したときは、DVD/LDをInput-2にします。

7

6d.SR+ Setup
PDP Volume Control
[ON]
PDP Input Select
DVD/LD [Input-2]
TV/SAT [OFF]
DVR 1 [OFF]
DVR 2 [OFF]
VIDEO [OFF]
Monitor Out ◄ OFF ►
:Finish

7 **Monitor Outについて、本機のMONITOR OUT出力からプラズマディスプレイのどの入力へ接続したのかを選択する。**

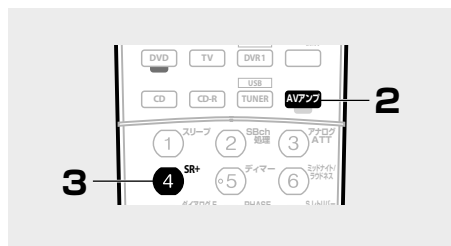
[Input-1]〜[Input-5]([Input-]の入力数はプラズマディスプレイによって異なります)、[OFF]から選びます。システムセットアップ時にここで設定した入力にプラズマディスプレイの入力が切り換わります。
工場出荷時は「OFF」に設定されています。

8 **戻るボタンを押す。**

連動モードの設定を終了します。
システムセットアップを終了するには、設定を押します。

連動モードを実行する

本機とプラズマディスプレイがSR＋ケーブルで接続されていることを確認してください。

- プラズマディスプレイの電源がOFFのとき、または正しく接続されていないときは連動モードは働きません。
- 入力連動モードを設定していない入力のときは、プラズマディスプレイの画面は切り換わりません。
- プラズマディスプレイと本機に表示される音量値は異なります。また、プラズマディスプレイの画面に表示される音量値は目安です。
- SR+ケーブルを接続した状態でプラズマディスプレイの電源が切れているときはリモコンで本機の操作ができません。

1 **プラズマディスプレイの電源を入れる。**

2 AVアンプ **AVアンプボタンを押してリモコンをアンプ操作モードにする。**

3 4 SR+ **連動モードをONにする。**

表示部にSR+ ONと表示されます。
連動モードを解除したいときは再度SR+ボタンを押します。

4 **システム動作を確認する。**

以下の操作を行うと本機とプラズマディスプレイが連動して動作します。

- 本機の入力を切り換えるとプラズマディスプレイの入力が切り換わります。
- 本機の音量を調整するとプラズマディスプレイの画面に音量値が5秒間表示されます。
- その他、本機の各種操作内容および設定状況を表示します。

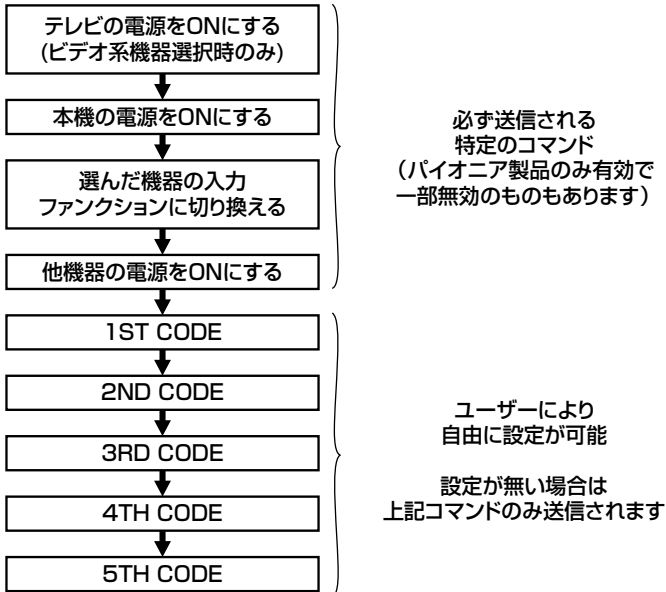
リモコンの他機器連動機能を使いこなす

起動時連動操作　～マルチ・オペレーション～

視聴を始めるための一連の動作を、2つのボタンを押すだけで実現させる機能です。あらかじめ決められているコマンドに加え、各他機器操作面に対し、5つまで自由に登録できる操作(コマンド)を設定できます。

必ず送信される
特定のコマンド
（パイオニア製品のみ有効で
一部無効のものもあります）

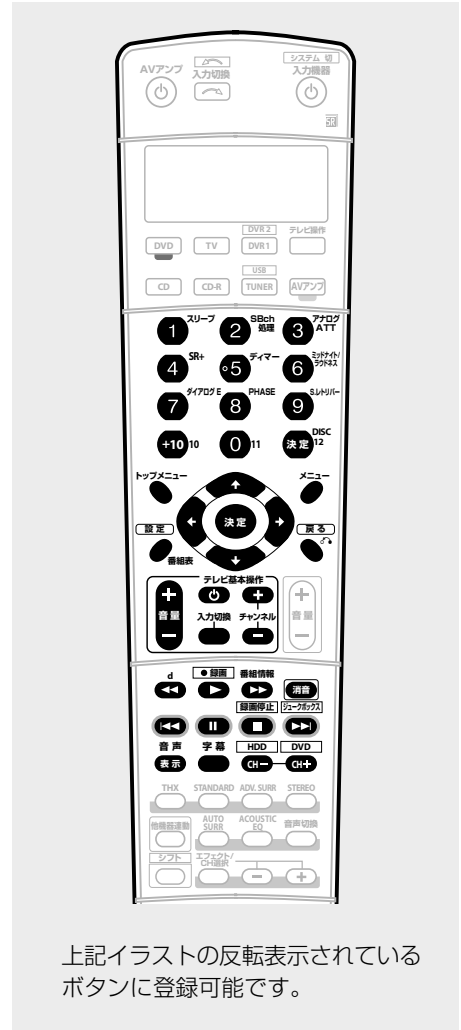
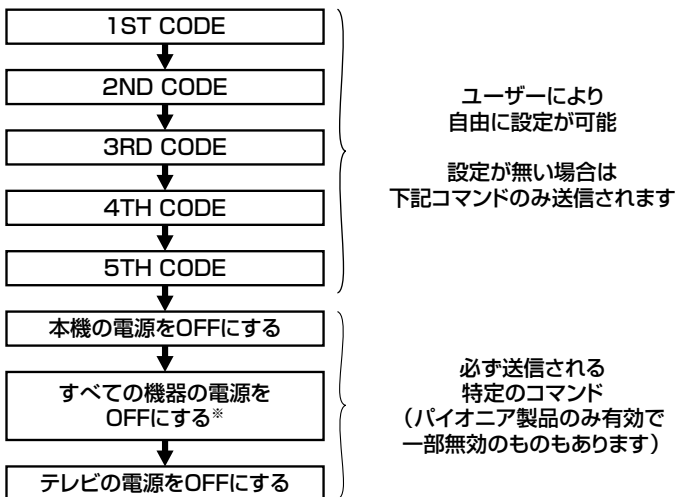
ユーザーにより
自由に設定が可能

設定が無い場合は
上記コマンドのみ送信されます

終了時連動操作　～システム・オフ～

視聴が終了したときに、すべての機器の電源を一斉にオフにする動作を2つのボタンを押すだけで実現させる機能です。
5つまで自由に登録できる操作(コマンド)と、本機を含めたすべてのパイオニアの機器の電源オフのコマンドが送信されます。

ユーザーにより
自由に設定が可能

設定が無い場合は
下記コマンドのみ送信されます

必ず送信される
特定のコマンド
（パイオニア製品のみ有効で
一部無効のものもあります）

上記イラストの反転表示されているボタンに登録可能です。

※ DVDレコーダーなど、一部対応されない機器もあります。
- 録画中に電源が切れてしまうことのないように、「必ず送信される特定のコマンド」にDVDレコーダーの電源をOFFにするコマンドは入っていません。

通常、 ボタンにはパワーのON/OFFコードが入っています。このコードでは、電源は前の状態の逆になるため、確実にON(またはOFF)させることはできませんので、自由コマンドとして設定することはお勧めしません。

連動操作を設定する

以下の設定を行う前に、この機能で使用したいリモコンコードは、必ずプリセットコード設定か学習モードを使用して、何かのボタン（キー）に割り当てておく必要があります。
ここでは例として、DVDボタンに「DVDを再生（または停止）する」という操作を記憶させます。

1 **AVアンプボタンを押しながら設定ボタンを押す。**

「SETUP」が表示されます。設定を中止するにはAVアンプボタンを2秒間押し続けます。

2

起動時連動の設定は

「MULTI OP」を選んで決定し、手順3に進みます。

終了時連動の設定は

「SYS OFF」を選んで決定し、手順4に進みます。

3 **起動動作を記憶させたい他機器操作ボタンを選んで決定する。**

例）DVDボタンを選んで決定します。

4 **「CODE EDT」を選んで決定する。**

「CODE ERS」を選択すると現在登録しているコマンドを消去します。

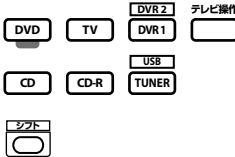
5 **登録したいCODEを選んで決定する。**

例）「1ST CODE」を選んで決定します。
「PRES KEY」が点滅してコマンドの登録になります。

6 **操作したい機器を選択する。**

例）ＤＶＤ ボタンを選びます。

7 **実行したい操作ボタンを選択する。**

例）　再生（または　停止）ボタンを選びます。
コマンド番号選択画面に戻ります。
（手順8へお進みください。）

8 **更にコマンドを登録したいときは、「＊＊＊CODE」を選んで決定したあとに、手順6〜7を繰り返す。**

1つの他機器操作ボタンに対して最大5つまで登録することができます。

9 **「EDIT EXIT」を選んで決定する。**

SETUPメニューの表示画面に戻ります。別の他機器操作ボタンにも登録するときは、手順2〜8を繰り返してください。

10 **「*Exit*」を選んで決定する。**

連動操作の登録を終了します。

連動操作を実行する

1 **マルチオペレーションモードにする。**

「MULTI OP」が点滅します。
リモコンを受光部に向けてください。

2 **起動時連動の実行は操作したい他機器を選択する。**

プリセット動作と、このボタンに登録されているコマンドが実行されます。

終了時連動の実行は入力機器の電源ボタン（システム切）を押す。

このボタンに登録したコマンドとパイオニア製品の電源オフコマンドが送信されます。

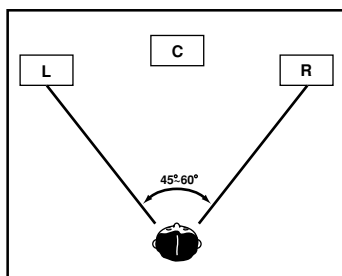
- 各コードの送信が終了するまで、リモコンを受光部に向けておいてください。
- 登録したコマンドによっては、送信終了まで3秒以上かかる場合もあります。
- 登録した機器の状態によっては、登録した動作と異なる場合があります。

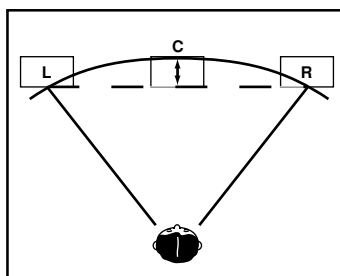
スピーカーの配置について

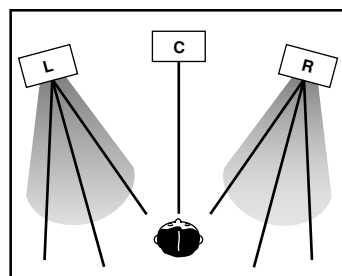
スピーカーの配置はマルチチャンネルサラウンド再生において重要な役割を果たします。
以下の図を参考にしながらリスニングルームに合わせたスピーカーの配置をお試しください。

スピーカーを床に直接設置すると、建物に直接振動が伝わり音質が変わってしまったりします。また、柔らかすぎる棚の上なども音質に影響がありますので、専用スタンドやコンクリートブロックなどの使用をお勧めします。

フロント & センター

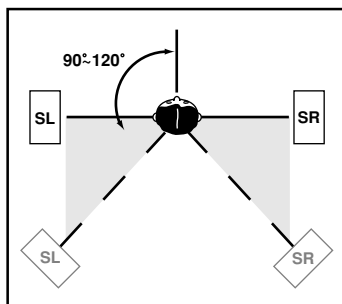
リスニングポイントからの角度

センター（C）を使用する場合は広めに、センター（C）を使用しない場合は狭く配置することをお勧めします。（上図の範囲）

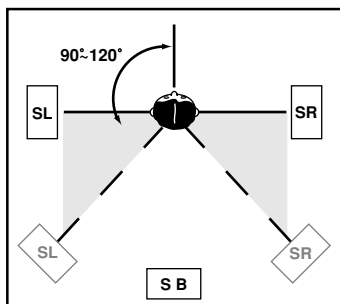
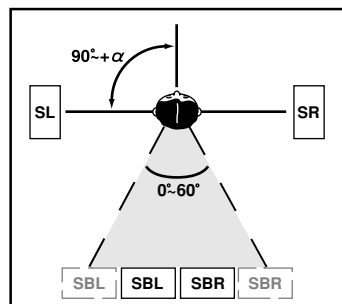
奥行き

センター（C）はフロント（L／R）と同一面からフロントまでの距離を超えない位置に。フロントよりも前方だと音場感を損ねます。

スピーカーの向き

中抜け感を防ぐために多少内振りに。ただし、あまり内振りにしすぎると広がり感などを損ねます。

サラウンド & サラウンドバック

サラウンドバック無しの場合

サラウンドバック1本の場合

サラウンドバック2本の場合

サラウンドスピーカー（SL／SR）は耳の位置より上方60 cm〜1 mでやや下振りにします。ＤＶＤ オーディオ用の配置と両立したいときは後方寄りに配置します。SLとSRが真正面で向き合わないように多少左右に振ったりしてみてください。

サラウンドバックスピーカー（SB/SBL/SBR）も耳の位置より上方60 cm〜1 mでやや下振りにします。サラウンドバック2本の場合はSBLとSBRを隣接させせリスニングポジションから等距離に設置（設定）するとＴＨＸ モードの効果が最大限発揮されます。

サブウーファー

特に制限はありませんが、他のスピーカーの低音出力との打ち消し合いが起こらないような場所に配置してください。また、壁の近くに設置すると建物との共振により低音が極端に増強される場合がありますのでご注意ください。

デジタル音声フォーマットについて

DVDソフトのパッケージのほとんどに以下のような表示がされています。
1枚のディスクに複数の音声が収録されている場合が多く、どの音声を聴くのか選択することができます。

1. 英　語 （5.1 ch サラウンド） DOLBY DIGITAL
2. 日本語（ドルビーサラウンド）
3. 英　語 （DTS 5.1 ch サラウンド） DIGITAL dts SURROUND

収録音声数　　録音方式　　音声記録方式

ドルビーデジタルはDVDの標準音声フォーマットであるため、単に「5.1 chサラウンド」と記載されている場合は、「ドルビーデジタル(5.1 ch)」であることを示します。

デジタル音声の記録方式について

デジタル音声のフォーマットは、下記の「デジタル記録方式」と「収録チャンネル」の組み合わせにより細分化されています。

デジタル記録方式

非圧縮デジタル方式
PCM(Pulse Code Modulation)方式が一般的で、CDやDVDの2 chトラックなどに用いられています。サンプリング周波数やビット数の数字が大きいほど高音質となり、通常のCDは44 kHz/16 bitですが、DVD は48 kHz/20 bitや96 kHz/24 bitなどで記録されています。

圧縮デジタル方式
ドルビーデジタルやDTS、MPEG-2 AAC などはすべて圧縮デジタル方式です。各フォーマットとも聴感心理学などを用いて、音質変化を感じさせない独自の圧縮方式を開発し、従来のデジタルケーブル(同軸または光ファイバー)でのマルチch伝送を可能にしています。

収録チャンネル

2 ch ステレオ信号
左右の２つのチャンネルに別々の音が記録されている信号で、通常の音楽用CD などはほとんどがこのタイプです。

2 ch サラウンド信号(ドルビーサラウンド信号)
フロント左/ 右、センター、サラウンドの4 ch信号を所定の演算で2 chに変換してある信号です。そのまま2 chで再生しても違和感なく楽しめますが、所望のデコード処理(ドルビープロロジックサラウンド再生など)により、製作者の意図どおりの再生となります。

マルチch サラウンド信号
3 ch以上の独立した信号が収録されたものをマルチch信号と呼びますが、5.1 ch収録が最も一般的です。フロント左/右、センター、サラウンド左/右の5 chと、LFEと呼ばれる超低音域専用の0.1 chに独立した信号が記録されています。近年では6.1 ch信号も登場し、上記の5.1 chに加えサラウンドバックch信号が収録されています。

デジタル音声の再生方式について

マルチチャンネルサラウンド再生

3本以上のスピーカー(サブウーファーを除く)で多チャンネル再生することを指します。音場の立体感や移動感が増し、迫力ある臨場感が期待できます。音源となるソフトがマルチch収録ならばソフトに忠実に再生し、ソフトが2 chの場合は、マトリックスデコード処理(ドルビープロロジックIIxやNeo:6技術など)を施し、マルチch再生させることが可能です。

(2 ch)ステレオ再生

2 ch信号をそのまま再生する場合と、マルチchソースを2 chにダウンミックスして再生する場合の双方を意味します。設定やソースにより、サブウーファ－から音が出る2.1 ch再生も「ステレオ再生」と呼ぶことがあります。

デコードとは
デジタル信号処理回路などにより、圧縮記録されたデジタル信号を、もとの信号に変換させる技術です。また、2 chの音源をマルチch化させる演算技術をマトリックス・デコードと言い、5.1 ch信号を6.1 chに伸長させる技術もデコードと呼ぶことがあります。

ドルビー

DOLBY DIGITAL・EX PRO LOGIC IIx

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、ドルビーのマルチチャンネル音声システムのディスクリート・デジタルサラウンド方式の名称です。映画業界の主流であり、DVDビデオの標準音声方式としても採用されるなど、デジタル時代の標準フォーマットとなっています。独立した各チャンネルに記録された自然で高度な立体音像と、低域専用chにより、臨場感あふれるマルチchサラウンドを再現します。人間の聴覚特性を応用した圧縮技術により聴覚上の音質低下を招きません。この信号を伝送するには、デジタル接続が必要です。その他にも以下のような機能を持つ柔軟性の高いフォーマットです。

1） モノ、ステレオ、プロロジック対応の構成および5.1 ch音声の再生に最適なダウンミキシング
2） 広範囲のビットレートにわたる動作
3） ダイナミックレンジ情報を伝達する機能
4） ダイアログノーマライゼーション機能
ダイアログノーマライゼーション機能とは平均的音量レベルが異なるさまざまなソフトでも、一定の音量で再生されるように自動調整する機能です。
「Dial. Norm.」と表現されることもあります。

ドルビーデジタルサラウンドEX

ドルビーデジタルサラウンドEXは、映画「スターウォーズ・エピソード1」の製作に向けて、ドルビーラボラトリーズとTHX社で共同開発された、6.1　ch再生可能な新しい音響フォーマットです。新たに加えられたサラウンドバックchにより空間表現力、定位感が高められ、中央から離れた客席からでも360度の回転や頭上を通過するような移動音効果・音像をより生々しく体感することが可能となりました。フィルム上ではサウンドトラックのサラウンドL／Rchにエンコードされるため、既存のドルビーデジタル(5.1 ch)環境での再生互換性があります。この技術により製作された映画のリストはドルビーラボラトリーズのウェブサイトでご覧になれます。
http://www.dolby.com/

プロロジックIIx 製品は、プロロジックIIx の持つ様々な機能を、選択して搭載することが可能です。プロロジックIIx搭載、とキャッチフレーズされた商品でも、必ずしも全く同じ機能を持っているとは限らないことにご注意ください。

ドルビープロロジック
ドルビープロロジックIIx

ドルビープロロジックIIx は、ドルビープロロジック、ドルビープロロジックII、ドルビーデジタルEX をさらに改良し、ステレオ音声や5.1 ch音声を、すべて最大 7.1 chまで拡張できるマトリックスデコード技術です。
ステレオ音声のマルチch化方式として、ドルビープロロジックは4 chに、ドルビープロロジックIIでは5 ch化していましたが、それらをさらに進化させ、メインの7 chを創り出します。
また5.1 chソースに対し、ドルビーデジタルEXはモノラルのサラウンドバックch を生成していましたが、これをステレオ化することで最大7.1 ch 再生が可能になりました。今まで以上に自然でシームレスな移動感、滑らかで包み込むような、音楽および映画サウンドを体験できます。
本機には複数のモードを搭載しているため、お好みに応じて切り換えることが可能です。

■2 chソース用
MOVIE/MUSIC/GAME/PRO LOGIC
■5.1 chソース用
MOVIE/MUSIC

MOVIE（DDPRO LOGIC IIx MOVIE）
7.1 ch化します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド・エンコード作品に効果的です。

MUSIC（DDPRO LOGIC IIx MUSIC）
7.1　ch化します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース(CDなど)を再生するときにも効果的です。サラウンドch は定位よりも広がり感を重視しています。

PROLOGIC（DDPRO LOGIC）
従来のドルビープロロジックと同等の再生モードです。ソースのクオリティを問わず、幅広くお使いいただけるモードです。

■2 chソースに対するプロロジックとプロロジックIIxの違い

	プロロジック	プロロジックII	プロロジック IIx
効果的なソース	ドルビーサラウンドエンコード処理されたステレオ音声	すべてのステレオ音声	すべてのステレオ音声/Dolby Digital 5.1 chソース
デコードチャンネル数	4.1 ch（サラウンドモノラル）	5.1 ch（サラウンドステレオ）	7.1 ch（サラウンド、サラウンドバック、ステレオ）
周波数特性	サラウンド 7 kHz帯域制限	全チャンネルフルバンド	全チャンネルフルバンド

DTS

DTS

デジタルシアターシステムズ(Digital Theater Systems)の略で、低圧縮率と高転送レートがもたらす豊富な情報量により、高音質マルチチャンネルサラウンド再生を実現します。音楽用にも独自録音による DTS-CDがあります。

DTS 96/24

5.1 chすべてを96 kHz/24 bitの高音質で再生するサラウンドフォーマットで、スタジオのマスター音源のクオリティを踏襲しています。DVDの限られた記録エリアで、高音質/高画質を両立させるために開発されました。本機は、DTS96/24対応デコーダーを搭載していますので、既存のDTS対応のDVD プレーヤーと、DTS96/24に対応するデコーダー(AVアンプ等)をデジタル接続することで、再生することができます(専用プレーヤーは必要ありません)。従来のDTSデコーダーでは通常のDTS信号として再生されるため、完全互換性を持っています。

DTS-ES

2000年11月に発表されたサラウンドフォーマットで、「DTS Extended Surround」の略称です。従来の5.1 chにサラウンドバック(SB)chを加えたもので、かつてない音像･定位感をもたらすことが可能になりました。「DTS-ESディスクリート6.1」と「DTS-ESマトリックス6.1」の2種類があり、どちらも従来のDTS 5.1 chデコーダーとの下位互換性を有しています。

DTS Neo:6

すべての2 chソースを6.1 ch化するマトリックスデコード技術です。Cinemaモード/Musicモードがあります。

CINEMA (Neo6: CINEMA)
6.1 ch化します。映画再生に適したモードで、2 chでも映画館特有の移動感などをお楽しみいただけます。

MUSIC (Neo6: MUSIC)
6.1 ch化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化が無く、音楽再生に適しています。また、センター/サラウンド/サラウンドバックch の音声が音場にナチュラルな広がり感を加えます。

MPEG-2 AAC

MPEG-2オーディオの標準方式の一つで、BS デジタルや地上デジタル放送で採用されている音声符号化規格です。高圧縮率ながら高音質を確保できる点が特長で、番組内容によりマルチチャンネル設定が可能なフォーマットです。

■米国におけるパテントナンバー

08/937,950	5 297 236	5,481,614	5,490,170
5848391	4,914,701	5,592,584	5,264,846
5,291,557	5,235,671	5,781,888	5,268,685
5,451,954	07/640,550	08/039,478	5,375,189
5 400 433	5,579,430	08/211,547	5,581,654
5,222,189	08/678,666	5,703,999	05-183,988
5,357,594	98/03037	08/557,046	5,548,574
5 752 225	97/02875	08/894,844	08/506,729
5,394,473	97/02874	5,299,238	08/576,495
5,583,962	98/03036	5,299,239	5,717,821
5,274,740	5,227,788	5,299,240	08/392,756
5,633,981	5,285,498	5,197,087	

Windows Media® Audio 9 Professional

Plays Windows Media™

Windows Media® Audio 9 Professional（WMA9 Pro）は、マイクロソフト社が 従来のWindows Media Audio（WMA）のテクノロジーをさらに進化させて開発したディスクリート・デジタルサラウンドフォーマットです。WMAは圧縮効率の高さを特徴とし、インターネット配信によるストリーミング再生やダウンロード再生などWindows® PCでの音楽再生に用いられる圧縮音声の標準フォーマットとなっています。
そしてこのWindows Media 9シリーズでは、WMAの特徴を継承しながら、さらにマルチチャンネル対応に拡張しました。WMA9 Proコーデックは、96 kHz/24 bitの解像度によるクリアな音質・5.1 ch/7.1 ch完全ディスクリート処理による高い臨場感を確保しながら、低ビットレートでデジタル サラウンド サウンドを実現します。またその高い圧縮効率により、CD/DVDなどのデジタルメディアだけでなく、高速ブロードバンド通信によるストリーミング配信にも対応しています。

本機はWMA9 Proデコーダーを内蔵していますので、WMA9 Pro対応プレーヤー*と同軸または光ファイバーケーブルでデジタル接続することによって、WMA9 Proでエンコードされた音声を本機でデコードして再生することができます。
* WMA9 Pro対応プレーヤーとしては、PC、DVDプレーヤー、セットトップボックス等が考えられます。ただし、それらの機器の同軸または光出力端子からWMA9 Pro音声を出力できる場合のみ、本機でデコードして再生することができます。

	WMA	WMA9 Pro
最大ディスクリートチャンネル数	2 ch	5.1 ch/7.1 ch
最大量子化ビット数	16 bit	24 bit
最大サンプリング周波数	48 kHz	96 kHz
対応ビットレート	128 kbps〜192 kbps	128 kbps〜768 kbps
S/PDIF 伝送	非圧縮	圧縮

THX

THXは、THX社によって確立された独自の規格と技術の集大成です。「映画館でもホームシアターでも、映画のサウンドトラックは映画監督の意図どおり、できるかぎり忠実に再生して欲しい」というジョージ・ルーカス監督の情熱によって誕生しました。THXはホームシアターの音場最適化に関する数々の特許技術を開発しています。

THX Select2

ホームシアター機器がTHX Select2認証されるには、下記の技術を備え、かつ品質と動作に関する一連の厳しい試験に合格しなくてはなりません。こうして製品搭載が許諾されるTHX Select2のロゴは、ご購入いただいたホームシアター製品が長年にわたって素晴らしい性能を維持する保証となります。THX Select2規格は、プリアンプ・パワーアンプの性能、操作性、デジタル・アナログの両分野に渡る何百もの性能要求を含め、製品の全体像を網羅しています。

THX Cinema

映画のサウンドトラックは、ダビングステージ（ミキシング専用大型映画館）で制作されます。DVD などに収録する音声もそのサウンドトラックのままで、ホームシアター向けの変更は加えません。家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正し、映画館の音場を正確に再現します。

THX Surround EX

「THX Surround EX - Dolby Digital Surround EX」はドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社のTHX部門との共同開発によるものです。リスナーの後方に位置するよう加えられたサラウンドバックchは、ミキシング段階で　Dolby Digital Surround EX 技術によって符号化され、映画館での上映時に復元されます。従来の5.1 chスピーカー構成では表現しきれなかった後方部の繊細な描写力・空間の奥行きや広がり感・音像定位などが得られるようになりました。一般家庭でこの新技術を忠実に再生することができるのは、THX Surround EX のロゴが搭載された製品だけです。この製品は通常の5.1 chソースでも「THX Surround EX 」モードでお楽しみいただけます。この場合のサラウンドバックchの音声は、所定の演算処理によって生成されますので、お好みに応じてご使用ください。

Re-Equalization

映画のサウンドトラックは、映画館での上映用に製作されているため、それを家庭用のオーディオ機器で再生すると、過度に明るく耳障りに聞こえます。Re-Equalizationは小型のホームシアターでも正確な音色バランスを再現します。

Timbre Matching

人間の耳は、音の到達方向によって音色の感じ方が変わります。映画館では数多くのサラウンドスピーカーが聴衆を囲むように配置されていますが、ホームシアターではリスナー両側の2本のみです。 この配置の違いから起こる音色の差を補正し、かつ前方から到達する音の性質に合わせることによって、フロント-サラウンド間の音のつながりをスムーズにします。

Adaptive Decorrelation

映画館ではサラウンドスピーカーが多数なのに対し、ホームシアターは通常2本です。そのため、広がり感やサラウンド感に欠けてしまったり、近接したスピーカーに音場が偏ってしまうことがあります。Adaptive Decorrelationは サラウンド信号間の時間と位相の関係を微妙に変化させることにより、2本のスピーカーでもリスニングエリアを拡大して、映画館と同様の効果をもたらします。

Advanced Speaker Array(ASA)

ASA 処理は、サラウンドバックスピーカー2本使用し、その2本を近接して設置した場合に最高能力を発揮します。この技術はTHX Select2 Cinema、THX MusicModeまたはTHX Games Modeで使用します。

THX Select2 Cinema

Dolby DigitalやDTS等で収録された5.1 ch映画ソースに適しています。このモードにおけるASA 処理は、サラウンド成分を分析し、雰囲気や方向感が最善になるようサラウンドバックに成分を振り分けます。

THX MusicMode

マルチチャンネルのDVD音楽ソフトの中には、映画のサウンドトラックとはまったく違ったミキシングを行っているものがあります。 ASA 技術は、この DTS や Dolby Digital 等で収録された5.1 ch音楽ソースに対し、音楽再生に適した後部音場の安定的な広がり感をもたらします。

THX Games Mode

ステレオやマルチチャンネルとして収録されたゲームソフトの音楽再生に適しています。音場定位技術である「Advanced Speaker Array」(ASA)の処理を加え、360°取り囲むような音響空間を創り出します。

本機は「6.1再生検出信号」(DTS - ES と Dolby Digital Surround EX)を自動検出しますが、それらの技術を用いて上映された映画でも、DVD化の際にこの検出信号を収録していないものがあります。この場合は手動で最適なモードに変更してください。Surround EX技術により製作された映画のリストは各ウェブサイトでご覧になれます。

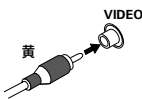
伝送方式について

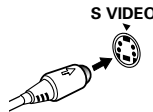
HDMI

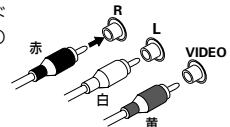
HDMI(High Definition Multimedia Interface)とは1本のケーブルで映像と音声を受信するデジタル伝送規格です。ディスプレイ接続技術のDVI(Digital Visual Interface)を家庭向けのオーディオ機器用にアレンジしたものであり、高い帯域幅のデジタル内容保護(HDCP)を実現した次世代テレビ向けのインターフェース規格です。

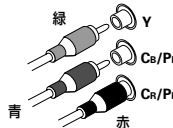
接続コードについて

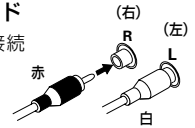
■ビデオコード

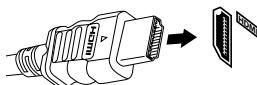
一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

■Sビデオケーブル

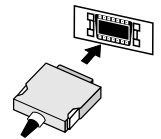
映像信号(Y)と色信号(C)を分離して接続することができ、コンポジットよりも高品位な映像品質を楽しめます。

■AVコード

オーディオコードとビデオコードの一体化したもの。

■コンポーネント映像ケーブル

映像信号のY、CB/PB、CR/PRの3つの信号からなり、Sビデオケーブルよりも高品位な映像品質を楽しめます(ビデオコード3本での接続も可能です)。D端子変換ケーブルも市販されています。

■オーディオコード

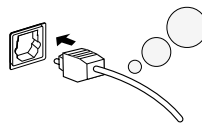
オーディオ機器の接続に使用します。

■HDMIケーブル

デジタル信号でテレビや衛星チューナーと接続することができます。1本で映像信号と音声信号の両方を伝送します。デジタル信号をアナログ変換しないため、鮮明で高品位な映像品質を楽しめます。

■D端子ケーブル

映像信号と映像コントロール信号を、1つのコネクタで接続できるケーブルです。コンポーネント映像ケーブルと同等の映像品質を楽しめます。

■同軸ケーブル/光ファイバーケーブル

デジタル機器の接続に使用します。

同軸ケーブル
(またはオーディオ/
ビデオコード)

光ファイバーケーブル

- 接続の際は端子の向きを合わせてください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉まらなくなることがあります。
- 長さは3 m以下のものを使用してください。
- プラグにホコリが付着したときは、柔らかい布で拭いてから接続してください。

リスニングモードの詳細と出力チャンネル数の一覧

この表は出力する最大の出力チャンネル数を示したもので、厳密なデコードch数とは異なります。詳しくは「デジタル音声フォーマットについて」(→88ページ)をご覧ください。

- 表中の灰色で表示された部分は、本機により最適なモードが自動選択されます。ユーザーによる選択はできません。
- MULTI CH IN入力時は、リスニングモードの効果を加えることはできません。
- 入力信号によっては、サラウンドバック信号を生成できないものがあります。

サラウンドバックスピーカーを接続しているとき

		入力信号		THX	STANDARD	AUTO SURROUND
	ch	信号名称	インジケーター例			
SBch処理モード　ON	マルチch信号	WMA9 Pro (6.1 ch信号/7.1 ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE *3	WMA+THX CINEMA (最大7.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大7.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大7.1 ch)
		DOLBY DIGITAL EX (6.1 ch再生検出信号付)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX MUSICMODE *1 THX GAMES MODE *1 (最大7.1 ch)	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music (最大7.1 ch)	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 (最大7.1 ch)
		DTS ES Matrix DTS ES Discrete (6.1 ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix +THX DTS ES Discrete +THX DTS + DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX MUSICMODE *1 THX GAMES MODE *1 (最大7.1 ch)	DTS ES Matrix DTS ES Discrete DTS + DD PLIIx Movie *1 DTS + DD PLIIx Music (最大7.1 ch)	DTS ES Matrix DTS ES Discrete (最大7.1 ch)
		DTS (5.1 ch信号等)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DTS+Neo:6 +THX DTS + DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX MUSICMODE *1 THX GAMES MODE *1 (最大7.1 ch)	DTS+Neo:6 DTS + DD PLIIx Movie *1 DTS + DD PLIIx Music (最大7.1 ch)	DTS+Neo:6 (最大7.1 ch)
		DOLBY DIGITAL MPEG-2 AAC WMA9 Pro		THX SURROUND EX DD PLIIx Movie +THX *1 THX SELECT2 CINEMA *1 THX MUSICMODE *1 THX GAMES MODE *1 (最大7.1 ch)	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 DD PLIIx Music (最大7.1 ch)	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 (最大7.1 ch)
		DTS96/24 (5.1 ch信号等)		–	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)
SBch処理モード　AUTO		WMA9 Pro (6.1 ch信号/7.1 ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE *3	WMA+THX CINEMA (最大7.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大7.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大7.1 ch)
		DOLBY DIGITAL EX (6.1 ch再生検出信号付)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	THX SURROUND EX (最大7.1 ch)	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 (最大7.1 ch)	DD DIGITAL EX DD PLIIx Movie *1 (最大7.1 ch)
		DTS-ES (6.1 ch信号/ 6.1 ch再生検出信号付)		DTS ES Matrix +THX/ DTS ES Discrete +THX (最大7.1 ch)	DTS ES Matrix/ DTS ES Discrete (最大7.1 ch)	DTS ES Matrix/ DTS ES Discrete (最大7.1 ch)
		DOLBY DIGITAL DTS MPEG-2 AAC WMA9 Pro	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	THX SELECT2 CINEMA(SB SP 2本) (最大7.1 ch) THX CINEMA(SB SP 1本) (最大5.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)
		DTS96/24 (5.1 ch信号等)		–	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)
SBch処理モード　ON/AUTO	2 ch信号	DOLBYサラウンド	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	DD PLIIx Movie +THX DD PRO LOGIC +THX *2 Neo:6 Cinema +THX THX GAMES MODE *1 (最大7.1 ch)	DD PLIIx Movie DD PLIIx Music DD PLIIx Game DD PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music (最大7.1 ch)	DD PLIIx Movie (最大7.1 ch)
		DTSサラウンド				Neo:6 Cinema (最大7.1 ch)
		その他のステレオソース　*4	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE			ステレオ再生 (最大2.1 ch)
		アナログ入力				
		PCM 88.2 kHz/96 kHz DTS96/24		–	DD PLII Movie DD PLII Music DD PLII Game DD PRO LOGIC *2	

*1：サラウンドバックスピーカーを1本しか接続していないときは選択することができません。
*2：DDPRO LOGIC は常に最大5.1 chまでの再生となります。
*3：6.1 ch信号のときは「SBL」「SBR」が消灯して「SB」が点灯します。
*4：MPEG-2 AAC 2 ch信号入力時はNeo:6 CINEMA、Neo:6 MUSICは選択することができません。

サラウンドバックスピーカーを接続していない、またはSBch処理モードOFFのとき

	入力信号			THX	STANDARD	AUTO SURROUND
	CH	信号名称	インジケーター例			
SBch処理モード　関係なし(OFF)	マルチch信号	WMA9 Pro (6.1 ch信号/7.1 ch信号)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE *3	THX CINEMA (最大5.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)
		DOLBY DIGITAL EX (6.1 ch再生検出信号付) DTS-ES(6.1 ch信号/6.1 ch再生検出信号付) DOLBY DIGITAL DTS MPEG-2 AAC WMA9 Pro (5.1 ch信号等)		THX CINEMA	ストレートデコード再生	ストレートデコード再生
		DTS96/24 (5.1 ch信号等)	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	–	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)	ストレートデコード再生 (最大5.1 ch)
	2 ch信号	DOLBYサラウンド	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE	◻◻ PLII Movie +THX ◻◻ PRO LOGIC +THX *2 Neo:6 Cinema +THX (最大5.1 ch)	◻◻ PLII Movie ◻◻ PLII Music ◻◻ PLII Game ◻◻ PRO LOGIC *2 Neo:6 Cinema Neo:6 Music (最大5.1 ch)	◻◻ PLII Movie (最大5.1 ch)
		DTSサラウンド				Neo:6 Cinema (最大5.1 ch)
		その他のステレオソース *4	L C R SL S SR SBL SB SBR LFE			ステレオ再生 (最大2.1 ch)
		アナログ入力				
		PCM 88.2 kHz/96 kHz DTS96/24		–	◻◻ PLII Movie ◻◻ PLII Music ◻◻ PLII Game ◻◻ PRO LOGIC *2	

*1：サラウンドバックスピーカーを1本しか接続していないときは選択することができません。
*2：◻◻ PRO LOGIC は常に最大5.1 chまでの再生となります。
*3：5.1 ch信号のときは「SBL」「SBR」が消灯します。6.1 ch信号のときは「SBL」「SBR」が消灯し「SB」が点灯します。
*4：MPEG-2 AAC 2 ch信号入力時はNeo:6 CINEMA、Neo:6 MUSICは選択することができません。

ADVANCED SURROUNDモードの種類と効果

理想の視聴空間形状や、各ソフトに収録された音声の研究などにより開発された、パイオニアオリジナルのサラウンドモードです。映画/音楽/TV放送/ゲームなど多岐にわたるいかなるソフトでも、快適なサラウンド再生が提供できるよう、多種のモードをご用意いたしました。各ソースはデコード処理（2 chソースはマトリックス·デコード処理）後、それぞれに合わせたオリジナルの処理を加えています。以下をご参照のうえ、お好みに応じて選択してください。

ADVANCED MOVIE
映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド、ドルビーデジタル、DTS・エンコードの映画作品をこのモードで視聴するとより効果的です。映画館さながらの迫力や臨場感をお楽しみいただけます。

ADVANCED MUSIC
音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース（CDなど）に限らずドルビー、DTS・エンコードされた音楽作品を再生するときに効果的です。コンサートホールの雰囲気をお楽しみいただけます。

TV SURROUND
テレビ放送のほとんどの割合を占めるモノラル信号やステレオ信号もマルチチャンネルサラウンドで再生します。モノラルで収録された古い映画などをご覧になるときにも効果的です。

SPORTS
スポーツ中継の視聴に最適です。その場で観戦しているような臨場感を体感できるサラウンド再生です。

ADVANCED GAME
ゲームのスピード感、躍動感をよりいっそう高めます。シューティングゲームやレーシングゲームなど、右へ左へ駆け巡るような流れのあるシーンの多いゲームに効果的です。

EXPANDED
ドルビーサラウンドや2 ch収録されているソースには、ドルビーデジタルやDTSの5.1 chサラウンドのようなリアルな移動感などを実現します。また5.1 ch収録のソースでは、より広がりのある音場を実現します。

7chSTEREO
2 chで収録された音声はステレオ音声のまま、5.1 chソースはダウンミックス処理を施したのち、7本のスピーカーで再生します。部屋のどの場所にいてもステレオ感をお楽しみいただけますので、パーティーなどでの視聴に最適です。

VIRTUAL SURROUND
マルチチャンネルサラウンド再生時の臨場感をフロントスピーカー（左／右）とサブウーファーのみでお楽しみいただけます。

PhonesSurround（ヘッドホン挿入時のみ）
ヘッドホンでありながら仮想立体音響を再現し、マルチチャンネルサラウンド再生時の臨場感をお楽しみいただけます。

デコード処理の方法は、各モードに最適な技術を組み合わせてありますのでお客様が変更することはできません。

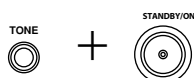
工場出荷時の設定一覧

設定項目	初期値	参照ページ
スピーカーインピーダンス	8 Ω～ 16 Ω	25
サラウンドバックシステムの設定	Normal （SB）	55
スピーカーの有り無し / 低域再生能力	すべて SMALL（小）	62
サブウーファー	YES（有り）	62
スピーカー出力レベル	0 dB（補正無し）	65
スピーカーまでの距離	すべて 3.0 m	66
クロスオーバー周波数	80 Hz	64
視聴環境の周波数特性の補正	全帯域 0 dB（補正無し）	58
サラウンドバックスピーカー間の距離	0 m – 0.3 m	67
ビデオコンバート機能	ON	75
THX スピーカー設定	NO	68
入力の設定	リアパネル表記のとおり（Input Setup 参照）	69
入力ファンクション	DVD/LD	34
入力信号の種類	AUTO（入力信号により変化します）	35
SBch 処理モード	ON	41
リスニングモード	AUTO SURROUND	36
BASIC PHASE CONTROL	ON	42
ミッドナイト／ラウドネス	OFF	43
ダイアログエンハンスメント	OFF	43
サウンドレトリバー機能	OFF	44
トーンコントロール	OFF	44
Digital Safety	OFF	100
スピーカーシステム A/B	SP(A)：ON	51
ディスプレイの明るさ	一番明るい	50
SR ＋連動モードの設定	OFF	83

本機のすべての設定を工場出荷時に戻す

設定オールリセットは以下の手順で実行します。操作は本体フロントパネルで行います。
設定オールリセットを行うと、上記のすべての設定が工場出荷時の状態になりますので**十分ご注意ください。**

① 本機が STANDBY モードのときに TONE ボタンを押しながら　STANDBY/ON ボタンを 3 秒以上押し続ける

② フロントパネル表示部に「RESET？」と表示されたら ENTER ボタンを押し、「OK?」表示後に SYSTEM SETUP ボタンを押します

電源コンセントからコンセントを長時間抜いた状態にしていても、本機で設定した各種設定が消去されることはありません。

仕様

オーディオ部

実用最大出力(JEITA、1 kHz、10 %、6 Ω)
- フロント ………… 170 W+170 W
- センター ………… 170 W
- サラウンド ………… 170 W+170 W
- サラウンドバック ………… 170 W+170 W

定格出力(ステレオ動作時)
- 20 Hz～20 kHz、0.09 %、8 Ω ………… 100 W+100 W

定格出力(サラウンド動作時)
20 Hz～20 kHz、0.09 %、8 Ω
- フロント ………… 100 W+100 W
- センター ………… 100 W
- サラウンド ………… 100 W+100 W
- サラウンドバック ………… 100 W+100 W

入力端子(感度/インピーダンス)
- LINE系 ………… 335 mV/47 kΩ

周波数特性
- LINE系 ………… 5 Hz～100 kHz、$^{+0}_{-3}$ dB

出力端子(レベル/インピーダンス)
- REC OUT系 ………… 335 mV/2.2 kΩ

トーンコントロール
- BASS ………… ± 6 dB (100 Hz)
- TREBLE ………… ± 6 dB (10 kHz)
- LOUDNESS(ボリュームポジション−40 dB時) ………… +4 dB/+2 dB (100 Hz/10 kHz)

SN比(IHF、ショートサーキット、Aネットワーク)
- LINE系 ………… 103 dB

SN比(EIA、1 W (1 kHz))
- LINE系 ………… 83 dB

ビデオ部(コンポジット、S)

入力端子(感度/インピーダンス) ………… 1 Vp-p/75 Ω
出力端子(レベル/インピーダンス) ………… 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 ………… 5 Hz～10 MHz
SN比 ………… 65 dB

コンポーネントビデオ部

入力端子(感度/インピーダンス)
- Y入力レベル ………… 1 Vp-p/75 Ω
- C_B/P_B、C_R/P_R入力レベル ………… 0.7 Vp-p/75 Ω

出力端子(レベル/インピーダンス)
- Y出力レベル ………… 1 Vp-p/75 Ω
- C_B/P_B、C_R/P_R出力レベル ………… 0.7 Vp-p/75 Ω

周波数特性 ………… 5 Hz～100 MHz
SN比 ………… 65 dB

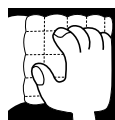
電源部・その他

電源 ………… AC 100 V、50 Hz/60 Hz
消費電力 ………… 335 W
待機時消費電力 ………… 0.5 W
予備電源コンセント
- 連動 ………… 1 (100 W 最大)

外形寸法(幅×高さ×奥行) ………… 420 mm × 173 mm× 466 mm
質量 ………… 15.3 kg

付属品

リモコン ………… 1
電源コード ………… 1
単3形乾電池(R6P) ………… 2
セットアップ用マイク(5 m) ………… 1
保証書 ………… 1
取扱説明書

●仕様および外観は改良のため予告なく変更することがあります。

お手入れについて

通常は柔らかい布でから拭きしてください。汚れがひどい場合は水で5～6倍に薄めた中性洗剤に柔らかい布を浸してよく絞ったあと、汚れを拭き取り、その後乾いた布で拭いてください。アルコール、シンナー、ベンジン、殺虫剤などが付着すると、印刷、塗装などがはげることがありますのでご注意ください。また、化学ぞうきん等をお使いの場合は、化学ぞうきん等に添付の注意事項をよくお読みください。

音のエチケット

楽しい音楽も時と場所によっては気になるものです。隣近所への思いやりを十分にいたしましょう。
ステレオの音量は、あなたの心がけ次第で大きくも小さくもなります。
とくに静かな夜間には小さな音でも通りやすいものです。夜間の音楽鑑賞にはとくに気を配りましょう。近所へ音が漏れないように窓を閉め、お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

故障かな ? と思ったら

故障かな ? と思ったら以下を調べてみてください。意外なミスが故障と思われがちです。また、本機以外の原因も考えられます。ご使用の他の機器および同時に使用している電気機器もあわせてお調べください。
以下の項目を調べても直らない場合は、修理を依頼してください。

音について

「音が出ない」「音がおかしい」「ノイズが出る」など、音についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、音が出ない	入力端子の接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。 ミュート状態(音量インジケーターが点滅)になっている。 セットアップ用マイクが接続されている。 スピーカー出力がOFFになっている。 音量が下がっている。	接続を再確認する。 設定を修正する。 SIGNAL SELECT(音声入力)ボタンで正しい入力信号を選択する。 リモコンでミュートを解除する。 セットアップ用マイクを抜く。 SPEAKERS(音声入力)ボタンを押して、ON(SP A)にする。 MASTER VOLUMEを調整する。	 **69** **35** **34** **12** **51** **34**
フロントスピーカー以外の音が出ない	スピーカーシステムの設定がフロントch以外すべてNOになっている。 リスニングモードがSTEREOになっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。 サラウンド再生用のリスニングモードを選択する。	**62** **36**
サラウンドバックスピーカーから音が出ない	SBch処理モードの設定がOFFになっている。 SBch処理モードの設定がAUTOで「6.1ch再生検出信号」の記録されていないソースを使用している。 サラウンドバックシステムの設定が[Front Bi-Amp]または[Second Zone]になっている。 スピーカーシステムの設定でサラウンドまたはサラウンドバックchの設定が[NO](無し)になっている。 接続が正しくない(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続していてR ch側に接続している)。	ONを選択する。 ONを選択する。 [Normal(SB)]を選択する。 サラウンドバックchの設定を修正する。 接続を再確認する(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続しているときはL ch側に接続する)。	**41** **41** **55** **62** **24**
特定のスピーカーから音が出ない	スピーカーシステムの設定が[NO](無し)になっている。 スピーカーの接続が外れている。 ソフトのサウンドトラックが意図的にそのように録音されている。 スピーカーの出力レベル設定が小さい。 サラウンドバックシステムの設定で[Second Zone]が選択されているときのスピーカーシステムの選択が合っていない。	スピーカーシステムの設定を修正する。 スピーカーの接続を確認する。 リスニングモードによっては効果音のみ出力される場合があります。 スピーカーの出力レベル設定を上げる。 スピーカーシステムで「A+B」または「B」にする。	**62** **24** **36** **65** **51**
表示部にマルチチャンネル信号のプログラムフォーマットインジケーターが点灯しているが、音が出ていないスピーカーがある	再生しているソースのプログラムフォーマットにはそのチャンネルの情報が記録されているが、そのチャンネルに音声が収録されていない。	故障ではありません。収録内容をご確認ください。	
デジタル機器の音が出ない	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。 デジタル出力レベル調整機能が付いているCDレコーダーなどのデジタル出力レベル設定が低すぎる。 再生ソフトのデジタルフォーマットに対応していないプレーヤーである(または出力しない設定になっている)。	デジタル接続を再確認する。 デジタル入力の設定を修正する。 接続されているデジタル機器に応じて、SIGNAL SELECT(音声入力)ボタンでDIGITALを選択する。 プレーヤーのデジタル出力設定を適切に修正する。(DTS CDの場合は0 dBに設定してください。) 対応フォーマットの音声トラックを選択する(または出力させる設定にする)。	**32** **69** **35** **16**
PCM以外の信号の音が出ない	SIGNAL SELECTの入力信号選択が「PCM」になっている。	SIGNAL SELECT(音声入力)ボタンで正しい入力信号を選択する。	**35**

症　状	原　因	対　応	参照
録音ができない	アナログ信号をデジタルで、デジタル信号をアナログで録音しようとしている。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号である。 REC端子の接続が正しくない。	アナログ信号はアナログ録音、デジタル信号はデジタル録音のみ可能です。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号は録音することはできません。 正しく接続し直す。	**49** **31**
無入力でもノイズが聞こえる	電源そのものにノイズが残っている。	パソコンなどのデジタル機器とタコ足配線になっていないか確認する。	
MULTI CH INPUT端子に接続した機器で、DVDオーディオを再生したが2chにダウンミックスされているような音になっている	MULTI CH INPUT端子に接続したものではない信号を再生している。(デジタルPCM出力など) プレーヤーの出力設定が間違っている。	MULTI CH INボタンを押して入力を切り換え、マルチチャンネル入力の再生をする。 プレーヤーの取扱説明書をご覧ください。	**48**
スピーカーの設定をフロントのみ「LARGE」としていてマルチchのDVDオーディオを再生したが、マルチch音声がダウンミックスされない	ダウンミックス禁止のソフトを再生している。	故障ではありません。	
DTS CDのサーチ中にノイズが出る	サーチ中にCDに含まれるデジタル情報を読み取ってしまう。	故障ではありません。サーチ中はアンプの音量を下げ、スピーカーから出る音を抑えてください。	
DTSのLDを再生するとノイズが出る	音声入力信号の切り換えでANALOGが選択されている 。	機器を正しくデジタル接続し、SIGNAL SELECT(音声入力)ボタンでDIGITALを選択する。	**35**

サブウーファーの接続／再生について

音についての問題の中でも、特に接続したサブウーファーについての疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
サブウーファーから音が出ない	サブウーファーあり／なしの設定が [NO](無し)に設定されている。 再生しているソース(シーン)や音楽に超低域成分（LFE チャンネル）が含まれていない。 接続が外れている(または、間違っている)。 サブウーファー側の電源が OFF になっている。 サブウーファー側の自動スタンバイ機能が働いている。	[Speaker Setting] 設定を確認して、サブウーファーの設定を [YES](有り)または [PLUS] にする。 故障ではありません。収録内容をご確認ください。 サブウーファーの接続を確認して、外れているときは接続し直す。 サブウーファーの電源を確認する。 サブウーファーの機能を確認する（詳しくはサブウーファーの取扱説明書をご覧ください。）	**62** **24**
サブウーファーからの音が小さい	低域成分の少ない／ないソースやディスク（CD など）を再生している。 サブウーファー出力レベルの設定値が小さい。 クロスオーバー周波数の設定が低い。 サブウーファー側のボリューム設定が小さい。	再生しているソースの低域成分が少なく、サブウーファーの音量が不足している場合は、[Speaker Setting]でサブウーファーの設定を[PLUS] にする。 [Channel Level] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 [Crossover Network] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。 サブウーファーのボリュームレベルを上げる。	**62** **65** **64**

映像について

「映像が出ない」「メニュー画面(OSD画面)が表示されない」など映像についての疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合わせても、映像が出ないまたは違う入力の映像が出る	TVモニター側の入力切り換え設定が正しくない。 ビデオセレクト機能で異なる入力の映像が選択される。 ソース機器とHDMI端子で接続しているが、TVモニターをHDMI端子で接続していない。 ソース機器とTVモニターを接続しているコードの種類が違っていてビデオコンバート機能がOFFに設定されている。	TVモニターの取扱説明書をお読みになり、正しい入力に切り換えてください。 ビデオセレクト機能を正しい入力にする。 ソース機器とTVモニターはHDMI端子を使って本機と接続する。 ビデオコンバート機能をONにする。	 **50** **47** **75**
コンポーネント端子やD端子に接続したソース機器の映像が出ない	入力設定(Input Assign)の「Component/D4 Input」の設定が正しくない。	入力の設定(Input Assign)を正しく行う。	**70**
録画ができない	録画機器とソース機器の接続端子が合っていない。	録画機器の接続端子とソース機器の接続端子を(コンポジットまたはSビデオで)合わせる。 コピープロテクト信号の入った映像信号は録画することができません。	**49**
コンバート後、出力映像が出ないまたは乱れる	ビデオデッキで早送りしているときのように映像信号に乱れがあるときは、映像が歪んだり、映らなくなることがあります。また、ディスプレイ側の性能によっては同様の症状が出ることもあります。	ビデオコンバート機能をOFFにして、入力と同じビデオフォーマット(コンポーネント、D4、S、コンポジットビデオコードのいずれか)で接続、再生してください。	**26,75**

操作について

「操作できない」「電源が切れる」など操作時にある疑問や症状です。

症　状	原　因	対　応	参照
大音量で再生したときに電源が切れる	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、+/−が接触し、保護回路が働いている。 スピーカーの実動作上の最低インピーダンスが非常に低いため、保護回路が働いた。または、低周波の過大な入力が持続した。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。 ボリュームを下げて再生する。 チャンネルごとの周波数特性の補正で低域(40 Hzまたは125 Hz)のレベルを下げる。 DIGITAL SAFETY機能をSAFETY ONにすると、さらに数dB音量が上げられる場合があります。(スタンバイモード時に、SYSTEM SETUPボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押すと、SAFETY ON、SAFETY OFFが切り換わります。	**24** **59**
電源が突然切れてPHASE CONTROLインジケーターが点滅する	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、+/−が接触し、保護回路が働いている。 本機のアンプ回路が故障です。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、アンプまたはスピーカー側のスピーカー端子からはみ出ないように接続する。 すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	**24** **裏表紙**
電源が突然切れてDVD/LDインジケーターが点滅する	本機の故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	**裏表紙**
操作ボタンを押しても動作しない	空気が乾燥しているとき、静電気などの影響を受けている。	電源プラグを一度コンセントから外して、再び差し込む。	
AMP ERRまたはMCACCインジケーターが点滅して自動的に電源が切れる	本機のアンプ回路の故障です。	すみやかに使用を停止し、修理を依頼してください。この症状のあとに電源のON/OFFを繰り返すのはおやめください。	**裏表紙**

症　状	原　因	対　応	参照
OVERHEATと点滅表示したまま音が出なくなる	本機内部の温度が許容値を超えた。	通風がよくなるように設置を変える。 一度電源を切り、冷えてから使用する。	**5**
SIGNAL SELECTボタンを押しても入力がDIGITALにならない	接続またはデジタル入力の設定が正しくない。 MULTI CH IN入力になっている。	機器の接続を再確認し、「デジタル入力の設定」を正しく修正する。 MULTI CH IN入力以外に切り換える。	**69** **34**
5.1 chソースを再生しているのに、5.1 ch再生されない	DVDプレーヤーのデジタル出力設定がOFFになっている。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定がOFFになっている。	DVDプレーヤーのデジタル出力設定をONにする。 DVDプレーヤーのドルビーデジタルまたはDTS出力設定をONにする。	**16**
DVDオーディオを再生するとプレーヤーには96 kHzと表示されるが、本機では表示されない	MULTI CH IN端子はアナログ入力端子なので、デジタル情報を表示することはできません。	故障ではありません。プレーヤーの取扱説明書もご覧ください。	
96 kHzのソフトを再生しても表示が96 kHzにならない	プレーヤー側で96 kHz出力がOFFになっている。	プレーヤーの96 kHz出力をONにする。	**16**
リモコン操作ができない	リモコンの電池が消耗している。 距離が離れすぎている。角度が悪い。 途中に信号を遮る障害物がある。 蛍光灯などの強い光がリモコン信号受光部に当たっている。	電池を交換する。 7 m以内、左右30˚以内で操作する。 障害物を取り除くか、操作する場所を移動する。 リモコン信号受光部に光が直接当たらないようにする。	**5** **17**
他機器をリモコンで操作できない	プリセットコードの設定が間違っている。 電池切れの期間にメモリーが消去された。	正しいプリセットコードを設定する。 もう一度設定を行う。	**76**
SR接続をしているのに相手機器がリモコンで動作しない	接続でコントロール端子のIN/OUTを間違えている。 コントロールコード以外の接続をしていない。 他社製品の同用途端子と接続している。	正しく接続し直す。 アナログのオーディオコードなどを接続する。 他社製品の動作はサポートしていません。	**81** **81**

インジケーター／表示について

操作中のインジケーター表示などの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
圧縮デジタル*のソフトを再生しても、対応するインジケーターが点灯しない	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。 プレーヤーが停止か一時停止になっている。 プレーヤーの音声出力設定が間違っている。 再生しているトラックがPCMなどになっている。	接続を再確認する。 デジタル入力の設定を正しく行う。 SIGNAL SELECT（音声入力）ボタンで正しい入力を選択する。 再生を開始する。 プレーヤーの音声出力設定を各フォーマットに対応するよう修正する。 プレーヤーの音声切り換え機能で圧縮デジタル*の音声を選択する。	**32** **69** **35** **16** **16**
圧縮デジタル*のソフトを再生してもすべてのプログラムフォーマットインジケーターが点灯しない	収録フォーマットが5.1 ch(または「6.1 ch再生検出信号」対応)ではない。	故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	
圧縮デジタル*のソフトを再生しても、DD DIGITALまたはDTSなどの表示にならない	デジタル信号が入力されていない。 ソフトの音声が2 chフォーマットである。 ドルビーサラウンドエンコードされたソフトである。	SIGNAL SELECT（音声入力）ボタンでAUTOまたはDIGITALを選ぶ。 故障ではありません。再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	**35** **88**
Surround EX（またはDTS ES）ソフト再生時に、SBch処理モードの設定をAUTOにしてもEX（またはES）デコードしない	「6.1 ch再生検出信号」が記録されていない（劇場公開時とDVD収録時はまれに違う場合があります）。	SBch処理モードの設定をONにする。	**41**

症　状	原　因	対　応	参照
Surround EX(またはDTS ES)ソフトを再生中、SL、SB、SRのインジケーターは点灯するが、EX(またはES)デコードしない	スピーカーシステムの設定で、サラウンドバックチャンネルが[NO](無し)に設定されている。 リスニングモードが正しくない。	サラウンドバックchの設定を、接続したスピーカーに合わせて変更する。 SBch処理モードの設定をONまたはAUTOに変更し、リスニングモードをサラウンドにして再生する。	62 36, 41 94
DVD オーディオを再生しているのにディスプレイにはPCMと表示される	HDMI接続をしている入力でDVDオーディオを再生するとPCMと表示されます。	故障ではありません。	

圧縮デジタル＊：ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AACなどの総称として使用します。

MCACC(音場補正)について

MCACC(音場補正)に関する疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
音場補正のオート設定を何度行ってもエラーになる	マイクとスピーカーとの間に障害物がある。	障害物を移動させる。	12
測定結果のサブウーファーの距離が実際の距離より長い	サブウーファー内部ローパスフィルターの遅延特性の影響で再生音にディレイがかかっている。	MCACCでは、こういった遅延特性を考慮したうえで距離を特定して正確なディレイ時間を設定するようにしています。	15
スピーカーの大、小設定が誤った設定になる	耳に聞こえにくい周波数の騒音がある。 マイクの位置によって微妙な音響特性の変化を検出している。	エアコンなどモーターを使用した機器の電源を切ってみる。 [Speaker Setting]で正しい設定にする。	62
音場補正したが、音がおかしい	スピーカー端子の位相が反転している(＋/－が逆)。	正しく接続する。	24
Acousutic Cal EQで自動測定された補正カーブを手動で調整中に「OVER」がディスプレイに表示される	調整値の組み合わせによっては補正レベルが許容量を超える。	「OVER」の表示が消えるまで、さまざまな帯域のレベルを下げる。	60

HDMI接続／再生について

HDMIケーブルでつないだ機器の音を再生するときの疑問や症状をまとめました。
HDMIインジケーターが点滅し続けるときは以下の症状、原因、対応をご確認ください。

症　状	原　因	対　応	参照
映像と音声の両方が出ない	ソース機器の仕様によってはAVアンプを通してのHDMI接続ができない場合があります。	ソース機器の仕様を確認し、非対応のときはソース機器と本機をコンポーネントビデオ、D4ビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。	26
映像が出ない	ソース機器の設定によっては映像が表示されないビデオフォーマットが出力されることがあります。	ソース機器の設定を変更するか、コンポーネントビデオ、D4ビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれかで接続してください。	26
音声が出ない、またはとぎれる	本機のHDMI入力では音声信号を入力することができません。	HDMI入力端子とは別に音声入力端子に接続してください。	47
映像が乱れる	ビデオデッキなど映像信号に乱れがあるとき(早送りなど)は映像の品位によって映像が歪んだり乱れたり映らなくなることがあります。また、ディスプレイ側の性能によっては同様の症状が出ることもあります。	ビデオコンバート機能をOFFにして入力と同じビデオフォーマット(コンポーネントビデオ、D4ビデオ、Sビデオ、コンポジットビデオコードのいずれか)で接続、再生してください。	75

USB再生について

USBメモリーを再生するときの疑問や症状をまとめました。

症　状	原　因	対　応	参照
USBマスストレージ機器が本機で認識されない。	接続が正しくない。 USBメモリーのフォーマットで、FAT12、NTFS、HFSは本機で再生することができません。 USBハブを使用している。	本機の電源を切ってから再度接続し、電源を入れてください。 USBメモリーのフォーマットがFAT16またはFAT32であるかどうか確認してください。FAT12、NTFS、HFSは本機で再生することができません。 本機はUSBハブには対応しておりません。	**45**
USB ERR3と表示され、USBメモリーの再生ができない。	さまざまな原因が考えられます。	「USB ERR（USBエラー）について」（46ページ）のすべての項目を確認、実行し、それでもUSB ERR3が表示されるときは、パイオニアカスタマーサポートセンターへご連絡ください。	**46**
USBメモリーのファイルを再生できない。	著作権保護のかかったWMAやMPEG-4 AACのファイルを本機で再生することはできません。 本機で対応していない圧縮フォーマットを再生している。	著作権保護のかかっていないファイルを再生してください。（パソコンなどでCDなどの音楽データを取り込む場合、設定によっては著作権保護がかかることがあります）。 圧縮フォーマットが本機で対応しているかどうか確認してください。	**46**
リモコンの►ボタンを押してもUSBメモリーのファイルを再生しない。	リモコンがUSBモードになっていない。	シフトボタンを押しながらTUNERボタンを押してリモコンをUSBモードにしてください。	**45**

エラーメッセージについて

システムセットアップでのMCACC（音場補正）時に表示されるメッセージの意味

「Connect microphone」：
「Connect Mic!」：
フロントパネルのMCACC SETUP MIC端子に、付属のマイクを接続してください。
「Too much ambient noise」：
「Noisy RETRY」：
周辺の騒音が大きすぎ、測定に誤差が生じる可能性があります。
・エアコンなどモーターを使用した機器や超音波ねずみ駆除装置などの電源を一時的にＯＦＦにするか遠ざけるなどの処置を行ってみてください。
・周囲が比較的静かな時間帯にもう一度やり直してください。
「Check microphone」：
「Mic Err RETRY 」：
マイクからテスト信号が検出できなくなりました。
・オートセットアップ用マイクの接続や接続コードの断線をチェックしてください。
・スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
・測定中はできるだけボリュームを変化させないでください。
「ERROR!」：
「Error Front」「Error Surr.」「ERR SB」：
Speaker Level測定後のYes/No Check判定で、以下のような間違った接続を検出しました。
・フロント、サラウンドに表示された：スピーカーがL/Rの片方しか検出されませんでした。
・サラウンド「NO」、サラウンドバック「ERR」の場合：サラウンドの接続は検出されずサラウンドバックの接続が検出されました。
・サラウンドバック（1本接続時）の場合:R ch側から検出しました（1本のみ接続するときは、Lch側を使用してください）。
「Attention! Subwoofer output level is too low.　Turn volume up on Subwoofer.」：
「SW Volume Up」：
[YES]と設定したサブウーファーの出力信号が検出できません。サブウーファー本体の電源を確認しボリュームを適正値に上げてください。

保証とアフターサービス

保証書(別添)

保証書は、必ず「販売店名・購入日」などの記入を確かめて販売店から受け取っていただき、内容をよくお読みのうえ、大切に保管してください。

保証期間はご購入日から1年間です。

補修用性能部品の保有期間

当社は、この製品の補修用性能部品を製造打ち切り後8年間保有しています。性能部品とはその製品の機能を維持するために必要な部品です。

修理に関するご質問、ご相談

お買い求めの販売店へご相談・ご依頼ください。

修理を依頼されるとき

修理を依頼される前に取扱説明書の「故障かな？と思ったら」の項目をご確認ください。それでも異常のあるときは、必ず電源プラグを抜いてから、販売店へご依頼ください。ご転居されたり、ご贈答品などで、お買い求めの販売店に修理のご依頼ができない場合は、「ご相談窓口のご案内・修理窓口のご案内」(裏表紙)をご覧になり、修理受付センターにご相談ください。

連絡していただきたい内容

- ご住所
- お名前
- 電話番号
- 製品名：AVマルチチャンネルアンプ
- 型番：VSA-1016V
- お買い上げ日
- 故障または異常の内容(できるだけ詳しく)
- 訪問ご希望日
- ご自宅までの道順と目標(建物や公園など)

■ 保証期間中は：

修理に際しては、保証書をご提示ください。保証書に記載されている当社の保証規定に基づき修理いたします。

■ 保証期間が過ぎているときは：

修理すれば使用できる製品については、ご希望により有料で修理いたします。

本製品は家庭用オーディオ機器（オーディオ・ビデオ機器）です。下記の注意事項を守ってご使用ください。

1. 一般家庭用以外での使用（例：店舗などにおけるBGMを目的とした長時間使用、車両・船舶への搭載、屋外での使用など）はしないでください。
2. 音楽信号の再生を目的として設計されていますので、測定器の信号（連続波）などの増幅用には使用しないでください。
3. ハウリングで製品が故障する恐れがありますので、マイクロフォンを接続する場合はマイクロフォンをスピーカーに向けたり、音が歪むような大音量では使用しないでください。
4. スピーカーの許容入力を超えるような大音量で再生しないでください。

S26_Ja

長年ご使用のオーディオ製品の点検をおすすめいたします。こんな症状はありませんか？
- **電源コードや電源プラグが異常に熱くなる。**
- **電源コードにさけめやひび割れがある。**
- **電気が入ったり切れたりする。**
- **本体から異常な音、熱、臭いがする。**

故障や事故防止のためすぐに使用を中止し、電源プラグをコンセントから抜き、「保証とアフターサービス」（上記）をお読みの上、修理受付センター（裏表紙）に点検をご依頼ください。

サービスステーションリスト

サービス拠点のご案内

サービス拠点への電話は、修理受付センターでお受けします。（沖縄県の方は沖縄サービスステーション）
また、認定店は不在の場合もございますので、持ち込みをご希望のお客様は修理受付センターにご確認ください。

●北海道地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
☆札幌サービスセンター	FAX　011-611-5694	〒064-0822	札幌市中央区北2条西20-1-3　クワザワビル
旭川サービス認定店	FAX　0166-55-7207	〒070-0831	旭川市旭町1条1丁目438-89
帯広サービス認定店	FAX　0155-23-7757	〒080-0015	帯広市西5条南28丁目1-1
函館サービス認定店	FAX　0138-40-6473	〒041-0811	函館市富岡町2-18-7

●東北地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
☆仙台サービスセンター	FAX　022-375-4996	〒981-3121	仙台市泉区上谷刈6-10-26
山形サービス認定店	FAX　023-615-1627	〒990-0023	山形市松波1-8-17
郡山サービス認定店	FAX　024-991-7466	〒963-8861	郡山市鶴見坦1-9-25　クレールアヴェニュー伊藤第2ビル1F D号
盛岡サービスステーション	FAX　019-659-1895	〒020-0051	盛岡市下太田下川原153-1
青森サービス認定店	FAX　017-735-2438	〒030-0821	青森市勝田2-16-10
八戸サービス認定店	FAX　0178-44-3351	〒031-0802	八戸市小中野4-3-34
秋田サービス認定店	FAX　018-869-7401	〒010-0802	秋田市外旭川字梶の目346-1

●東京都内

受付　月～土　9:30～18:00（日・祝・弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
世田谷サービスステーション	FAX　03-3419-4234	〒155-0032	世田谷区代沢4-25-9
墨田サービスステーション	FAX　03-3621-7610	〒130-0011	墨田区石原4-27-9　中島ICハイツ1F
城北サービスステーション	FAX　03-3550-3625	〒175-0083	板橋区徳丸4-11-4
多摩サービスステーション	FAX　042-524-5947	〒190-0003	立川市栄町4-18-1　エクセル立川1 F

●関東・甲信越地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
新潟サービスステーション	FAX　025-241-1879	〒950-0913	新潟市鐙1-5-23
佐渡サービス指定店　横山電機商会	FAX　0259-63-3400	〒952-1209	佐渡市金井町千種1158-1
☆千葉サービスセンター	FAX　043-207-2555	〒263-0014	千葉市稲毛区作草部町1369-1　椎の実ハイツ1F
水戸サービス認定店	FAX　029-248-1306	〒310-0844	水戸市住吉町307-4
つくばサービス認定店	FAX　0298-58-1369	〒305-0045	つくば市梅園2-2-6
☆埼玉サービスセンター	FAX　048-651-8030	〒331-0812	さいたま市北区宮原町1-310-1
川越サービス認定店	FAX　049-233-6581	〒350-0804	川越市下広谷1128-11
宇都宮サービス認定店	FAX　028-657-5882	〒321-0912	宇都宮市石井町3373-1
群馬サービス認定店	FAX　0270-22-1859	〒372-0801	伊勢崎市宮子町1191-17　パサージュ808伊勢崎101号
☆神奈川サービスセンター	FAX　045-943-3788	〒224-0037	横浜市都筑区茅ヶ崎南2-18-1　ベルデユール茅ヶ崎
横浜北サービス認定店	FAX　045-943-3155	〒224-0036	横浜市都筑区勝田南1-19-17
厚木サービス認定店	FAX　046-224-7724	〒243-0807	厚木市金田339-1　金田コーポフロンテア201
三宅島サービス指定店　勝見電機	FAX　04994-6-1246	〒100-1211	三宅村大字坪田
松本サービス認定店	FAX　0263-48-0575	〒390-0852	松本市大字島立180-5　パイオニア松本拠点1F
長野サービス認定店	FAX　026-229-5250	〒380-0935	長野市中御所1-24
甲府サービス認定店	FAX　055-228-8003	〒400-0035	甲府市飯田4-9-14

●中部地区

受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

拠点	FAX	〒	住所
☆名古屋サービスセンター	FAX　052-532-1148	〒451-0063	名古屋市西区押切2-8-18
岡崎サービス認定店	FAX　0564-33-7080	〒444-0931	岡崎市大和町字荒田36-1　大和ビレッジB-1
津サービス認定店	FAX　059-213-6712	〒514-0821	津市垂水522-5
岐阜サービス認定店	FAX　058-274-5256	〒500-8356	岐阜市六条江東1-1-3
静岡サービスステーション	FAX　054-237-5691	〒422-8034	静岡市駿河区高松1-6-5
沼津サービス認定店	FAX　055-967-8455	〒410-0876	沼津市北今沢12-7
浜松サービス認定店	FAX　053-422-1401	〒435-0042	浜松市篠ヶ瀬町415　ビラモデルナ5号
金沢サービスステーション	FAX　076-269-4758	〒920-0362	金沢市古府1丁目178
富山サービス認定店	FAX　076-425-3027	〒939-8211	富山市二口町1-7-1
福井サービス認定店	FAX　0776-27-1768	〒910-0001	福井市大願寺3-5-9

●関西地区				受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く） ☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）
☆大阪サービスセンター	FAX	06-6310-9120	〒564-0052	吹田市広芝町5-8
大阪北サービス認定店	FAX	06-6453-5666	〒531-0076	大阪市北区大淀中3-9-4
大阪南サービス認定店	FAX	0722-75-2625	〒593-8322	堺市津久野町1-8-15　ローズマンション1F
神戸サービス認定店	FAX	078-265-0832	〒651-0093	神戸市中央区二宮町1丁目10-1　ローレル三宮ノースアベニュー1F
姫路サービス認定店	FAX	0792-51-2656	〒671-0224	姫路市別所町佐土4-2
和歌山サービス認定店	FAX	0734-46-3026	〒641-0021	和歌山市和歌浦東3-1-25
京都サービス認定店	FAX	075-352-2588	〒600-8322	京都市下京区西洞院通五条東南角小柳町513-2　五条久保田ビル1F
奈良サービス認定店	FAX	0742-36-8713	〒630-8132	奈良市大森西町21-26
福知山サービス認定店	FAX	0773-24-5375	〒620-0055	福知山市篠尾新町2-74　カマハチマンション

●中国・四国地区				受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く） ☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）
☆広島サービスセンター	FAX	082-248-9939	〒730-0041	広島市中区小町2-30　第二有楽ビル1F
岡山サービス認定店	FAX	086-244-8748	〒700-0975	岡山市今8-15-21
松江サービス認定店	FAX	0852-22-7779	〒690-0017	松江市西津田4-5-40　（有）テクピット内
福山サービス認定店	FAX	0849-31-2791	〒720-0815	福山市野上町3-12-9
鳥取サービス認定店	FAX	0857-29-1290	〒680-0061	鳥取市立川町5-240-1
徳山サービス認定店	FAX	0834-33-5759	〒745-0006	周南市花畠町3-11　森広事務所1F
高松サービスステーション	FAX	087-861-4841	〒760-0078	高松市今里町1-16-1
徳島サービス認定店	FAX	088-669-6076	〒770-8023	徳島市勝占町中須92-1　大松ジョリカ地下1階103号
高知サービス認定店	FAX	088-802-3321	〒780-0051	高知市愛宕町3-12-13　晃栄ビル1Ｆ
松山サービス認定店	FAX	089-951-6270	〒791-8067	松山市古三津5-10-35　商船ビル1Ｆ

●九州地区				受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く） ☆拠点は、土曜も受付　9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）
☆福岡サービスセンター	FAX	092-412-7460	〒812-0016	福岡市博多区博多駅南2-12-3
北九州サービス認定店	FAX	093-941-8354	〒802-0044	北九州市小倉北区熊本1丁目9-4　植田ビル1F
博多サービス認定店	FAX	092-461-1643	〒812-0006	福岡市博多区上牟田2-6-7
長崎サービス認定店	FAX	095-849-4606	〒852-8145	長崎市昭和1丁目12-10　クリスタルハイツ平野
熊本サービス認定店	FAX	096-331-3323	〒862-0918	熊本市花立5丁目14-17
大分サービス認定店	FAX	097-549-2420	〒870-0851	大分市大石町5丁目1-1
鹿児島サービスステーション	FAX	099-224-7692	〒892-0841	鹿児島市照国町3-21　第二大見ビル2Ｆ
宮崎サービス認定店	FAX	0985-27-3136	〒880-0821	宮崎市浮城町98-1

●沖縄県				受付　月～金　9:30～18:00（土・日・祝・弊社休業日は除く）
沖縄サービスステーション	TEL FAX	098-879-1910 098-879-1352	〒901-2122	浦添市勢理客4-18-1　トヨタマイカーセンター3Ｆ

平成18年 4月現在　　記載内容は、予告なく変更させていただくことがありますので予めご了承ください。

さくいん

本機を操作するときの主な用語や表示をまとめました。参照ページに進むと、それぞれに関連する情報があります。

五十音順

アルファベット / 数字順

<各窓口へのお問い合わせの時のご注意>
市外局番「0070」で始まるフリーフォン及び「0120」で始まるフリーダイヤルは、PHS、携帯電話などからは、ご使用になれません。
また、【一般電話】は、携帯電話・PHSなどからご利用可能ですが、通話料がかかります。

ご相談窓口のご案内

パイオニア商品の修理・お取り扱い（取り付け・組み合わせなど）については、お買い求めの販売店様へお問い合わせください。

商品についてのご相談窓口

● 商品のご購入や取り扱い、故障かどうかのご相談窓口およびカタログのご請求について

カスタマーサポートセンター（全国共通フリーフォン）

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～17:00（弊社休業日は除く）

●家庭用オーディオ/ビジュアル商品　■0070−800−8181−22　■一般電話　03−5496−2986

■ファックス　03−3490−5718

■インターネットホームページ　http://www.pioneer.co.jp/support/index.html
※商品についてよくあるお問い合わせ・メールマガジン登録のご案内・お客様登録など

修理窓口のご案内

修理をご依頼される場合は、取扱説明書の『故障かな？と思ったら』を一度ご覧になり、故障かどうかご確認ください。それでも正常に動作しない場合は、①型名②ご購入日③故障症状を具体的に、ご連絡ください。

修理についてのご相談窓口

● お買い求めの販売店に修理の依頼が出来ない場合

修理受付センター

受付時間　月曜～金曜9:30～19:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

■電話　0120−5−81028（ゴーハイオニア）　■一般電話　03−5496−2023

■ファックス　0120−5−81029

■インターネットホームページ　http://www.pioneer.co.jp/support/repair.html
※インターネットによる修理受付対象商品は、家庭用オーディオ/ビジュアル商品に限ります

沖縄サービスステーション（沖縄県のみ）

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00（土曜・日曜・祝日・弊社休業日は除く）

■一般電話　098−879−1910

■ファックス　098−879−1352

部品のご購入についてのご相談窓口

● 部品（付属品、リモコン、取扱説明書など）のご購入について

部品受注センター

受付時間　月曜～金曜9:30～18:00、土曜・日曜・祝日9:30～12:00、13:00～18:00（弊社休業日は除く）

■電話　0120−5−81095　■一般電話　0538−43−1161

■ファックス　0120−5−81096

平成18年4月現在　記載内容は、予告なく変更させていただくことがありますので予めご了承ください。　VOL.017

JIS C 61000-3-2適合品　D50-5-10-1_A_Ja

JIS C 61000-3-2適合品とは、日本工業規格「電磁両立性−第3-2部：限度値−高調波電流発生限度値(1相当たりの入力電流が20A以下の機器)」に基づき、商用電力系統の高調波環境目標レベルに適合して設計・製造した製品です。

パイオニア株式会社　〒153-8654 東京都目黒区目黒1丁目4番1号

<06E00001>　<ARA7224-A>